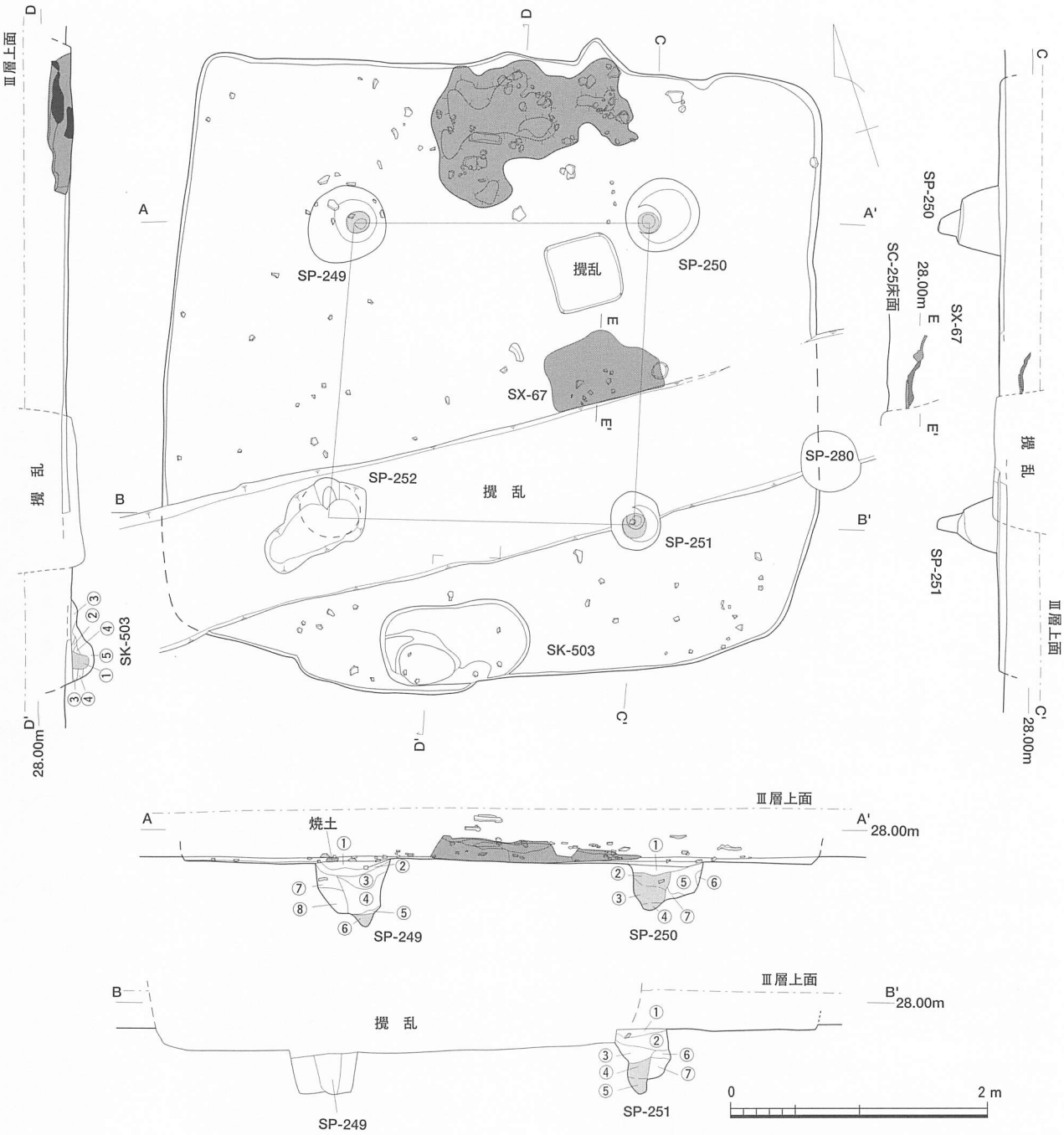

Fig. 84　SC-25、SX-67遺構実測図（縮尺1/50）

2㎜の礫が混じる暗褐色砂質土に、明黄褐色シルト小塊が含まれる。これを埋める②～⑤層は、いずれも小礫が混じる。②層は明黄褐色砂質シルトで、暗褐色砂質土のレンズ状ブロックがみられる。③層は暗褐色砂質シルト。④・⑤層は暗褐色砂質シルトで、④層には明黄褐色シルトが混じり、それが⑤層では小さな塊となる。

SC-25の埋土中からは、比較的多くの遺物が出土している。略完形や大形の破片に復元できるものもある。しかし、土師器の甕の小片（Fig. 85-7）が床面から出土した以外、いずれも小片で床面から浮いた状態で出土している。SC-25が廃絶した後に流入した遺物と考えられる（Fig. 85-1～11）。

1～5は須恵器、6～11は土師器である。1・2は坏身で、比較的長めの口縁部が内傾しながら立ち上がる。3（Pl. 20-⑦）は、坏蓋と考えるには口径が大き

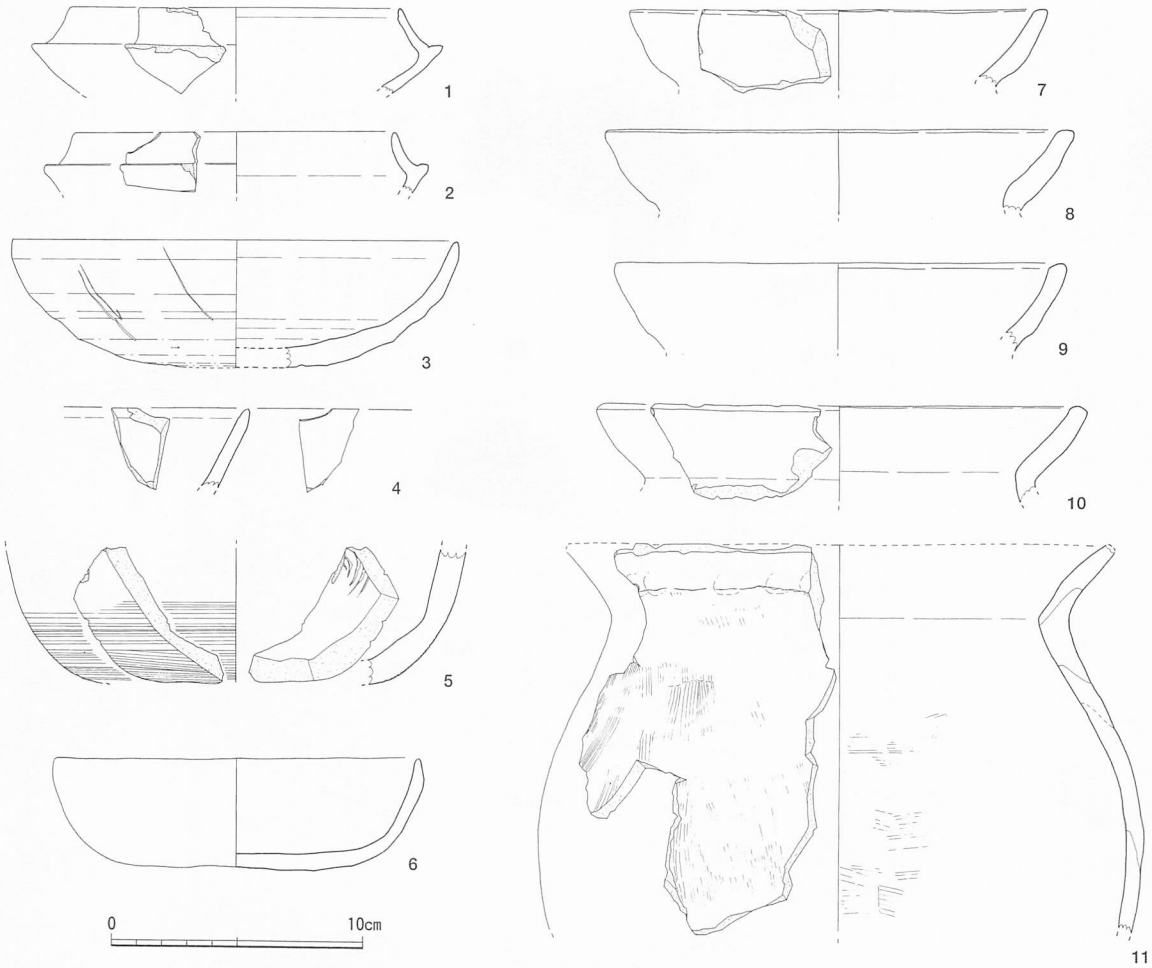

Fig. 85　SC-25埋土出土遺物実測図１（縮尺１/３）

いため、大型鉢とした。外面にはヘラ記号と考えられる細く浅い条線が３条みられる。４は身が深めの鉢の細片、５は壺の底部破片である。

６（Pl. 20-⑧）は土師器の鉢で、比較的大きな破片で出土した。７～11は、土師器の甕である。７～10は口縁部内面がわずかに内湾しながらのびる。いずれも細片で、古墳時代中期の遺物である。11（Pl. 20-⑨）は、比較的大形の破片に復元でき、口縁部が反転する「く」字形口縁をもつ。１・２・６の須恵器とともに、古墳時代後期に比定できる。

石器類も出土している（Fig. 86-１～３）。１は緑色片岩の扁平片刃石斧の基部の破片と考えられる。２は横断面が蒲鉾形の全長18.1cmの緑色片岩。径３～５cmの柱状の緑色片岩を縦に半截したもので、厚さ３cmほどを測る。下端部の上面には部分的に研磨痕が残り、さらに端面には敲打痕を観察できる。弥生時代の扁平片刃石斧の素材の可能性があり、これを敲石として再利用したものと考えられる。１・２は弥生時代の遺物の混入品。３は上面中央と端部に敲打痕が残る砂岩の円礫を利用した敲石である。

この他、鉄刀子の茎部の破片と考えられる鉄器破片（Fig. 89-９）、親指先大の鉄滓の破片（Fig. 89-10）が出土している。これらは、SC-25の廃絶後に埋土に流入した古墳時代後期の遺物と考える。

竈内の焼土を採集して水洗したが、マツ属の樹木の炭化材やサヌカイトの微細石片が出土した。炭化材は薪燃料と考えられる。第Ⅳ章を参照されたい。

主柱穴のSP-249の埋土中からは、須恵器の胴部小片１点、弥生土器や土師器の胴部細片～小片10数点が出土している。SP-250では、掘り形埋土および上部流入土層から、弥生土器の胴部細片～小片10点ほど、柱痕内から弥生土器の胴部小片２点が出土。他に、弥生土器の胴部小片３点がある。SP-251からは、弥生土器もしくは土師器の胴部小片～細片が10点ほどと、須恵器坏蓋の細片１点が出土した（Fig. 87-１）。口縁端部を摘むように回転横ナデするため、内面に小さ

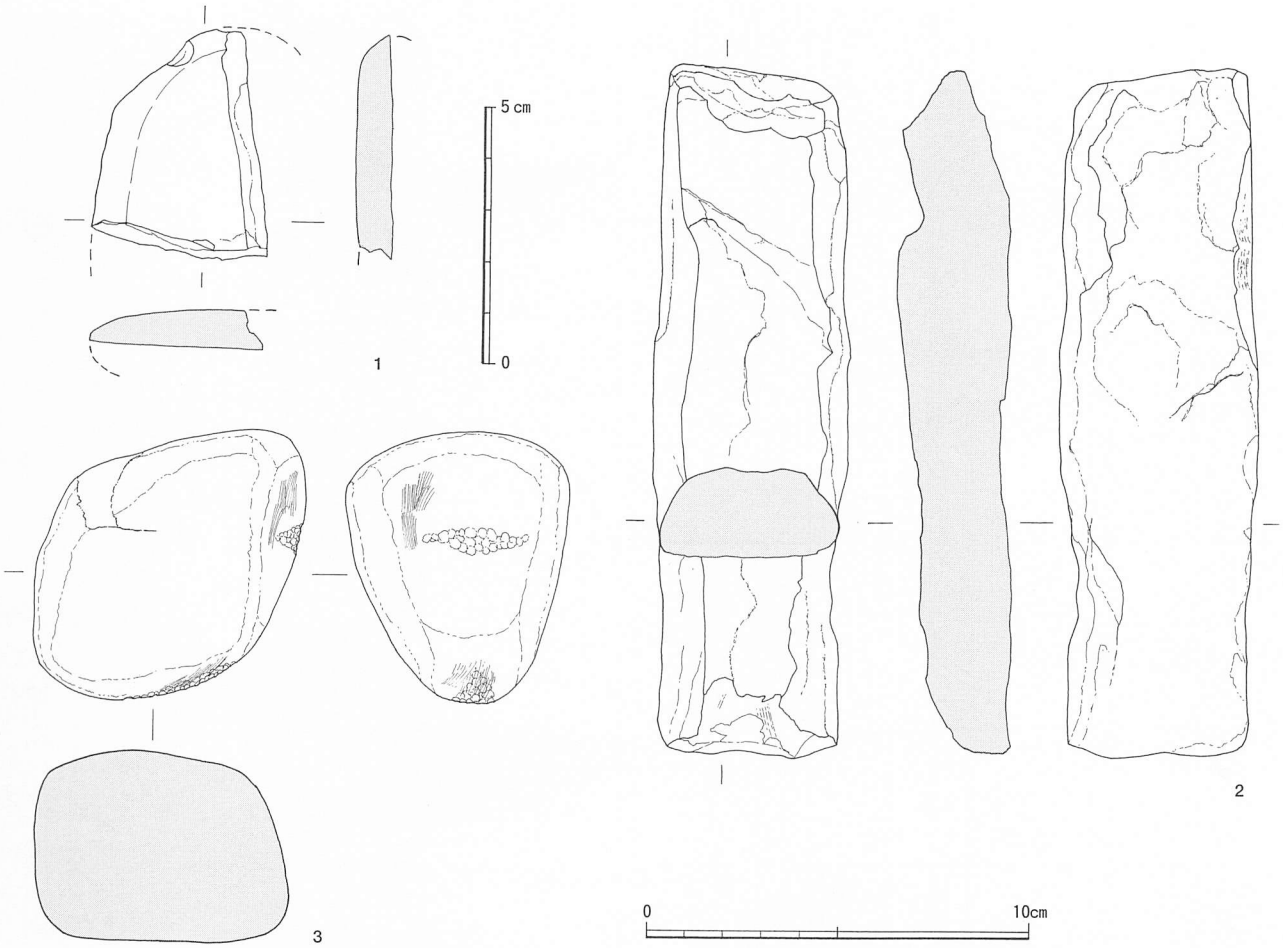

Fig. 86　SC-25埋土出土遺物実測図２（縮尺２/３、１/２）

な段状の窪みが巡る。

また、南壁沿いに位置しSC-25に付属する出入り口に関連する土壙と考えたSK-503では、掘り形埋土から、高坏の口縁部細片、坏の胴部小片、弥生土器や土師器の胴部細片～小片10数点が出土した。他に、埋土中として取り上げた遺物として、須恵器坏身（Fig. 87-２）がある。口径が比較的大きく、口縁部の立ち上がりは内傾し、長めである。他に、弥生土器や土師器の胴部小片～細片８点ほど、土師器の甕口縁部小片が出土している。

一方、SC-25上部のⅢ層からは、比較的多くの遺物が出土している。弥生土器が多いが、ここでは埋土出土遺物と同じ古墳時代後期の遺物を報告する（Fig. 88-１～30）。１～20は須恵器、21～30は土師器である。

１～３は坏蓋で、天井部が低く全体に丸みをおびた体部をもつ。２は凹線で天井部と口縁部が区分される。口縁内面には浅く細い沈線が１条巡る。口縁部外面には、篦状工具を押さえつけて施された短斜線が部分に

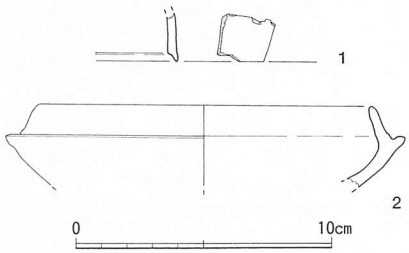

Fig. 87　SC-25内SK-503、SP-251出土遺物実測図
（１：SP-251、２：SK-503、縮尺１/３）

みられる。３は天井部と口縁部の境に沈線状の浅い段が巡る。口縁端部を回転横ナデするため、内面に浅い段状の小さな面が形成されている。４・５は、これらの蓋に伴う坏身である。口縁部の立ち上がりは比較的長めで内傾する。これに対して、６・７の坏身は、相対的に小さく、口縁部の立ち上がりは厚く短い。８～10は短脚の高坏である。脚端部は、回転横ナデで、窪みのある面ができたり、小さく折り曲げられる。11・

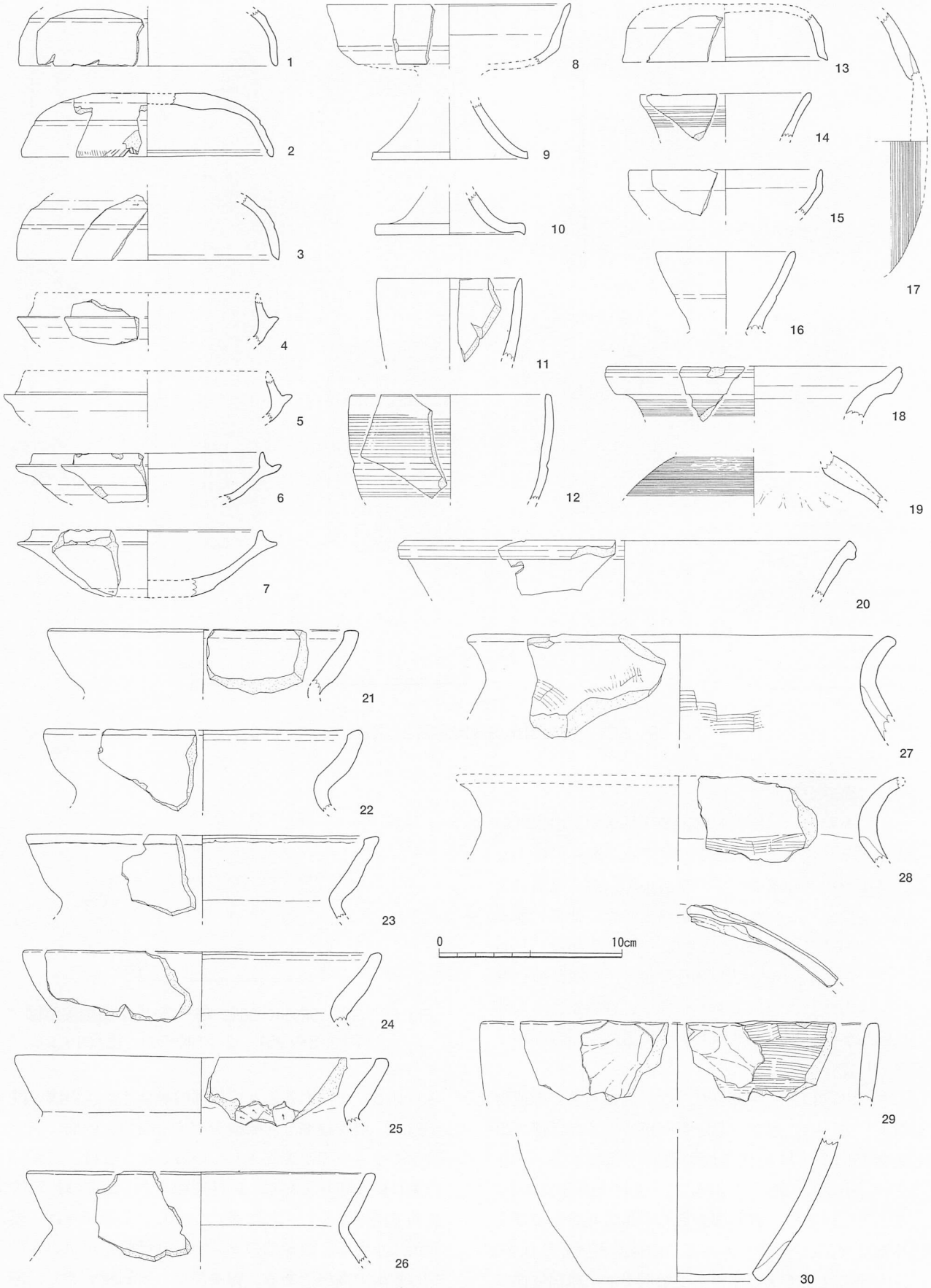

Fig. 88　SC-25上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺 1 / 3 ）

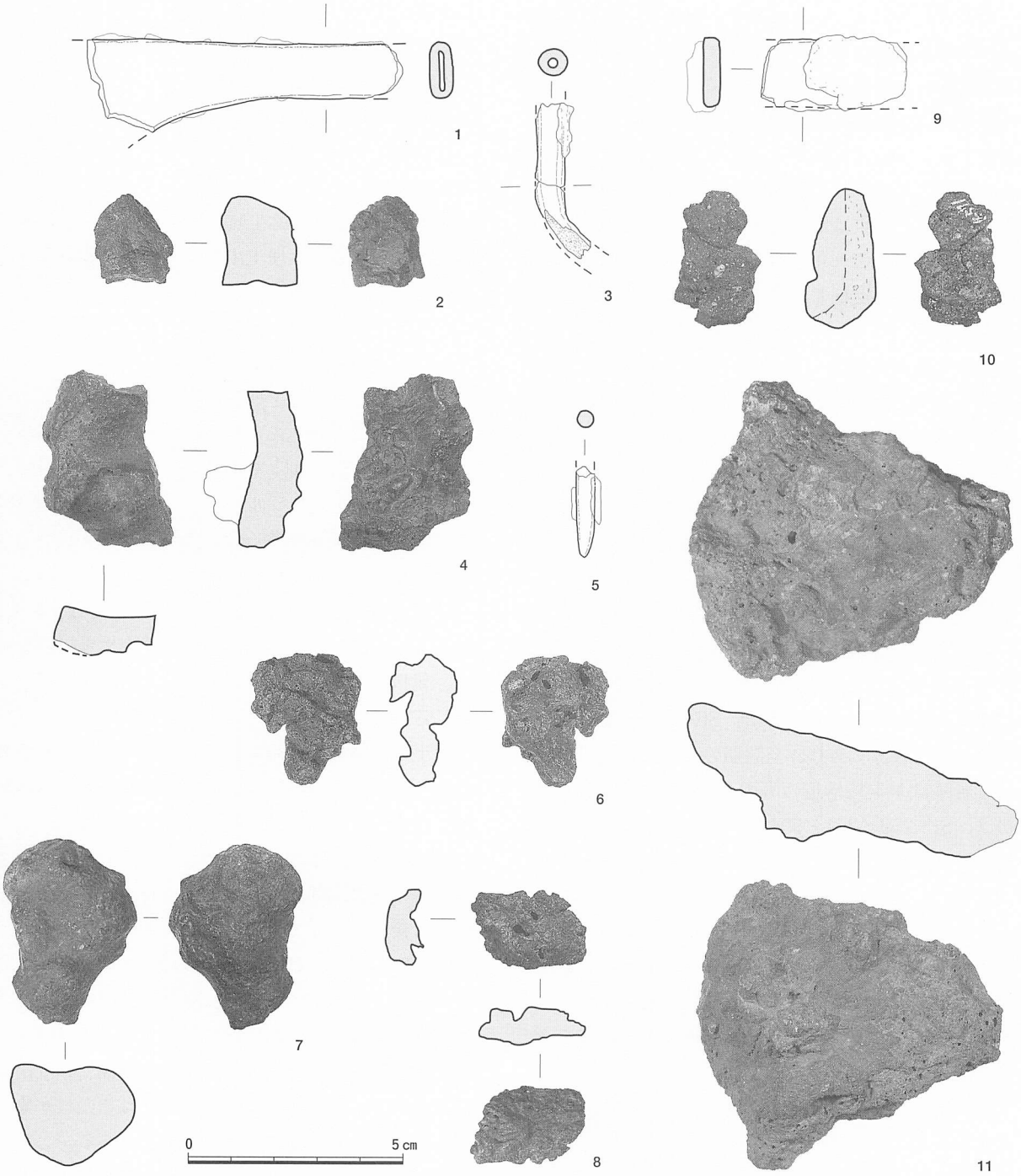

Fig. 89　SC-15・18・25・27・30、SP-444・497出土遺物実測図（縮尺 2 / 3 ）

12は身が深い碗である。11は内外面を回転横ナデし、口縁端部を尖らせる。12は胴部中位に幅が広いが浅い凹線が１条巡る。外面はカキメ調整。13は短頸壺の蓋である。口縁端面には、回転横ナデで窪みを持つ小さな面ができている。14は長頸壺の口縁部細片。15は、径から蓋の可能性も考えたが、深さがありすぎる。身の深い埦である可能性もあるが、器種は不明。16は提瓶もしくは平瓶の口頸部で、中位に浅いが幅がひろめの凹線が１条巡る。17は、SC-21で出土例（Fig. 79-８）と同じく、胴部の成形後、孔をあけてタタキ調整を施し孔を塞ぐ。横瓶の胴部端部と考えた。18～20は壺の口縁部と肩部の破片。18の口縁部外面には、細い沈線が巡る。20は口縁部を外面に肥厚させて、横ナデで浅い凹線状の沈線を施す。１～16は古墳時代後

期に比定できる。

21～28は土師器の甕である。21～25は、口縁部がやや内湾気味、あるいはほぼ直線的にのびる「く」字形口縁部で、口縁先端を内側に摘み出すように強く横ナデ調整する。26も口縁部がほぼ直線的にのび、端部が丸くおさめられるが、口縁内面の上半部分を強く横ナデしており、その点は21～25と共通する。古墳時代中期に比定できる。これらに対して、27・28は口縁部が胴部から緩やかに反転しながらのびる甕で、1～10の須恵器に伴う古墳時代後期の土師器甕と考える。29・30は、土師器の甑である。29の口縁部には、内外に薄く不整形の粘土を貼り付けている。成形時に生じた亀裂を補修したものか。

この他、小さな碗状の鉄滓破片が出土している(Fig. 89-11)。

以上、SC-25は、弥生時代や古墳時代中期の遺物の混入がみられるが、埋土出土の遺物から考えると、古墳時代後期に廃絶された竪穴式住居跡である。

SC-28号竪穴式住居 (Fig. 90～94、PL. 7・20・21)

CZ・DA-12・13区に位置する隅丸長方形の竪穴式住居跡である(Fig. 90、Pl. 7)。長軸長5.64m、短軸長4.54mを測る。SC-30を切る。上部のⅢ層中位でSX-68・69が出土した。埋土は砂礫が多く混じる褐色砂質シルトで、床面近くには小指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。

床面では、SP-258・259・260・261・264・265・266・291・322・325・594・597が出土した。この中で、立柱痕跡を確認できたのは、SP-258・259・260・261・264・322・594などである。SC-28は古墳時代後期の竪穴式住居跡であり、当該期の一辺5m規模の竪穴式住居跡は4本柱構造のものが一般的であるので、当初は、SP-259・261・594と、SD-3で破壊されたと考えられる柱穴を加えて、4本柱構造を復元していた。しかし、SP-594では立柱痕跡は確認できず、SP-259は、古墳時代後期の遺構が共通してもつ埋土に砂礫が多く含まれる特徴はみられない。さらに、配置関係からSD-3で破壊されたと柱穴を想定するにも無理がある。そこで、SP-264・322の2本柱構造を考えた。柱間は3.85mを測る。

また、床面中央ではSK-262が出土した。柱穴であるSP-264・322のほぼ中央に位置する。SC-28に付設された施設の可能性があるが、性格は不明である。

柱穴のSP-264は、長径73cm、短径64cm、深さ46cmの長円形の掘り形をもち、径24cmの立柱痕跡を検出した。先端を残して折り取られている。折り取り後には、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトの①層、黒褐色シルトに親指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる②層が流れ込む。立柱痕跡にあたる③層は黒褐色シルトである。

SP-322は、長径63cm、短径55cm、深さ25cmの不整な長円形の掘り形の中で、径22cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は先端部を残して折り取られている。立柱折り取り後に流れ込んだ①層は、小礫がとくに多く混じる黒褐色砂質シルトである。立柱痕跡の②層は小礫が少量混じる黒褐色シルト。掘り形埋土上部の③層は、黄褐色砂質シルトを多く含む黒褐色シルト、下部の④層にはⅣ層の淡黄褐色砂質土が詰め込まれていた。

床面中央で検出したSK-262は、長さ98cm、幅82cm、深さ5cmの浅い方形土壙である。埋土は黒褐色シルトで、親指先大～3cm大の黄褐色シルト塊がかなり多く混じる。

埋土の遺物には、須恵器・土師器・弥生土器がある(Fig. 91-1～10)。ほとんどが床面から若干浮いた状態で出土している。いずれも、SC-28が廃絶された後に、流れ込んだり投棄された遺物と考えられる。2の須恵器の壺の胴部破片は、上部のⅢ層下部で出土した破片と接合・復元できた。

1 (Pl. 20-⑩)は須恵器の高坏で、坏部下半に浅い段が巡る。器体は歪み、焼成も不良である。2 (Pl. 21-①)は、形成中に底部に5～6cmの穴をあけて、指を差し込み胴部下半の調整を行った後、粘土円盤を貼り付ける。そのため、胴部内面には指頭痕が集中してみられる。外底面には、不明瞭ではあるが、粘土接合線が残る。7は土師器の甕の口縁部破片。1・2とともに、古墳時代後期のものである。

3～6・8～10は弥生土器。3は複合口縁壺の口縁部破片で、外面に6条の平行沈線文、その下方に4条一単位で櫛状工具を「メ」字状に交差させて、「X」字文を施文。器壁の芯部には、黒化層が残る。4の壺は、頸部の付け根に断面台形の突帯を貼り付け、平織りの布を巻いた指先を押捺して刻目を施す。5・6は高坏。5の外面には、沈線状の凹線文を6条巡らし、その下方に篦状工具で短く細い「ノ」字形に短斜線文

Fig. 90　SC-28、SX-68・69遺構実測図（縮尺１/50）

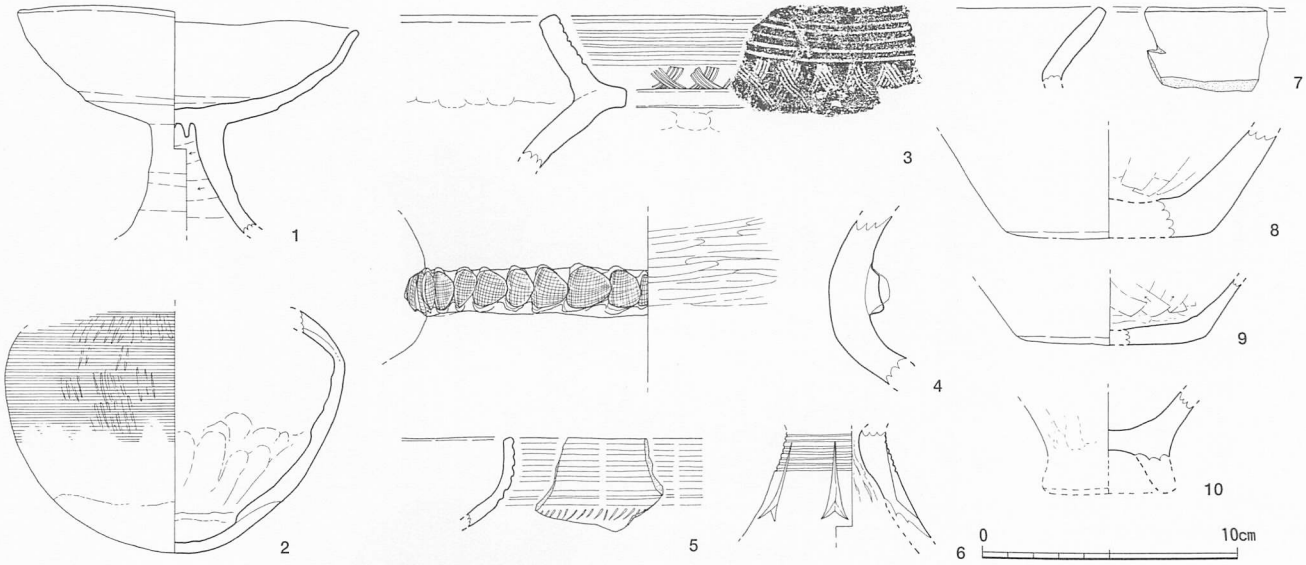

Fig. 91　SC-28埋土出土遺物実測図（縮尺１/３）

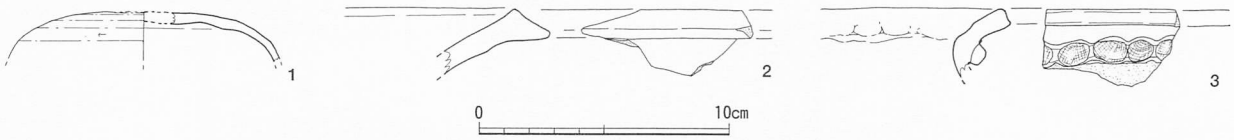

Fig. 92　SC-28柱穴SP-264出土遺物実測図（縮尺１/３）

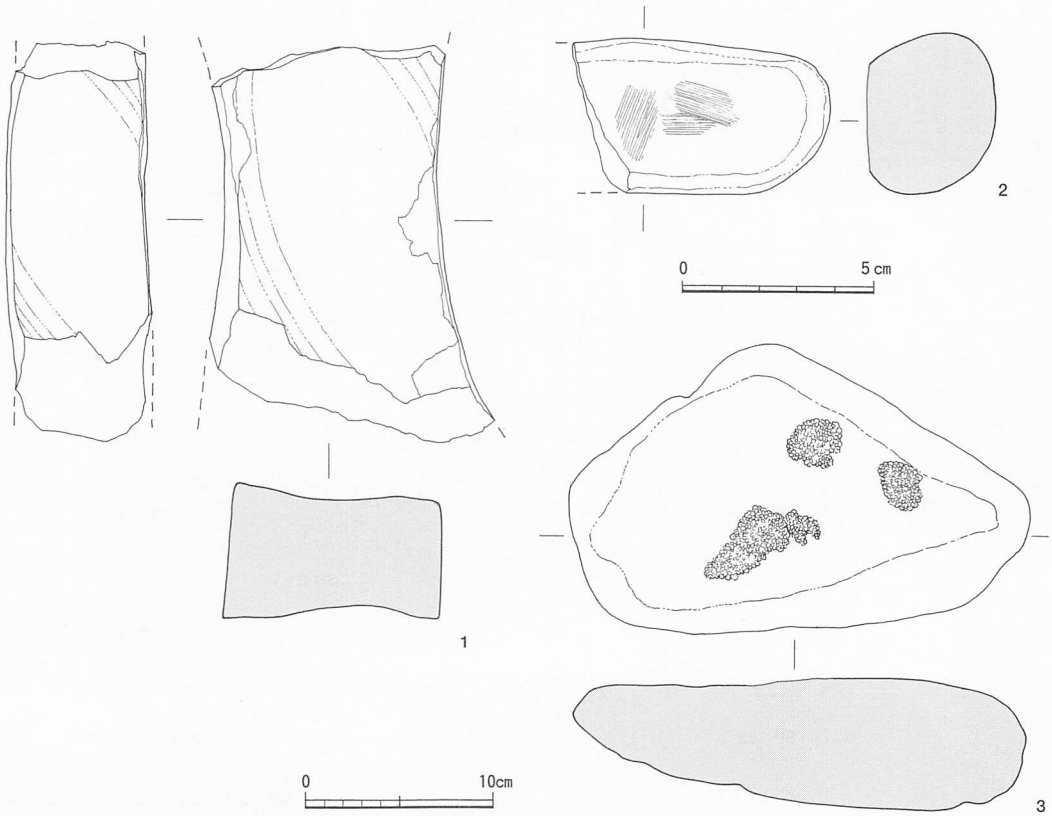

Fig. 93　SC-28埋土、柱穴SP-264出土遺物実測図（縮尺１/２、１/４）

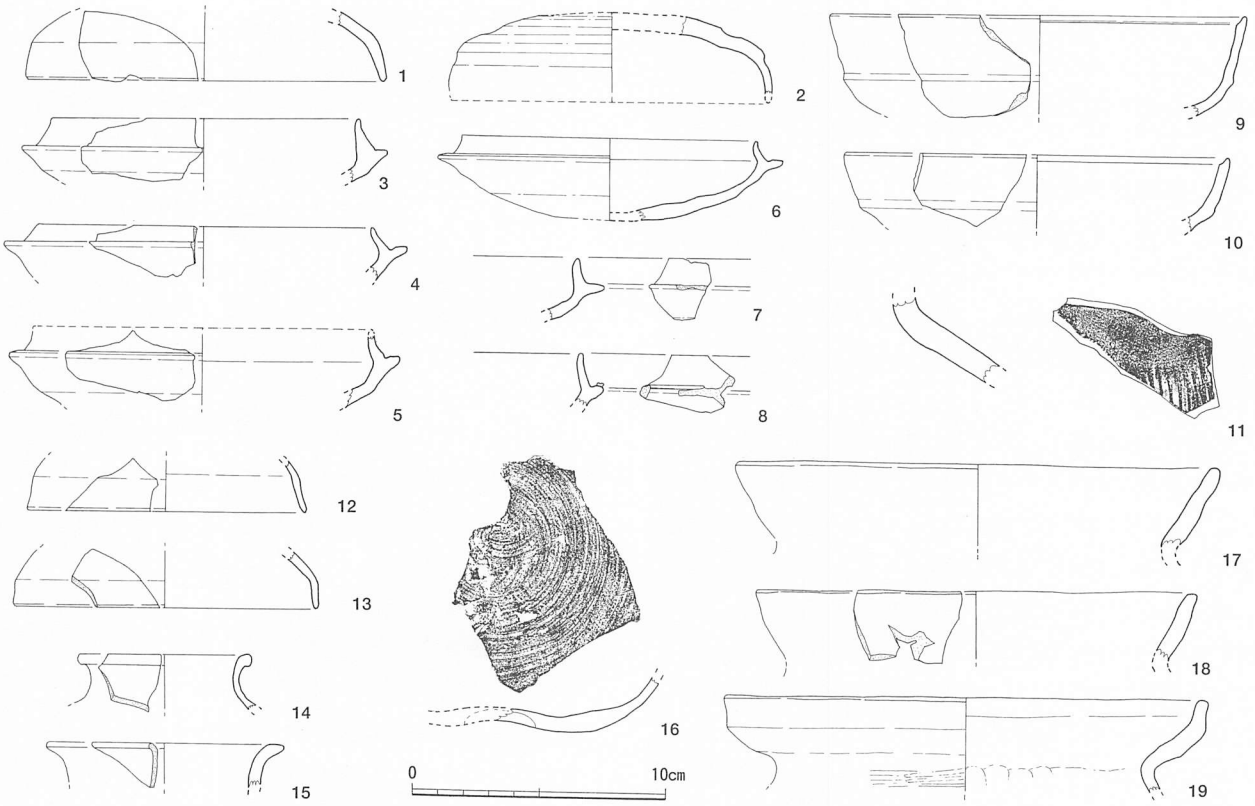

Fig. 94　SC-28上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

を施す。6の脚部の上半には7条の篦描き沈線文を巡らし、下方に未貫通の矢羽透孔を追加する。8・9は外底面が凸レンズ状の不安定な底部、10は裾部が「ハ」字形に踏ん張る上げ底である。4～6・10は弥生時代中期後葉～後期初頭、3・8・9は後期中葉に比定できる。

この他、石英粗面岩製の砥石の破損品（Fig. 93-1）や、花崗岩を利用した台石（Fig. 93-3）、花崗岩や砂岩の円礫も出土している。これらも、SC-28の埋没過程で投げ込まれた遺物である。また、土層観察用に残したベルトの埋土部分を取り上げて水洗したところ、炭化米やサヌカイトの微細石片が出土した。炭化米については第Ⅳ章を参照されたい。

柱穴のSP-264からは、細片ではあるが、比較的多くの遺物が出土している（Fig. 92-1～3、Fig. 92-2）。Fig. 92-1は須恵器の坏蓋の天井部、2は口縁端部を横ナデで引き伸ばした壺の口縁部、3は「く」字形口縁の甕である。2は上部流入土である①・②層から出土。1は古墳時代後期、2・3は弥生時代後期。Fig. 93-2は磨石の欠損品。円柱状の礫を含む砂岩の一面が平坦となり、擦痕が残る。この他、須恵器坏蓋小片、土師器や弥生土器の胴部小片がある。

SK-262では、埋土中からは、弥生土器の甕胴部破片や、壺もしくは鉢の胴部小片が数点出土しているが、いずれも細片で、図化できるほどの破片はない。

埋土と比べて、SC-28上部のⅢ層部分からは比較的多くの遺物が出土している。前述したように、埋土出土の破片と接合・復元できたものがあるので、ここでは古墳時代の遺物を選び報告しておく（Fig. 94-1～19）。1～16は須恵器、17～19は土師器である。1・2は坏蓋、低く丸みをおびた天井部をもつ。2は天井部と口縁部の境には、幅の広い凹線が巡る。3～8は、身がやや浅く、内傾する口縁部の立ち上がりは長めである。坏の中で、1・3～5は小片のために口径は不確実。6（Pl. 20-⑪）は比較的大きな破片に復元できた。12・13は薄手のつくりで、蓋と考えた。9・10は高坏の坏部破片。9は坏部の中位に回転横ナデで凸線をつくり出す。10は浅い段状の凹線が巡る。16・17は「く」字形口縁をもつ甕で、口縁部内面がわずかに湾曲する。19は二重口縁の甕である。これらの遺物は、9の高坏と17～19の甕が古墳時代中期、他は古墳時代後期のものと考えられる。

このように、埋土出土の遺物には、SC-28の廃絶後に流入したものばかりであるが、後述するSC-30が古墳時代後期の竪穴式住居跡で、これをSC-28が切ると、埋土中の遺物でもっとも新しい須恵器の高坏（Fig. 91-1）を参考とし、SC-28は、古墳時代後期の時期幅で捉えることができる。

SC-30号竪穴式住居（Fig. 95～98、Pl. 7・21・24）

CZ・DA-12・13区に位置する隅丸方形の竪穴式住居跡である（Fig. 95、Pl. 7-2）。SC-28、SP-575・576、SD-3に切られる。西壁近くの埋土下部でSX-66が出土した。SC-30が埋没する過程で投棄された焼土である。

東西幅4.6m測り、床面には貼り床が施される。床面の北東部でSP-610を検出し、貼り床を除去した後に北西部でSP-611を確認した。ともに立柱痕跡は確認できなかったが、配置関係からSC-30の柱穴と判断した。また、SC-30南側のSD-3下底面で、SP-531・532・562・580などが小穴が出土している。その中で、埋土が礫混じりの暗褐色砂質土で、SP-610・611と深さがほぼ共通するものとして、SP-532・580がある。しかし、SP-580からは、古代末～中世前半の須恵質土器の胴部片が出土しており、SC-30の柱穴とは考えられない。ここでは、南東部の柱穴を欠き、柱並びが矩形であるが、SP-532・610・611から構成される4本柱構造を復元しておく。柱間隔は、SP-532・611間が2.56m、SP-610・611間が1.9mを測る。

東西の土層断面では、①～⑪層が住居跡本体の埋土部分、⑫～⑲層は貼り床部分にあたる。埋土の大部分を占める①～③・⑥層は、小礫が多く混じる褐色砂質シルトで、炭化物や焼土が多く含まれ、小指先大の拉げたにぶい黄褐色砂質シルト塊が下半部にみられる。④層はにぶい黄褐色砂質シルトのブロック。⑤層もにぶい黄褐色砂質シルトのブロックで、暗褐色砂質シルトが混じり、炭化物が多く含まれる。⑦～⑪層は東壁沿いに流れ込んだ土層群である。⑦層は礫が少量混じる褐色砂質シルトで、黄褐色シルトの小塊が多い。⑧層は礫が少量混じる褐色シルトで、黄褐色シルトがまばらに混じる。⑨層は黄褐色シルトの塊。⑩層は褐色シルトに小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。⑪層は褐色シルトである。

貼り床部は暗褐色シルトの土層群からなる。⑫・⑮・⑰・⑲層には砂礫が混じる。⑫・⑭・⑮・⑱層には、親指先大の拉げた黄褐色シルト塊が含まれる。⑯・⑱層には、黄褐色シルト塊が特に集中してみられる。⑬層は褐色シルトである。

柱穴と考えたSP-532は、径18～20cmの略円形の掘り形をもち、埋土は径1～2mmの礫がやや多く混じる暗褐色砂質土である。SP-610は、長径35cm、短径30cm、深さ29cmの不整な長円形の掘り形をもち、埋土は小礫が少量混じる暗褐色砂質シルトに親指先大のにぶい黄褐色シルト塊が多く含まれる。SP-611は、貼り床下底面での検出であるが、長径32cm、短径25cmの不整な長円形の掘り形をもち、埋土は砂礫混じりの暗褐色砂質シルトである。

前述したように、SC-30の埋土の大部分は①～③・⑥層で、調査時には埋土を上部・中部・下部に人工的に分層して精査したが、上下関係なく弥生土器・土師器・須恵器が出土している。最も出土量が多いのは弥生土器であるが、古墳時代後期の須恵器と土師器が混じる。いずれも小片であり、SC-30が廃絶した後の埋没過程で流入した遺物と考えられる（Fig. 96-1～15）。

1～3の須恵器の坏蓋で、天井部が低く丸みをおびる。2（Pl. 21-②）は口縁屈曲部に回転横ナデで細く低い凸線が巡る。3の口縁端部は、摘むように回転横ナデを施し浅い段をもつ小さな面ができる。古墳時代後期に比定できる。

他は弥生土器である。4・5は弥生時代中期後葉の口縁部が胴部から「く」字形に屈曲する壺の口縁部。5は口縁端部を強い横ナデで拡張して2条の凹線文を施す。6は複合口縁壺の口縁部破片。外面には幅広の沈線間に刷毛目工具も小口部角を押捺する列点文を施文し、端部に3条一単位の山形文を篦状工具で施文する。7は口縁端部上部に粘土を貼り付けて拡張し、外面に凹線文を4条巡らす。凹線の間隔は一定せず、1条ずつ引いている。8・9は甕の口縁部。8は、拡張させた口縁端面に2条の凹線文を施す。1条は幅が広く深いが、他の1条は細めで浅く沈線状である。10は坏部上半が「L」字形に立ち上がる高坏である。11は壺、12～14は甕の底部である。15は手捏ねでの壺のミニチュア品。4・5・7・8・10・11～14は弥生時代中期後葉～後期初頭、6・9は後期中葉の遺物である。

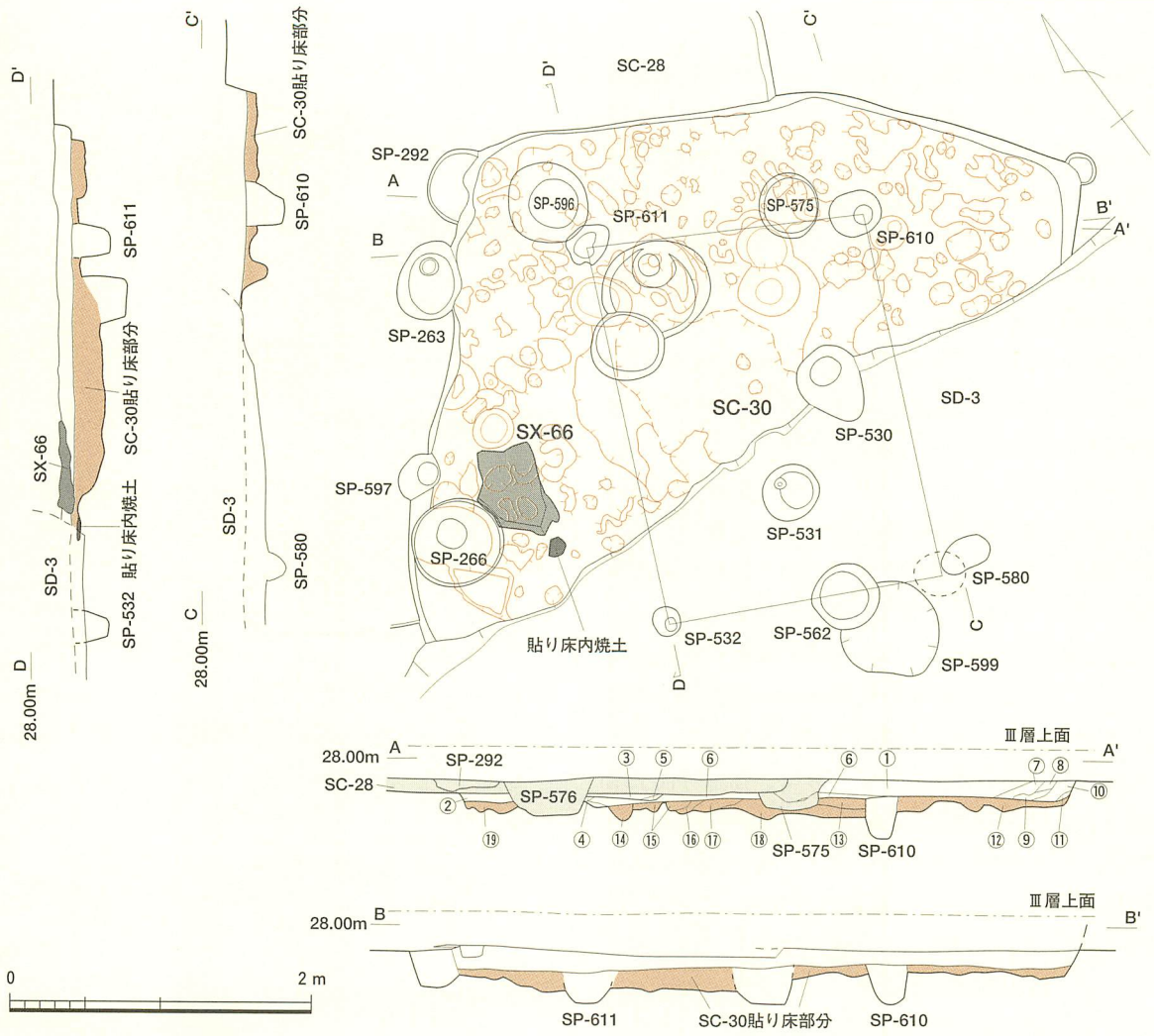

Fig. 95　SC-30、SX-66遺構実測図（縮尺１/50）

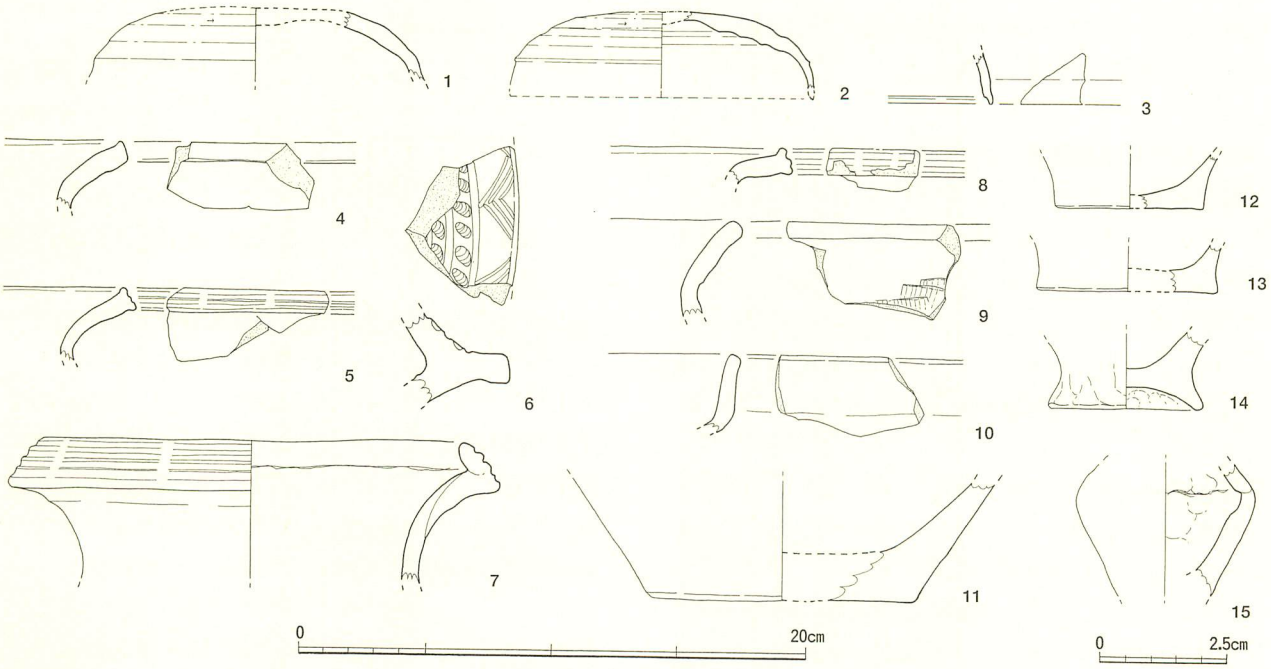

Fig. 96　SC-30埋土出土遺物実測図（縮尺１/３、２/３）

この他、床面上から緑色片岩でつくられた石庖丁の破損品（Fig. 97-１、Pl. 24-⑥）が出土している。片刃の直線刃の石庖丁である。また、器種は不明であるが磨製石器の未成品の破損品（Fig. 97-２）が出土。これらは弥生時代の遺物で、混入品である。西半部の埋土から鉄滓の小片が出土している。古墳時代後期の遺物と考えられる。

貼り床部からも、弥生土器・土師器・須恵器の細片、焼土塊などが出土している。いずれも小片で、貼り床の掘り形地業を行う際に、混入したものである（Fig. 98-１～８）。１～３は須恵器。１は天井部と口縁部の境いに回転横ナデで段を巡らす。２も坏蓋で、口縁端部を摘むように回転横ナデするため、内面に破段状の沈線が巡る。埋土出土のものと比べてやや古く、古墳時代後期の遺物であり、SC-30の上限を示す。以外は弥生土器である。４は複合口縁壺の口縁部で、外面には４条一単位の波状文を櫛状工具で施文する。弥生時代後期中葉の遺物である。５～８は、弥生時代中期後葉の甕および壺である。

また、土層観察用ベルトの一部を、埋土部分と貼り床部に区分して取り上げて水洗選別を行ったところ、炭化米やサヌカイトの微細石片が出土した。炭化米については第Ⅳ章を参照されたい。

柱穴であるSP-532からは、土器細片数点、径0.5～２㎝の角張った炭化物片が多く出土している。

以上、埋没の最終段階を示す埋土中に流れ込んだ須恵器と、住居の上限を示す貼り床部出土の須恵器から、SC-30は古墳時代後期と判断した。

SC-33号竪穴式住居（Fig. 99～101、Pl. 6・21）

調査区北壁沿いのCZ・DA-14・15区に位置する竪穴式住居跡である（Fig. 99、Pl. 6-３）。やや胴張りの隅丸方形と考えられるが、西側部分が攪乱で破壊され、北半部も調査区外にのびるため、規模は不明である。SK-32、SP-409・500に切られ、SK-31・39を切る。また、Ⅳ層上面でSC-33を検出する際に、SX-63を確認した。

床面で、SP-499・537・538・547～550の大小の小穴を確認した。その中で、SP-499で径17㎝の立柱痕跡を確認でき、これを柱穴と考えた。

住居跡埋土は、径３～５㎜の礫が混じる暗褐色砂質シルトで、径１～２㎝の拉げたにぶい黄褐色シルト塊が含まれる。

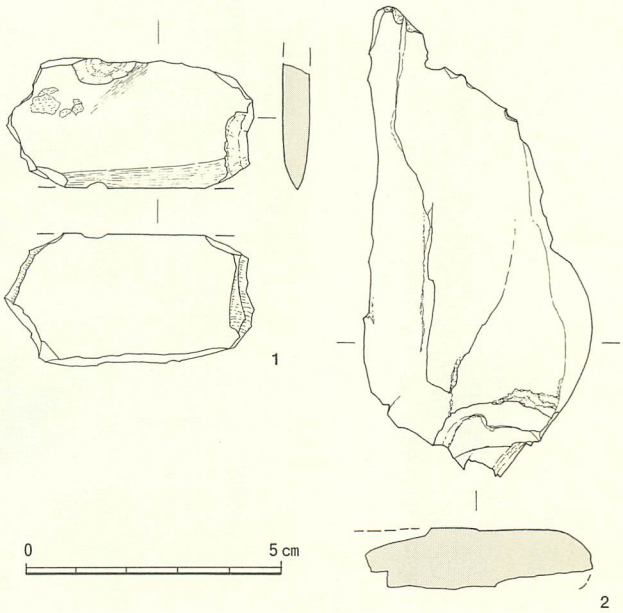

Fig. 97　SC-30出土遺物実測図（縮尺２/３）

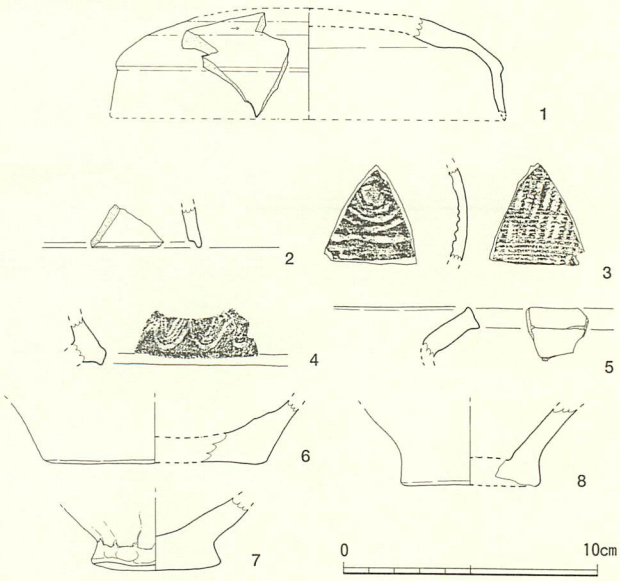

Fig. 98　SC-30貼り床部出土遺物実測図（縮尺１/３）

柱穴と考えたSP-499は、径34～37㎝、深さ20㎝ほどの円形の掘り形をもつ。立柱痕跡は先端がやや尖り気味であり、①・②層がこれにあたる。①層は上部に径２～３㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土、②層は暗褐色砂質土で立柱の先端部分にあたる。③～⑥層は掘り形埋土。③層は径２㎜の礫が少量混じる暗褐色砂質土で、褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが多くみられる。④・⑤層は暗褐色砂質土で、④層に礫が混じる

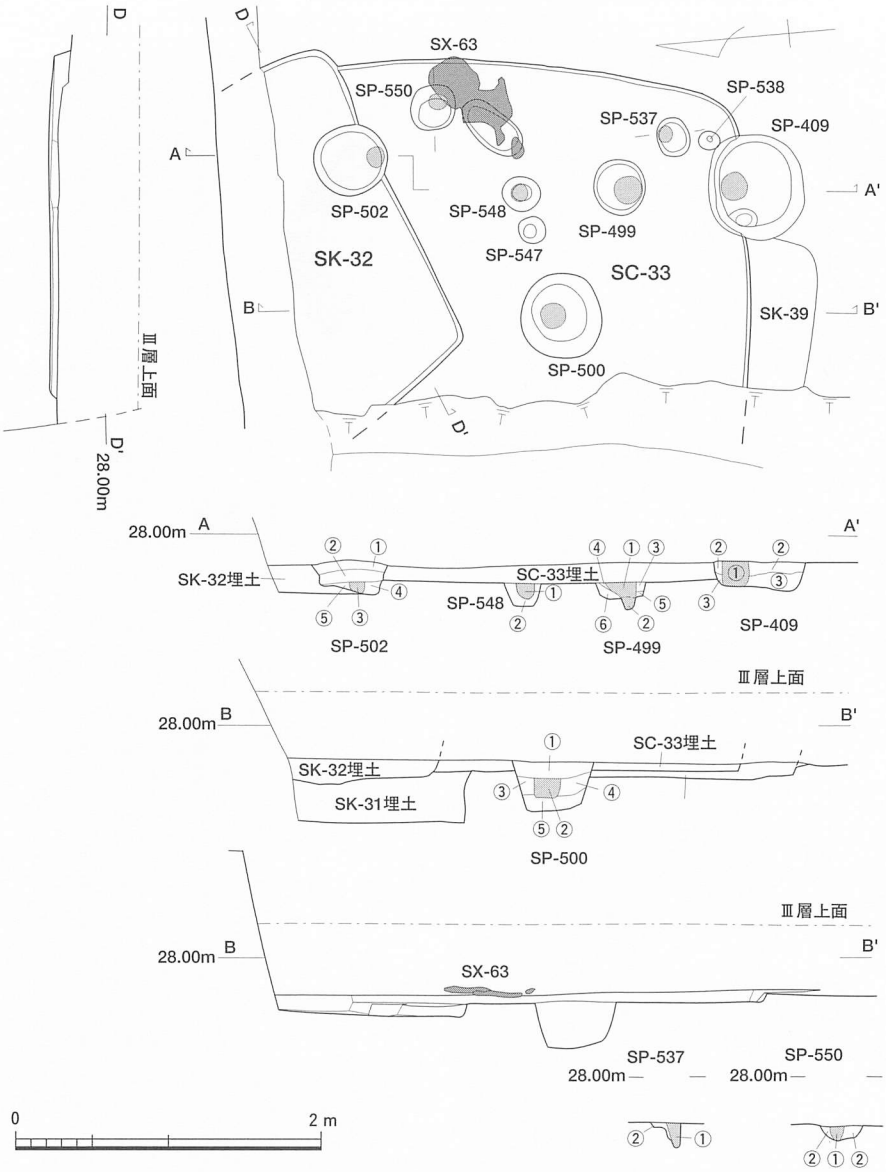

Fig. 99　SC-33、SK-32、SX-63遺構実測図（縮尺１/50）

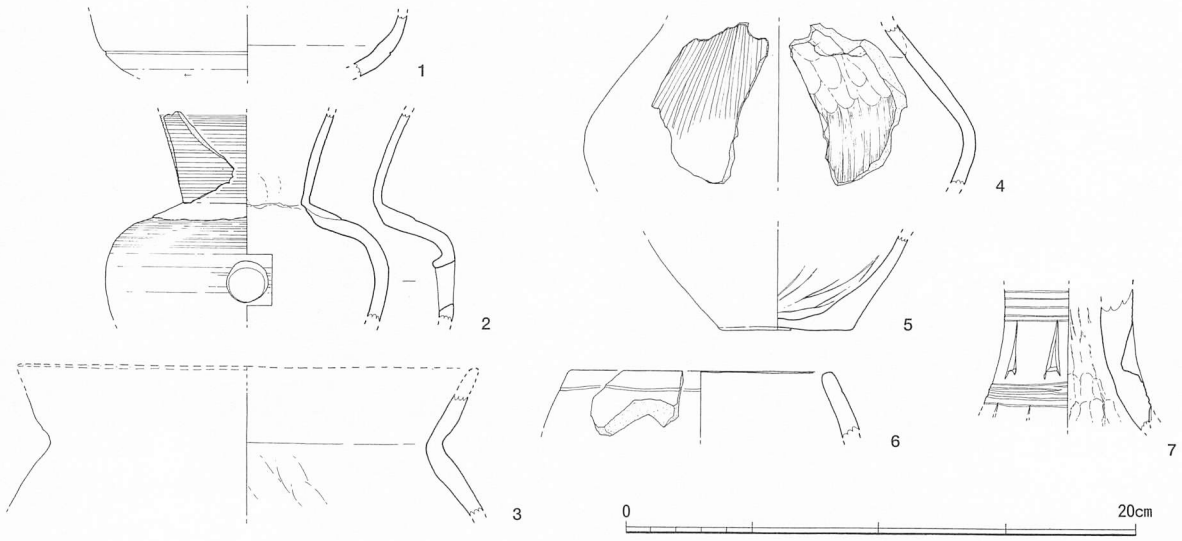

Fig. 100　SC-33埋土出土遺物実測図（縮尺１/３）

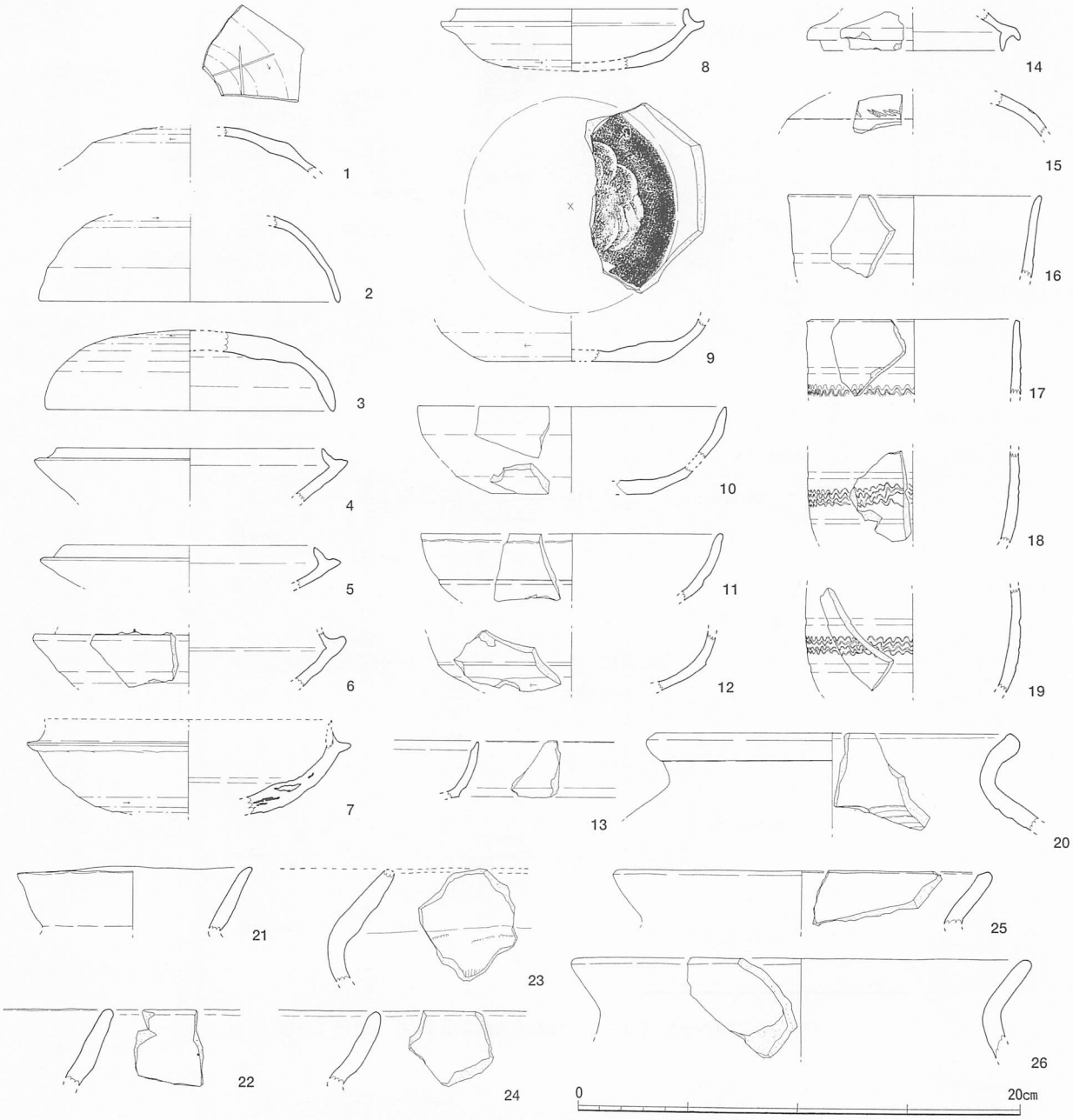

Fig. 101　SC-33上部Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

が、⑤層には礫はほとんどみられない。⑥層は褐色シルトで、径2～3㎝の楕円形の暗褐色砂質土塊が少量混じる。

埋土から出土した遺物には、須恵器・土師器・弥生土器がある。いずれも小片であり、SC-33が廃絶され埋没中に流入した遺物である（Fig. 100-1～7）。1は高坏の坏部で、中位に浅い段が巡る。2の須恵器甕は、SC-33上部のⅢ層から出土した破片と接合・復元できた。3は土師器の甕で、1・2と同じく古墳時代後期のものである。4～7は弥生土器。4は長頸壺の胴部破片。5と同一個体である可能性が高い。6は無頸壺。口縁部直下に浅い沈線状の段を篦状工具で巡らす。7の高坏脚部は、5条一単位で細い沈線を螺旋状に巡らし、その間に未貫通の矢羽根透孔を施す。

柱穴であるSP-499からは、立柱痕跡から径5㎜の角張った炭化物片がごく少量、掘り形埋土から弥生土器の胴部細片～小片3点が出土。他に、長さ9.5㎝、径3.3㎝～4㎝の棒状の花崗岩円礫がある。

一方、Ⅲ層からは比較的多くの遺物が出土している。弥生土器も多いが、前述したように埋土から出土した

須恵器甕と接合できる破片が混じっているので、ここでは古墳時代の遺物を選び出して報告する（Fig. 101-1～26）。

1～20は須恵器。1～3の坏蓋は丸みをおびた体部をもつ。1（Pl. 21-③）の天井部外面には、「×」形のヘラ記号が焼成前に施されている。2は薄手のつくりで、器高が高く、高坏の可能性も残す。4～9は坏身。いずれも丸みをおびた体部を持ち、口縁部は内傾し短く立ち上がる。9（Pl. 21-⑧）の内底面には、径2㎝ほどの棒状工具の端部で押さえつけた痕跡が残る。10～12は高坏の坏部破片。11・12の坏部中位には浅い段が巡る。13は甕の口縁部。口縁外面には凸線状の段をつくり出す。また、口縁端部の内面には、回転横ナデで浅い段状の窪みをもつ小さな面ができている。14は長頸壺の蓋。15の肩部には細い沈線状の段が巡り、その上部に櫛状工具を押捺した短斜線文が施される。16～19（Pl. 21-④～⑦）は鉢。16は口縁部を回転横ナデでわずかに外反させる。胴部中位に凹線を巡らす。17～19は同一個体である可能性が高い破片である。外面に間隔をあけて凹線を巡らし、その間に4条の櫛描き波状文を施す。

21は小型丸底壺の口頸部の破片である。22～26は「く」字形口縁をもつ甕で、口縁部内面がわずかに内湾して端部に小さな面をもつ22・24・25と、口縁部の緩やかに屈曲する23・26がある。この他、Ⅲ層最下部からは鉄鏃の茎部と考えられる細い棒状の鉄器破片が出土している（Fig. 89-5）。Ⅲ層出土の遺物では、1～11・14・23・26は古墳時代後期、16～19・21・22・24・25は古墳時代中期に比定できる。

以上の埋土と上部Ⅲ層の遺物から、SC-33は古墳時代後期の竪穴式住居跡と判断できる。

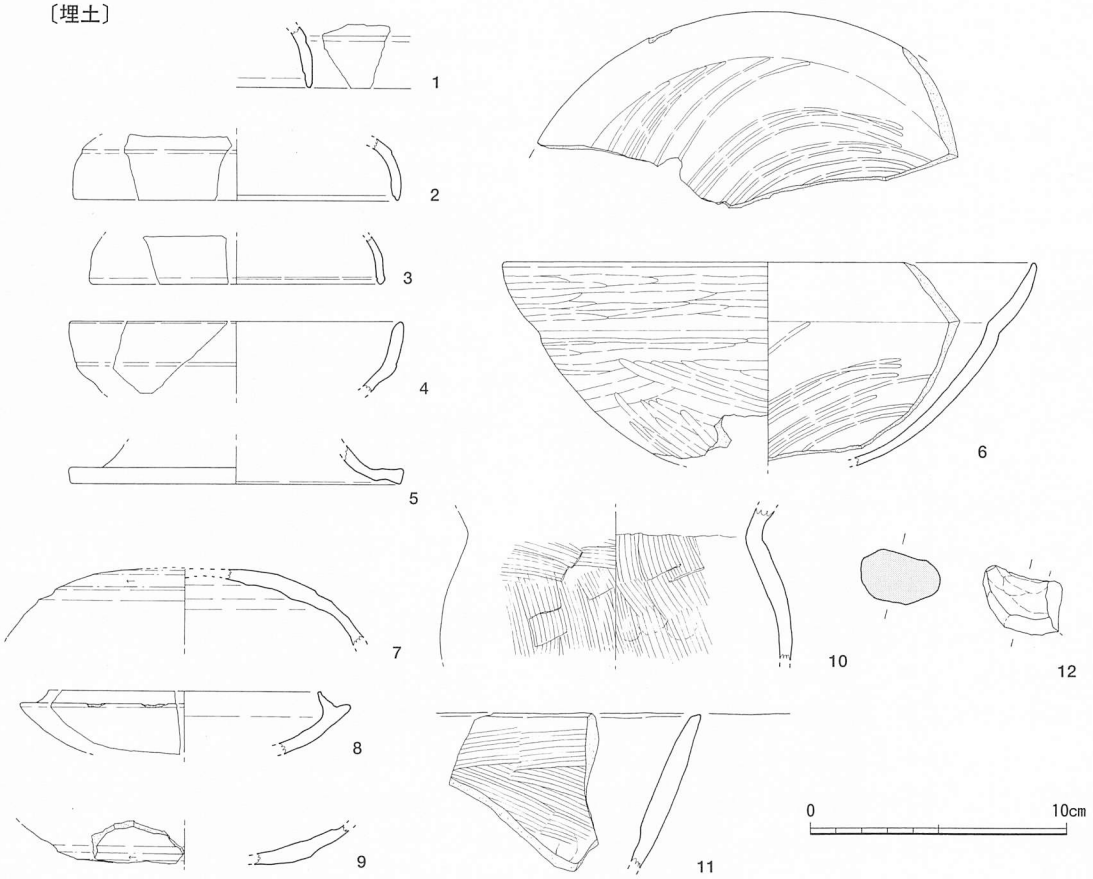

Fig. 102　SC-37埋土および貼り床部出土遺物実測図
（1～6：埋土、7～11：貼り床部、縮尺1/3）

SC-37号竪穴式住居
(Fig. 72・102・103、Pl. 3・4・21)

調査区北壁沿いのDC・DD-15区に位置する竪穴式住居跡である(Fig. 72、Pl. 3-2・4)。SP-510に切られる。また、前述したように、土層断面の観察からSC-17を切っていることを確認した。そのため、SC-17と切り合った部分の壁を10cmほど削ってしまった。

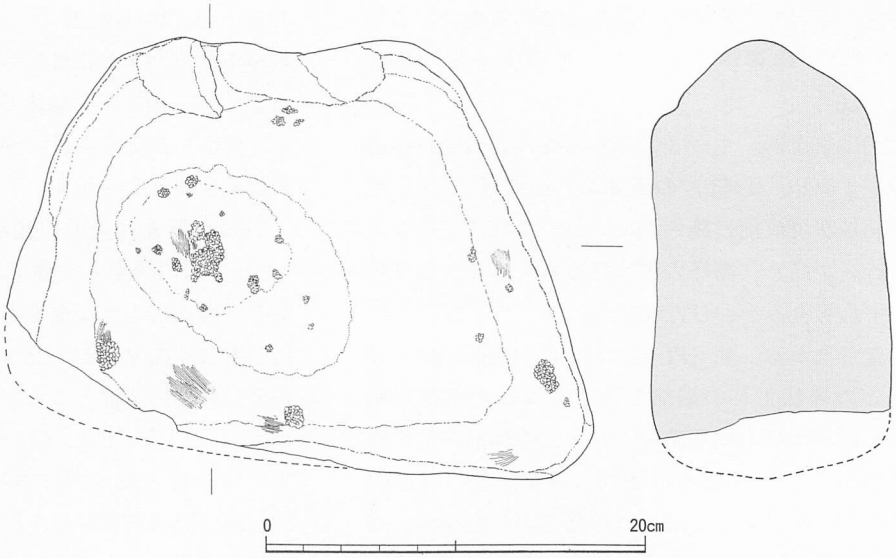

Fig. 103　SC-37出土遺物実測図（縮尺1/4）

住居跡の大部分は、調査区外にのびているため、規模は不明であるが、一辺4.5～5mほどのやや胴張りの方形住居跡と考えられる。また柱穴などは確認できていない。

住居跡内には、小礫が多く混じる褐灰色砂質シルトの①層と、暗褐色シルトの③層が南側から流れ込む。①層には縞状に暗褐色シルトが、③層には軟らかな黄褐色あるいは褐灰色砂質シルトの小塊が混じる。②層は黄褐色砂質シルトのレンズ状ブロックである。壁際には、暗褐色砂質シルトの④層と、小礫がわずかに混じる黒褐色シルトの⑤層が堆積する。床面には青灰色の細砂層が薄く堆積している。

床面には比較的しまった⑥・⑦層の貼り床が施されている。黒褐色シルトで、下部の⑦層には横に拉げた小指先大の黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。

埋土中からは、土師器・須恵器が出土した（Fig. 102-1～6）。1・2は須恵器の坏蓋。天井部と口縁部の境に浅い段が巡る。口縁端部内面には、回転横ナデで浅い沈線が生じている。3は薄手のつくりで、口径がやや不確実であるが、短頸壺の可能性がある。口縁端部内面に浅い沈線が巡る。4・5は須恵器の高坏。4の坏部中位には、浅い沈線が巡る。1～5は古墳時代後期の遺物である。6（Pl. 21-⑩）の土師器鉢は、床面から出土した比較的大きな破片で、SC-18の埋土から出土した破片と接合・復元できた。扁平な胴部にやや内湾する口縁部がつく。胴部内底～内底面には暗文が施され、外面のヘラミガキも暗文風である。古墳時代中期のものと考えられる。これらは、いずれも小片や細片で、SC-37が廃絶され埋没する過程で流れ込んだ遺物である。この他、埋土上部から、扁平な砂岩の円礫を利用した台石（FIg. 103-1）が出土している。

貼り床部分からも、土師器・須恵器の弥生土器の細片～小片が30点ほど出土している（Fig. 102-7～11）。7は比較的大形の須恵器坏の天井部破片。8は身が浅く丸みをおびた体部を持ち、口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。9は径から高坏の坏部破片と考えた。10～12は土師器。10は胴部上半が窄まり、「く」字形に反転する口縁部がつくと考えられる。11は器種不明。12は把手付き甕もしくは甑の把手の破片である。

以上、住居の埋没段階で流入した遺物は古墳時代後期、住居構築時に貼り床部に混入した遺物の中でもっとも新しい遺物は古墳時代後期の遺物である。したがって、SC-37が営まれた時期は、古墳時代後期の時間幅の中で捉えることができる。

（３）掘立柱建物

SB-42号建物（Fig. 104・105）

調査区北東隅のCY-15区では、SP-432・446で立柱痕跡を確認し、北側の20次調査区でほぼ等間隔に並ぶSP-237・238が出土し、SP-432・446の梁間１間（梁間長1.7m）、SP-432・20次調査SP-237・238の桁行２間（桁行長3.4m）以上の掘立柱建物と考えた（Fig. 104）。

SP-432は、径67～68cm、深さ17cmの不整円形の掘り形をもつ。掘り形内のやや東よりで径21cmの立柱痕跡を確認した。柱は先端を残して折り取られている。①層は柱折り取り後の流入土、②層は立柱痕跡、③・④は掘り形埋土である。上部流入土の①層は、径２～３cmの砂礫をかなり多く含む暗褐色砂質土。立柱痕跡にあたる②層は、径２～３cmの砂礫が少量混じる暗褐色砂質土で、下部に幅１～２cmの褐色シルトのレンズ状ブロックがやや多くみられる。掘り形埋土の③・④層は、径２～３cmの砂礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

SP-446は、径51～55cm、深さ22cmの略円形の掘り形をもち、その東寄りの底面付近で、径22cmの立柱痕跡を確認できた。SP-432と同じく、先端を残して柱が折り取られている。①～③層は柱折り取り後の流入土で、④層は立柱痕跡。①層は径１～３mmの砂礫がかなり多く混じる暗褐色砂質土。②層は径１～２mmの砂礫が少量混じる暗褐色砂質土で、幅５mmほどの褐色シルトのレンズ状ブロックが多くみられた。③層はにぶい黄褐色シルト。立柱痕跡の④層は黒褐色砂質土で、径１～３cmの楕円形の褐色砂質土塊が多く混じる。

遺物は、SP-432の上部流入土①層から、須恵器坏の天井部破片（Fig. 105-１・２）や胴部細片１点、弥生土器もしくは土師器の胴部細片４点、長さ3.5cm、幅2.7cm、厚さ1.5cmのシルト岩の小円礫が出土している。他に、弥生後期前葉の甕口縁部破片（Fig. 105-３）、弥生土器の胴部細片２点がある。

SP-446では、①層には径５mmの角張った炭化物片がやや多く含まれ、①～③層から、弥生土器もしくは土師器の胴部細片～小片５点が出土した。他に、埋土中として取り上げた遺物に、須恵器胴部小片２点、弥生土器の胴部細片～小片７点がある。

以上の砂礫が多く混じる埋土の特徴と出土遺物から、SB-42は古墳時代後期に比定できる。

SB-43号建物（Fig. 104・105）

調査区北東部のCY・CZ-14・15区のSP-334・335はほぼ同じ略円形の掘り形をもち、径17～19cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 104）。掘立柱建物の一部と考え、これに対応する柱穴を探すことに努めた。北西側には対応する柱列はなく、南東側の攪乱壙を挟みSP-474を確認できた。SP-474は掘り形や立柱痕跡は小さいが、他にSP-334・335と掘立柱建物を構成する柱穴は見あたらないので、SP-334・335・474から構成される梁間１間（梁間長2.43m）、桁行１間（桁行長4.11m）の掘立柱建物を復元した。柱穴のSP-474はSK-36を切る。また、桁行のSP-335・474上にSP-340が位置するが、SB-43との関係は不明である。

SP-334は、長径72cm、短径65cm、深さ19cmの略円形の掘り形をもつ。掘り形の南壁沿いで径19cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は南側に傾き、立柱は引き倒されたものと考えられる。一部が粘性をおびた黒褐色砂質土で、径３～５mmの礫が多く混じり、径１cmの楕円形の褐色砂質シルト塊が少量含まれる。②～⑤層は掘り形埋土で、いずれも黒褐色砂質土。径２～５mmの角礫が多く混じる。⑤層には褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが多くみられた。

SP-335は、長径75cm、短径69cm、深さ21cmの略円形の掘り形をもち、ほぼ中央で径17cmの立柱痕跡を確認した。埋土上部の①層は、柱を抜き取られた後の流入土である。小礫がとくに多く混じる黒褐色砂質シルトで、径２～３cmの不整形の黄褐色シルト塊が点々と含まれる。立柱痕跡である②層は黒褐色砂質シルトである。③・④層は掘り形埋土で、黒褐色シルトに黄褐色シルトが径５～７cmの塊がいくつか混じる。

SP-474はSK-36を切る。掘り形は、径48～50cm、深さ21cmの略円形で、他の柱穴と比べて小さい。また、立柱痕跡も径12cmで、細めの柱である。立柱痕跡の②層は埋土中位で検出され、その上部には①層が堆積する。①層は、立柱が先端を残して折り取られた後に、流れ込んだものと考えられる。径３～５mmの角礫がかなり多く混じる暗褐色砂質土。立柱痕跡の②層は、径

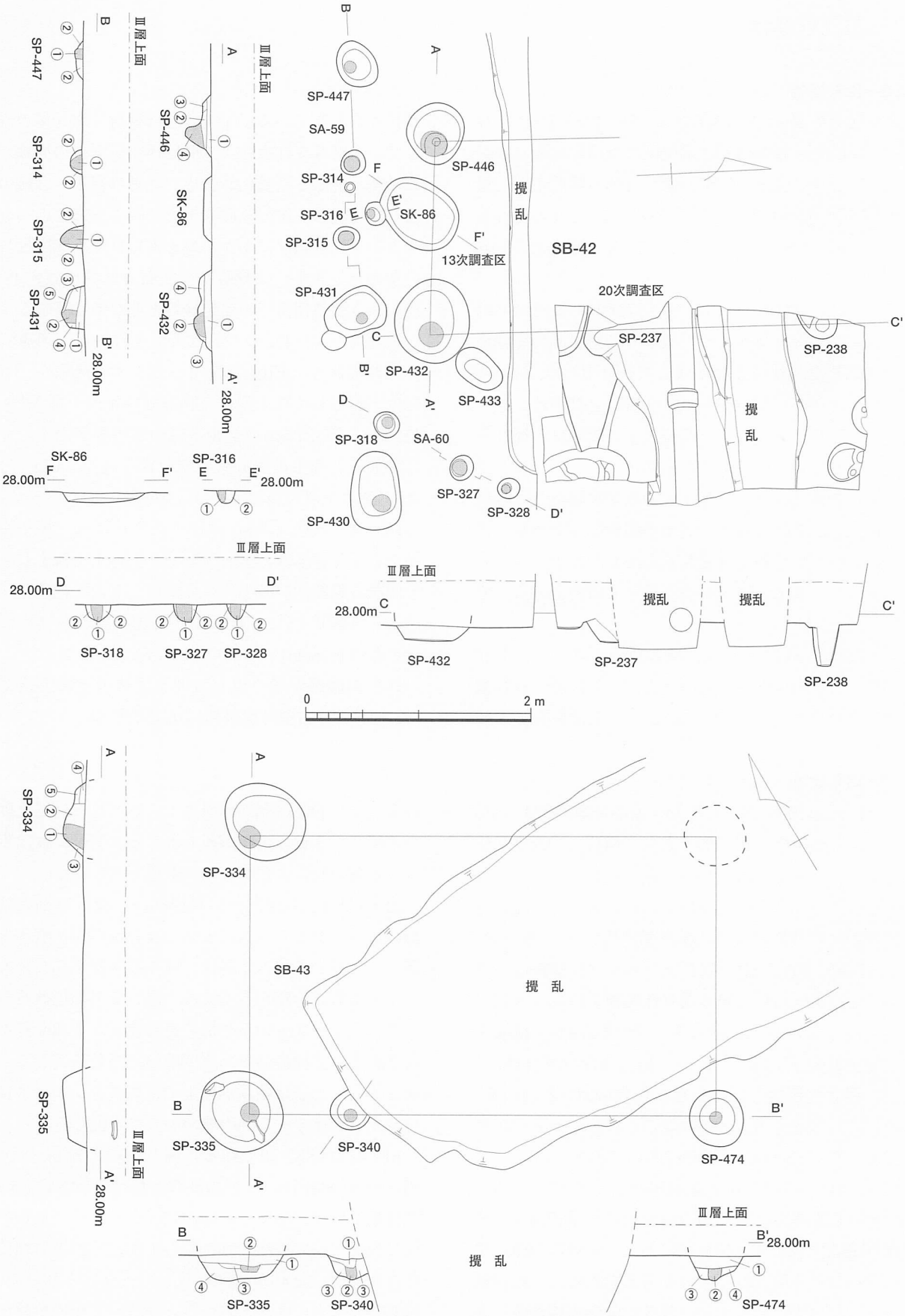

Fig. 104　SB-42・43、SK-86、SA-59・60遺構実測図（縮尺1/50）

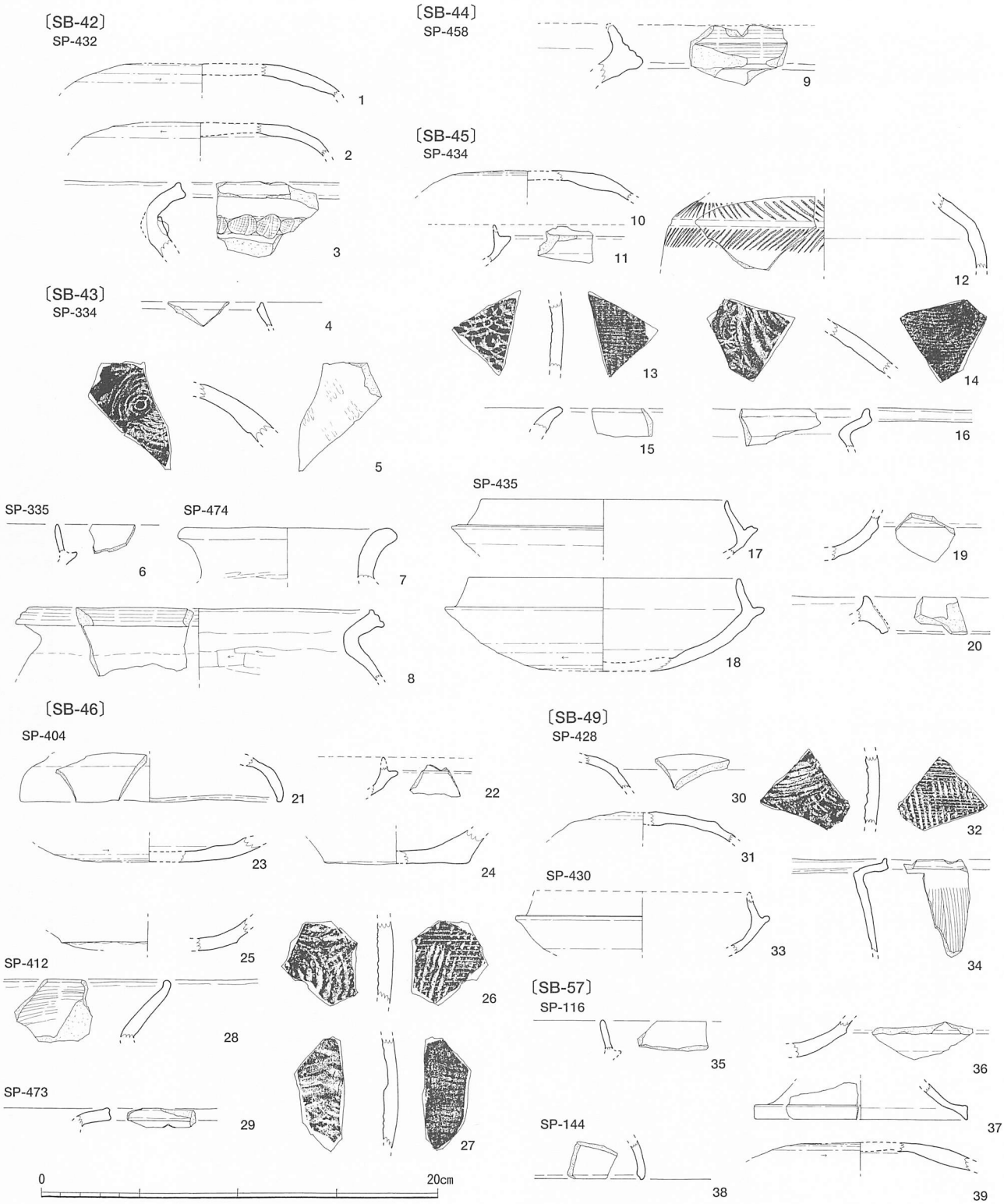

Fig. 105　SB-42・43・44・46・49出土遺物実測図（縮尺1/3）

2～3㎜の角礫が少量混じる暗褐色砂質土で、褐色シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量みられた。部分的にわずかに粘性あり。掘り形埋土の③・④層は、径2㎜前後の礫が少量混じる暗褐色砂質土で、部分的にわずかに粘性をおびる。褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが少量みられる。

出土遺物には、細片～小片化した土器や炭化物片がある。SP-334の立柱痕跡である①層から、須恵器の

坏部口縁部の細片（Fig. 105-４）、土器の胴部細片１点が出土。他に須恵器の胴部破片２点（Fig. 105-５）、弥生土器もしくは土師器の胴部小片４点がある。また、①・②・④層では、径５㎜の角張った炭化物片、径２～３㎜の粒状の炭化物片がみられた。

SP-335では、上部流入土①層から、弥生土器もしくは土師器の胴部細片～小片９点が出土。他に、掘り形埋土を含め、須恵器坏身の口縁部細片（Fig. 105-６）、弥生土器もしくは土師器の胴部の細片～小片８点、硬質砂岩の円礫の小片が出土した。

SP-474では、上部流入土①層から、須恵器の壺口縁部（Fig. 105-７）、弥生時代中期後葉の口縁部に凹線文を巡らす甕の口縁部（Fig. 105-８）、弥生土器と土師器の胴部細片～小片５点、径５㎜の角張った炭化物片や径２～３㎜の粒状の炭化物片が多く出土した。掘り形埋土からは、弥生土器と土師器の胴部細片～小片８点が出土している。

出土遺物、砂礫が多く混じる埋土の特徴をもつこと、SK-36を切ることから、SB-43は古墳時代後期に比定できる。

SB-44号建物（Fig. 105～107）

調査区東端のCX-13区で立柱痕跡が確認できたSP-458・467は、20次調査区のSP-136・137とともに、梁間１間（梁間長1.48m）、桁行１間（桁行長3.46m）の掘立柱建物を構成する（Fig. 107）。

SP-458は、径4.9～5.3m、深さ15㎝前後の不整円形の掘り形をもつ。掘り形の下底面で径15㎝の先端を残して抜き取られた立柱痕跡を確認できた。①層は、立柱を抜き取った後に流れ込んだ小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。②層は立柱痕跡で、黒褐色シルトである。③層は掘り形埋土で、わずかに黄褐色シルトが混じる黒褐色シルトである。

SP-467は、長径73㎝、短径55㎝、深さ28㎝の不整な長円形の掘り形をもち、径18㎝の立柱痕跡を検出した。掘り形の中位での検出であり、立柱は先端を残して折り取られたものと考えられる。立柱を折り取った後に流入した①層は、小礫がとくに多く混じる黒褐色砂質シルト。立柱の先端部分にあたる③層は、黒褐色砂質シルトで、③層と比べて砂質が若干強い。掘り形埋土の③層は、小礫が少量混じる黒褐色砂質シルトである。

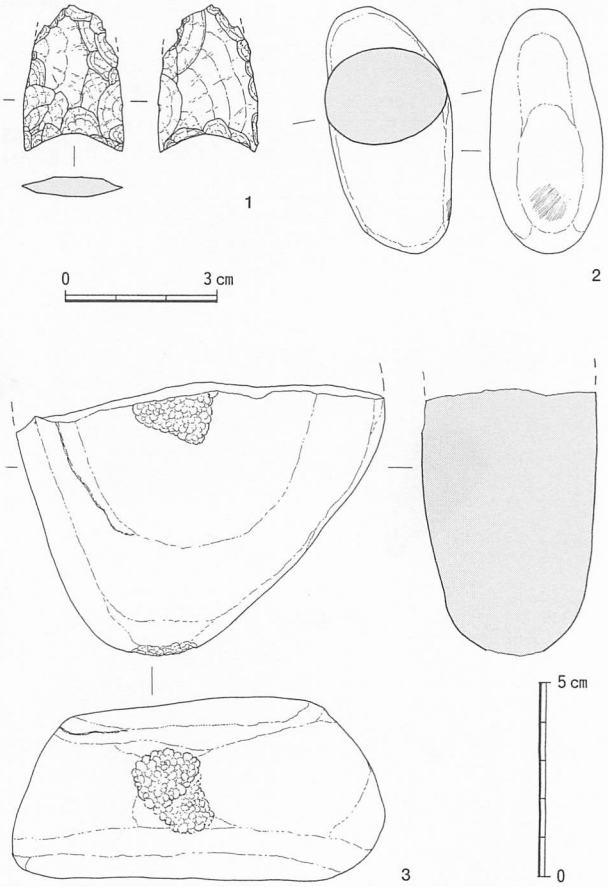

Fig.106　SB-44・58、SP-419出土遺物実測図
（１：SP-419、２：SB-44柱穴SP-458、３：SB-58柱穴SP-142、縮尺２/３・１/２）

出土遺物は少ない。SP-458では、上部流入土①層から弥生土器と土師器の胴部細片～小片９点、掘り形埋土③層からも弥生土器もしくは土師器の胴部細片～小片６点、擦痕が残る短い棒状の砂岩円礫の擦石が出土（Fig. 106-２）が出土。他に、弥生時代中期の凹線文を施す壺の口縁部（Fig. 105-９）、土師器もしくは弥生土器の胴部小片２点がある。

SP-467では、上部流入土①層から土師器もしくは弥生土器の胴部細片～小片８点が出土。土師器や弥生土器の胴部細片～小片10数点がある。また、掘り形埋土の③層には炭化物片が混じっていた。

以上、遺構の時期を確定できる手がかりとなる遺物は少ない。しかし、砂礫が多く混じる埋土の特徴から考えて、SB-44は古墳時代後期の掘立柱建物と判断した。

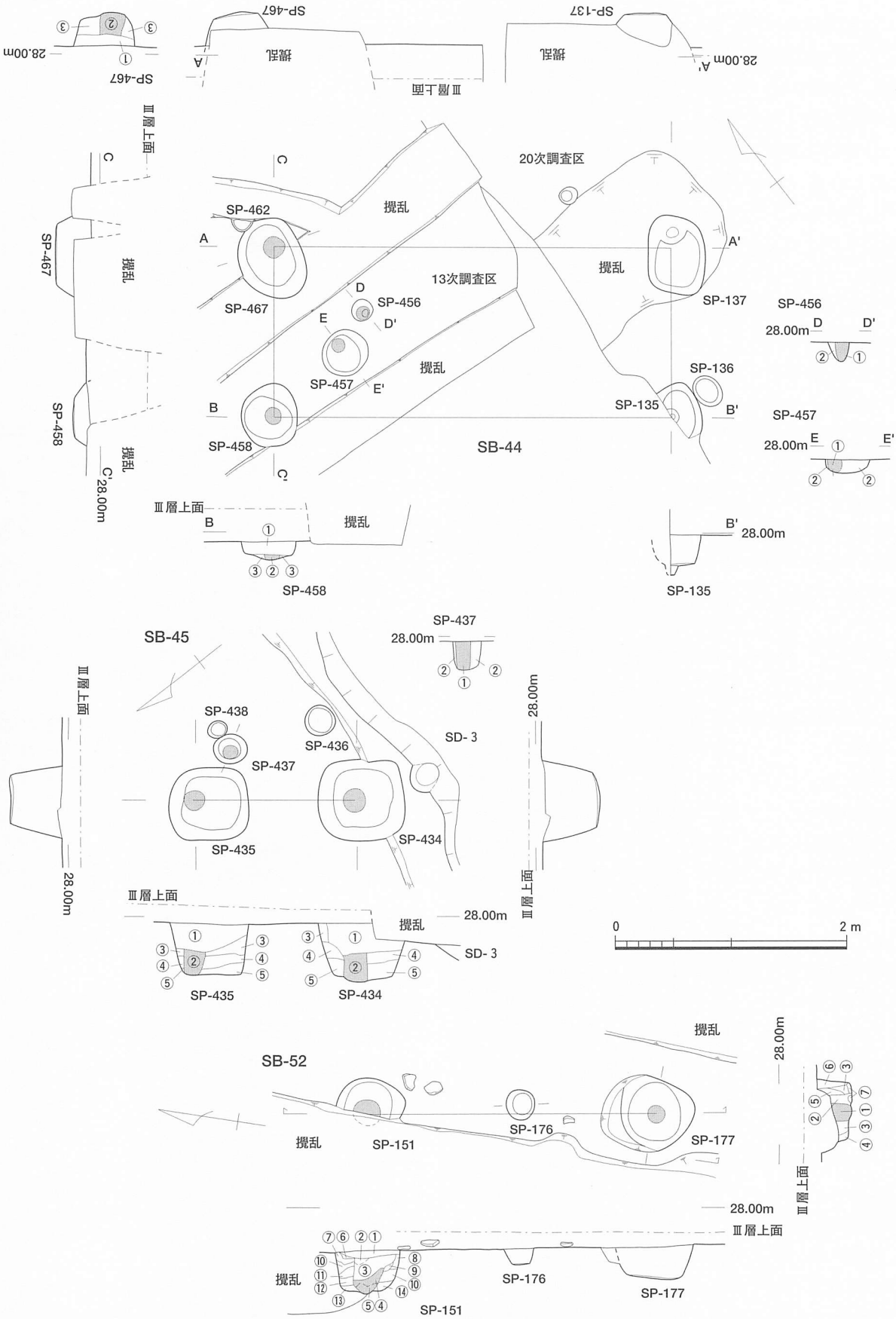

Fig. 107　SB-44・45・52遺構実測図（縮尺 1 /50）

SB-45号建物（Fig. 105・107）

CY-12区に位置するSP-434・435で構成される梁間1間（梁間長1.4m）の掘立柱建物である（Fig. 107）。SP-434・435は共通した掘り形の平面形・大きさ・深さで、確認できた立柱痕跡も同じである。

SP-434は、径70～75cm、深さ52cmの胴張りの隅丸方形の掘り形をもち、径19cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は先端を残して折り取られている。埋土上半部の①層は、立柱の折り取り後に流れ込んだ土層。小礫がとくに多く混じる黒褐色砂質シルトで、黄褐色シルトの小塊が部分的に集中する。立柱痕跡の②層は黒褐色シルトで、砂礫はほとんど混じらず、軟らかな黄褐色砂質シルトの小塊が点々とみられる。③～⑤層は掘り形埋土で、少量の小礫が混じる黒褐色シルト。③・④層には小指～親指先大の黄褐色シルト塊が混じる。黄褐色シルト塊は、③層には多いが、④層には少ない。

SP-435は、径63～70cm、深さ45cmの胴張りの強い隅丸方形の掘り形をもち、径18cmの立柱痕跡を確認できた。SP-434と同じく、立柱は先端を残して折り取られている。埋土上半部の①層は、立柱の折り取り後に流れ込んだ土層で、小礫がとくに多く混じる黒褐色砂質シルト。径1～3cmの不整形の黄褐色シルト塊が多く含まれる。②層は立柱痕跡で、南に若干傾いている。黒褐色シルトで、下部に親指先大の黄褐色シルト塊が流れ込んだように溜まっている。③～⑤層は掘り形埋土の黒褐色シルトである。③・⑤層には親指先大の拉げた黄褐色シルト塊が点々と混じる。

出土遺物には、弥生土器・土師器・須恵器があるが、いずれも細片である。SP-434では、上部流入土①層から、弥生土器や土師器の胴部細片～小片1点と、須恵器坏身の口縁受け部の破片（Fig. 105-11）、胴部（Fig. 105-13・14）、土師器甕の口縁部先端の細片（Fig. 105-15）、弥生土器の上げ底の底部片が出土した。掘り形埋土からは、須恵器の蓋の天井部破片（Fig. 105-10）、凹線を挟み羽状文を櫛状工具で押捺施文する長頸壺と考えられる肩部破片（Fig. 105-12）、弥生時代中期後葉の口縁端部を上方に摘み上げた甕の口縁部破片（Fig. 105-16）、弥生土器ないしは土師器の胴部細片7点が出土した。立柱痕跡の②層からは、古墳時代後期の土師器の胴部の破片2点が出土。他に、弥生土器や土師器の胴部細片が10数点ある。

SP-435では、上部流入土①層から、須恵器坏身の比較的大形の破片（Fig. 105-18）、弥生土器もしくは土師器の細片化した胴部破片10点ほど、炭化物片が出土している。掘り形埋土からも、須恵器高坏の坏部小片（Fig. 105-19）、弥生土器もしくは土師器の胴部細片7点ほどが出土している。他に、須恵器坏身（Fig. 105-17）、弥生土器の口縁部片（Fig. 105-20）、須恵器胴部片1点、土師器もしくは弥生土器の胴部細片5点がある。

以上の遺物の中で、もっとも新しい時期の遺物は、SP-434出土の須恵器蓋（Fig. 105-10）、SP-435出土の須恵器坏身（Fig. 105-17・18）である。とくに、坏身は、比較的口径が大きく、丸みのある胴部を持ち、やや長めの口縁部が内傾しながら立ち上がる。古墳時代後期に比定でき、SB-45は当該期の掘立柱建物と捉えることができる。

SB-46号建物（Fig. 105・108）

CX・CZ-13・14区で立柱痕跡を確認できたSP-338・404・412・473は、掘り形の平面形や深さがかなり異なるが、立柱痕跡の径がほぼ揃うこと、南側のSB-43とほぼ並行すること、SB-44・45などとほぼ同じ規模であることから、掘立柱建物と考えた（Fig. 108）。梁間1間（梁間長1.38・1.58m）、桁行1間（桁行長4.28m）で、やや矩形の平面形である。柱穴のSP-412・473はSC-35を切り、さらにSP-473はSK-36も切る。

SP-338は、隅丸方形の掘り形をもつ。長さ63cm、幅56cm、深さ18cmを測る。掘り形の中央から若干南よりで径18cmの立柱痕跡を埋土中位で検出した。立柱は先端を残して折り取られていると考えられる。埋土上部には、立柱折り取り後に流入した礫が非常に多く混じる黒褐色砂質シルトの①層が流れ込む。立柱痕跡にあたる②層は黒褐色シルトで、小礫は混じらない。掘り形埋土の③層は黒褐色シルトで、部分的に黄褐色シルト小塊が点々と混じる。

SP-404は長幅66cm、深さ30cmの胴張りが強い隅丸方形の掘り形をもつ。立柱痕跡は、径21cmを測り、埋土下部で検出した。SP-338と同じく、先端を残して立柱が折り取られたためである。埋土①・②層は立柱を折り取った後に流れ込んだ土層である。①層は砂礫が混じる黒褐色シルトで、径4～5cmの不整形の黄褐色砂質土塊がとくに多く混じる。②層は砂礫が多く混

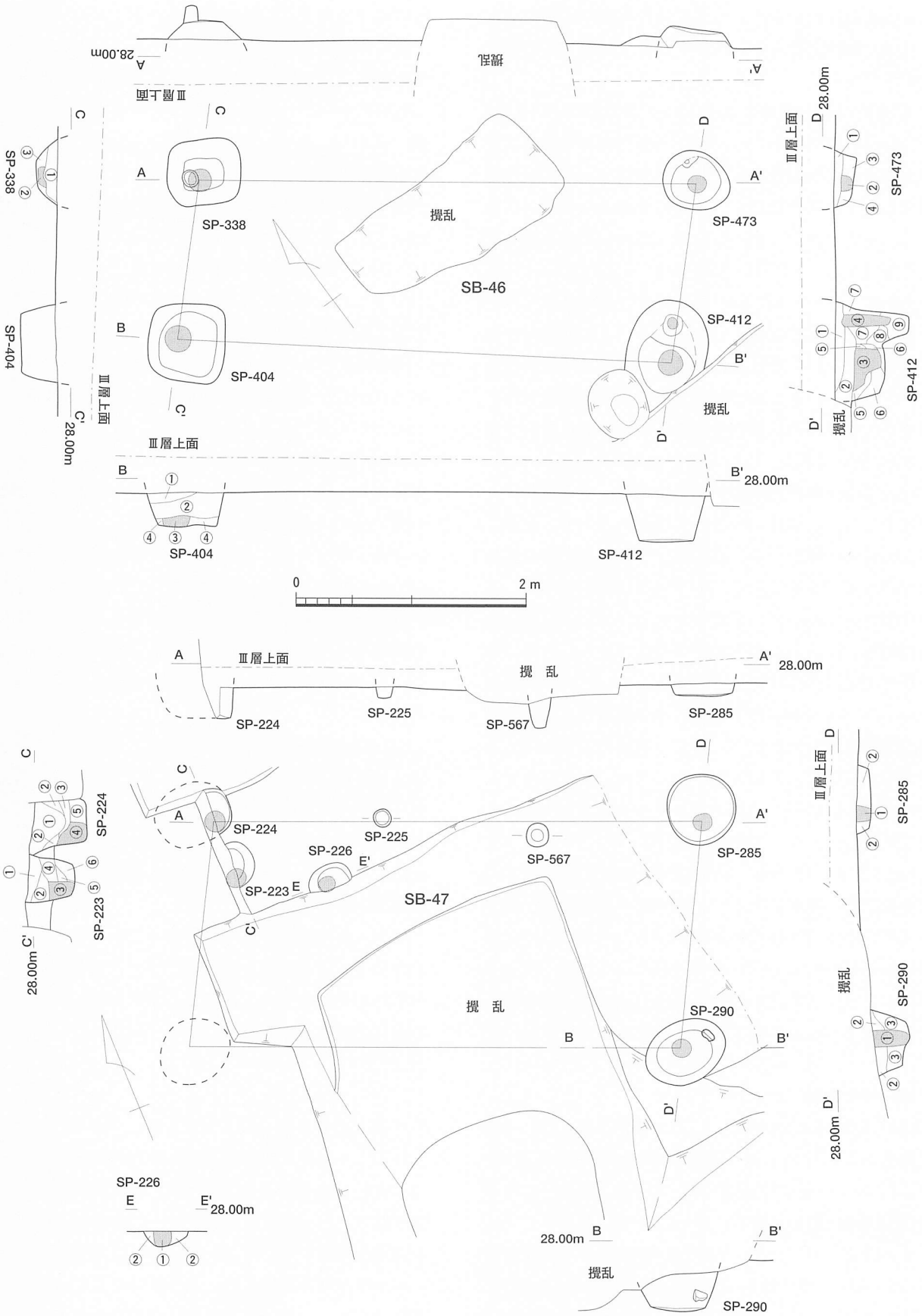

Fig. 108　SB-46・47遺構実測図（縮尺 1 /50）

じる黒褐色砂質シルト。立柱痕跡の③層は黒褐色シルト。掘り形埋土の④層は砂礫がごく少量混じる黒褐色シルトである。

SP-412は長径90㎝、短径70㎝、深さ43㎝および63㎝の長円形の掘り形をもつ。掘り形内の南半部で、径17㎝前後の立柱抜き跡と、北半部で径９㎝の杭痕跡を検出した。立柱痕跡がSB-46の柱と考えられる。杭痕跡は、先端を残して折り取られており、立柱を抜き取った後に流れ込んだ①・②層の中で、②層を切り込んでいることから、SB-46の廃絶後に打ち込まれたものと判断した。①・②層ともに、径２～５㎜の礫がかなり多く混じる。①層は褐色砂質土、②層は黒褐色砂質シルトで上部に径１㎝の楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が多く含まれる。立柱痕跡の③層は暗褐色砂質シルトで、所々に径２～３㎜の礫がかたまってみられる。また、径１㎝の楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がごく少量混じる。④層は杭痕跡。黒褐色シルトで、上部に径１～２㎜の礫が所々に混じり、小さな楕円形の黄褐色シルト塊が少量混じる。⑤～⑨層は掘り形埋土。⑤層は部分的に礫が混じる暗褐色砂質シルトで、径１㎝の楕円形のにぶい黄褐色塊が少量含まれる。⑥層は礫がごく少量混じる暗褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色シルトの小塊が少量含まれる。他の層よりも粘性がある。⑦層は黒褐色シルトとにぶい黄褐色シルトが入り混じる。⑧層はにぶい黄褐色シルトで、灰黄褐色シルトの小さく薄いレンズ状ブロックが少量みられる。⑨層は灰黄褐色シルトである。

SP-473は長径58㎝、短径52㎝、深さ20㎝を測る不整な長円形の掘り形をもつ。掘り形のほぼ中央、埋土中位で径16㎝の立柱痕跡を確認できた。他の柱穴と同じく、先端を残して立柱が折り取られている。埋土①層は、立柱が折り取られた後に流れ込んだ暗褐色砂質土で、径２～５㎜の角礫が多く混じる。立柱痕跡の②層は暗褐色砂質土。掘り形埋土の③・④層は砂礫が若干混じる暗褐色砂質土で、幅１～２㎝の褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。

各柱穴からは、遺物が出土しているが、量も少なく細片ばかりである。SP-338からは、弥生土器もしくは土師器の胴部小片10数点が出土しただけである。

SP-404からは、須恵器の坏身の口縁受け部破片（Fig. 105-22）、短頸壺の蓋と考えられる口縁部破片（Fig. 105-21）、壺の底部と考えられる破片（Fig. 105-23）が出土した。他に、弥生土器の底部（Fig. 105-24）、弥生土器や土師器の胴部細片～小片が数10点ある。

SP-412では、上部流入土①・②層から、須恵器胴部（Fig. 105-26）、土師器の甕口縁部（Fig. 105-28）、土師器の高坏坏部（Fig. 105-25）などの破片、土師器もしくは弥生土器の胴部細片～小片16点、粒状の炭化物片や、径５㎜の角張った炭化物片が出土。土師器の甕と高坏は古墳時代中期のものである。南半部の立柱痕跡③層からは、土師器もしくは弥生土器の胴部小指先大の細片、径５㎜の炭化物片が出土。他には、掘り形埋土を含めて、弥生中期の甕肩部、赤焼き須恵器の胴部片（Fig. 105-27）、その他、須恵器、弥生土器、土師器の胴部細片～小片が数10点、大小の炭化物片がある。

SP-473の上部流入土①層からは、土器細片１点、径２～３㎜の粒状の炭化物片がやや多く出土。また、掘り形埋土③・④層には、径５㎜の角張った炭化物片がごく少量含まれていた。その他、弥生土器の甕の口縁部破片（Fig. 105-29）、弥生土器もしくは土師器の胴部小片５点が出土。

以上、各柱穴の埋土に砂礫が多く混じること、出土遺物でもっとも新しい須恵器（Fig. 105-21・22）が古墳時代後期のものであることから、SB-46は当該期の掘立柱建物と考えた。

SB-47号建物（Fig. 108）

DB・DC-12・13区で出土した。SP-224・285・290で構成される梁間１間（梁間長1.96m）、桁行１間（桁行長4.2m）の掘立柱建物である（Fig. 108）。北側の桁行列のSP-224・285間にSP-225・567があり、立柱痕跡は確認されていないが、SB-47に伴う可能性が高い。その場合、SP-224・225の柱間は1.45m、SP-225・567間は1.35m、SP-567・285間は1.4～1.45mである。

SP-224は、大半が調査区外にのびるが、その壁面でⅢ層上面から掘り込まれていること、SP-223に切られること、掘り形内で径17㎝の立柱痕跡を確認できた。立柱は廃絶時に先端を残して折り取られている。折り取られた後に流れ込んだ①～③層は、小礫混じりの黒褐色砂質シルトで、②層は小指先大の黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。立柱痕跡にあたる④層は黒褐色シルト。小礫は混じらない。掘り形埋土の⑤層は黒褐色シルトに径１㎝の丸い黄褐色シルト塊がわずか

に含む。

SP-285は、径60～62cm、深さ12cmの略円形の掘り形をもち、径15～16cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルトに黄褐色の小塊がわずかに混じる。掘り形埋土の②層は小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトである。

SP-290は、長径72cm、短径53cm、深さ35cm前後の楕円形の掘り形をもつ。ほぼ中央で径16cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②・③層は小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトである。親指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じるが、上半部の②層では丸い塊が多いのに対して、下半部の③層では拉げた塊が多い。

SP-224・285間にあるSP-225は、径16cm、深さ10cmの円形で、埋土は暗褐色砂質土。褐色砂質土のレンズ状ブロックがごく少量混じる。SP-567は略円形で、径20cm、深さ6cmを測る。埋土は、径2mmの礫が所々にまばらに混じる暗褐色砂質土。径1cmの丸いにぶい黄褐色砂質土塊が多く含まれる。

出土遺物は少ない。SP-224では、上部流入土の①層から炭化物片が少量出土しただけである。SP-285では、掘り形埋土②層から弥生土器の小指先大の細片が2～3点、柱痕から弥生土器の胴部細片5点、SP-290では掘り形下半部③層から長さ14cm、幅9cm、厚さ5cmほどの花崗岩の亞円礫が出土したのみである。また、SP-225では、径1cmの角張った炭化物片や、径3mmほどの粒状の炭化物片が少量出土している。

出土遺物からは時期は確定できないが、各柱穴の埋土に小礫が多く混じることから、SB-47は古墳時代後期の掘立柱建物と考える。

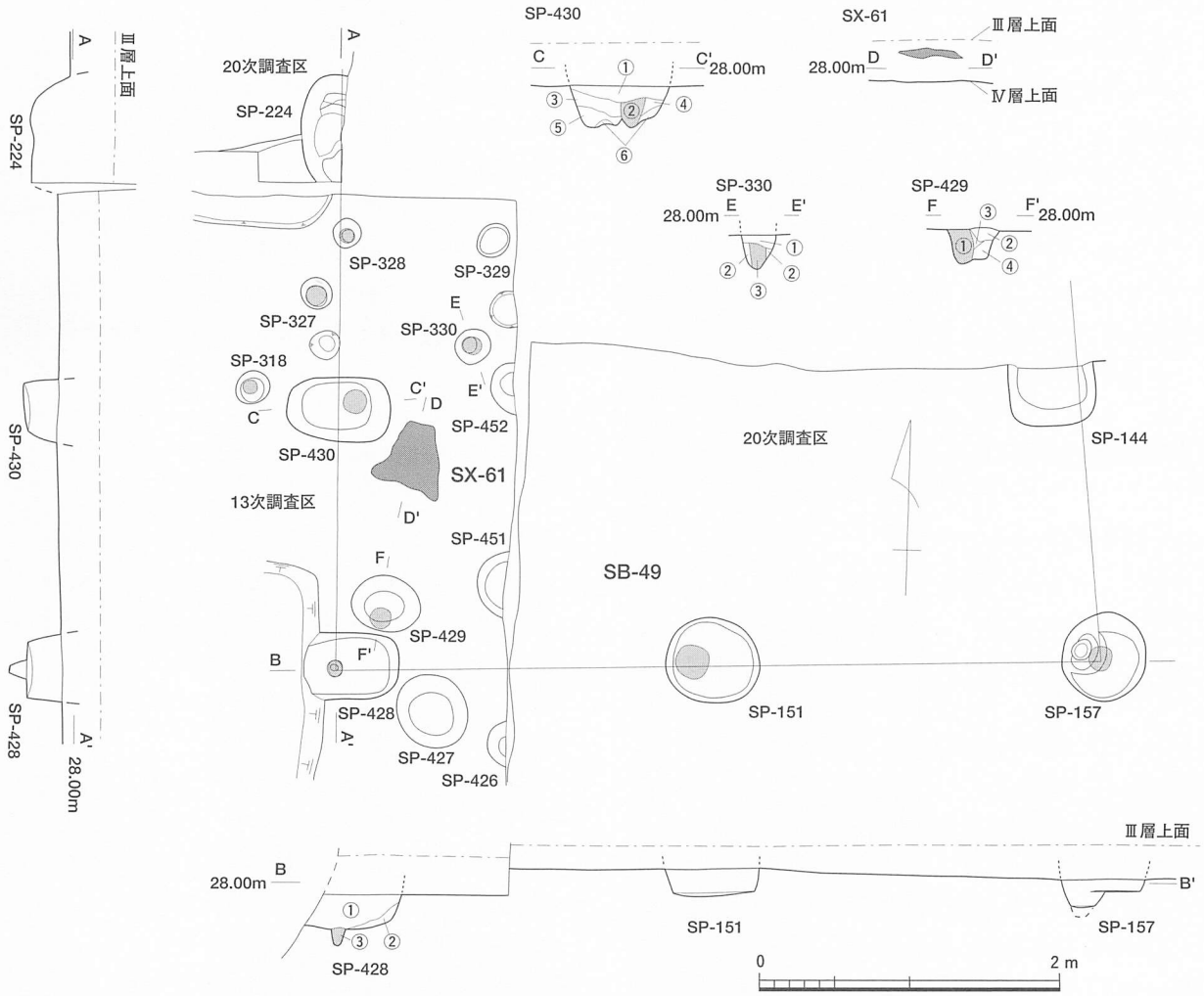

Fig. 109　SB-49、SX-61遺構実測図（縮尺1/50）

SB-49号建物（Fig. 105・109）

調査区北東隅のCX-14・15区で、立柱痕跡をもつSP-430と、これと共通する形状と深さの掘り形をもつSP-428を確認した。さらに、隣接する20次調査区のSP-144・151・157・224が出土し、梁間２間（梁間長5.1m）、桁行２間以上（桁行長3.6m以上）の掘立柱建物であることを把握できた（Fig. 109）。

SP-428は、残存長63cm、幅45cm、深さ24cmの隅丸長方形の掘り形をもつ。柱は抜き取られている。①・②層は柱抜き取り後の流入土と考えた。①層は径0.3～１cmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、幅１cmの褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。②層は径１～３mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、掘り形埋土の残存部分の可能性も残す。③層は柱先端の残存部分と考える。径１～２mmの角礫が少量混じる黒褐色砂質土で、幅１cmの褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。

SP-430は長さ63cm、幅43cm、深さ20cmほどの隅丸長方形の掘り形をもつ。掘り形の東よりで径16cmの立柱痕跡を埋土中位で検出した。①層は立柱抜き取り後の流入土で、径２～５mmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土。径３cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が少量含まれる。立柱痕跡の②層は、先端がやや尖り気味で、径２～３mmの砂礫が多く混じる暗褐色砂質土である。③～⑤層は掘り形埋土。③層は径１～２mmの砂礫が多く混じる暗褐色砂質土。④層は径２～５mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径１cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊はごく少量含まれる。⑤層は褐色シルトで、径１～３cmの輪郭がぼやけた楕円形の暗褐色砂質シルト塊が多く混じる。

出土遺物は少ない。SP-428では、上部流入土①層から、須恵器の胴部破片（Fig. 105-32）、須恵器胴部小片や土師器もしくは弥生土器の胴部細片20点ほど、径２～３mmの粒状の炭化物片や径５mmの角張った炭化物片が多く出土した。②層からも土器片が出土しているが、細片で時期などは不明である。他に、埋土中として取り上げた遺物に、須恵器の坏蓋の天井部破片（Fig. 105-30・31）、甕もしくは壺の胴部破片１点、須恵器胴部片２点、土師器もしくは弥生土器の胴部細片８点ほどがある。

SP-430では、上部流入土①層から、土師器もしくは弥生土器の胴部小片５点、径２～３mmの粒状の炭化物片や径５mmの角張った炭化物片が少量出土。立柱痕跡の②層からは、須恵器の坏もしくは高坏の胴部小片、土師器もしくは弥生土器の胴部小片３点、径３mmの粒状の炭化物片が少量出土した。掘り形埋土の③層には、径３mmの粒状の炭化物片がやや多く含まれていた。この他、埋土中として取り上げた遺物には、須恵器坏身（Fig. 105-33）、須恵器胴部小片１点や土師器もしくは弥生土器の細片８点、弥生時代中期後葉の甕（Fig. 105-34）、須恵器坏胴部小片１点や弥生土器・土師器の胴部細片～小片10数点がある。

以上、出土遺物の中で、SP-430から出土した須恵器坏身は、口径が比較的大きく、口縁部は長めで内傾しながら立ち上がる。古墳時代後期のものである。各柱穴は砂礫が多く混じる埋土をもつことから、SB-49は古墳時代後期の掘立柱建物と判断した。

SB-52号建物（Fig. 107）

DF-13・14区では、SP-151とSP-177で、立柱痕跡を確認できた。また、ほぼ中央にSP-176があり、SP-151・176・177が桁行を構成する掘立柱建物を推定した（Fig. 107）。ただし、管路や共同溝で周囲が破壊され、桁行方向の柱列は不明である。桁行２間（桁行長2.52m）、柱間は1.7～1.85mを測る。

北側の柱穴であるSP-151は、長径60cm、深さ37～40cmの略円形の掘り形をもち、断面で柱の抜き跡を確認できた。①層は柱を抜き取った後に流れ込んだ土、②・③層が立柱抜き取り時の流入土、④・⑤層は径15～20cmを測る立柱先端部にあたる。⑥～⑭層は掘り形埋土である。

①層は暗褐色砂質土で、径３～５mmの角礫が多く混じるとともに、径５mm前後の丸いにぶい黄褐色シルト塊がごく少量含まれる。②・③層は、径３～５mmの角礫混じりの暗褐色砂質土。③層には径１～２cmの丸い褐色シルト塊が多く混じる。

立柱痕跡の④層は、砂礫が若干混じる暗褐色砂質土で、径１cmの楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。⑤層は暗褐色砂質土ににぶい黄褐色砂質土が混じる。

掘り形埋土上半部の⑥～⑪層には、径２～５mmの角礫が多く混じる。⑥層は、暗褐色砂質土で、径１cmほどのにぶい黄褐色シルトのレンズ状ブロックを少量含む。⑦層はにぶい黄褐色砂質土。⑩層は暗褐色砂質土。

⑪層は暗褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土が少量混ざる。⑧・⑨層は暗褐色砂質土で、径1cmの褐色やにぶい黄褐色シルトのレンズ状ブロックが少量混じる。下部の⑫・⑬層は、きめの細かな暗褐色砂質土で、⑫層には径1cmほどの褐色シルトのレンズ状ブロック、⑬層には径2cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が少量混じる。⑭層は、にぶい黄褐色砂質土と褐色シルトが混じり合う。

南側の柱穴であるSP-177は、攪乱で上半部分を破壊されているが、掘り形のほぼ中央で15～17cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は径2～3cmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1cmのにぶい黄褐色砂質土のレンズ状ブロックをごく少量含む。②～⑦層は掘り形埋土であるが、他の柱穴でみられる掘り形埋土と異なって、縦方向に土を詰め込む。②・③層は径2～3cmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土。④～⑥層は暗褐色砂質土で、径1～3cmほどの楕円形の黄褐色シルト塊がごく少量混じる。⑦層は暗褐色砂質土の塊。⑤～⑦層には径1～2mmの礫が多く混じる。

SP-151・177の中央に位置するSP-176は、略円形で、径25～26cm、深さ14cmを測る。埋土は、暗褐色砂質シルトで、立柱痕跡は確認できなかった。

出土遺物は、SP-151の掘り形埋土⑩・⑭層から、径5mmほどの角張った炭化物片がごく少量出土するとともに、弥生時代中期後葉の甕の口縁部細片1点、壺胴部細片1点が出土しただけである。SP-177からは、弥生土器の胴部細片が5点、長さ11cm、幅6.5cm、厚さ5cmの泥岩の円礫、長さ3.5cm、幅2.5cm、厚さ1cmの含礫砂岩が出土した。

以上、遺構の時期を決定できる遺物を欠くが、各柱穴の砂礫が多く混じる埋土の特徴から、SB-52は古墳時代後期の掘立柱建物と判断できる。

SB-53号建物（Fig. 110・111）

DG-14・15区に位置する。SP-124・127は、周辺で出土した立柱痕跡をもつ柱穴と比べて、ともに隅丸長方形の掘り形をもち、深さも30～35cmで、立柱痕跡の径もほぼ共通する。また、SP-124・127間の中央にはSP-125がある。SP-124・125・127を桁行2間（桁行長3.75m）の柱穴列とする掘立柱建物を復元した（Fig. 110）。柱間の間隔は1.85～1.9mである。また、SP-127はSB-57の柱穴であるSP-144を切る。

SP-124は、長辺89cm、短辺70cm、深さ37cmの隅丸長方形の掘り形をもつ。掘り形のほぼ中央で径20cmの立柱痕跡を確認できた。SP-120に切られる。立柱痕跡の①層は、3～5mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1cmほどの楕円形の褐色シルト塊をごく少量含む。立柱は、掘り形下底面に暗褐色～褐色の砂質土・砂質シルトやにぶい黄褐色シルトの⑭～⑲層を敷いて柱を立て、その後に砂礫混じりの暗褐色砂質土を主とする②～⑬層を周囲から詰めて柱を固定している。

②層は径3～5mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径3cmの楕円形の褐色シルト塊がごく少量含まれる。③層は上部に3～5mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土。④層も径2～3cmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1cmほどの褐色シルトのレンズ状ブロックをごく少量含む。⑤層は径3～5cmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1cmほどの丸い褐色砂質土塊をごく少量含む。⑥層は径2～5mmの礫や小石が多く混じる暗褐色砂質土。⑦層は褐色シルト塊で、褐色シルトのブロックを含む。⑧層は径2～3mmの礫を多く含む暗褐色砂質土。⑨層は径2～3mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、幅4cmほどの褐色シルトのレンズ状ブロックをごく少量含む。⑩層は暗褐色砂質土で、砂礫はそれほど多く混じらず、にぶい黄褐色砂質土や褐色シルトのレンズ状ブロックを多く含む。⑪層は径3～5mmの礫や小石が多く混じる暗褐色砂質土。⑫層は暗褐色砂質土で、径1cmほどの丸い褐色シルト塊がごく少量混じる。⑬層は暗褐色砂質土で、幅1～2cmの褐色シルトのレンズ状ブロックがやや多く混じる。

下底面に敷かれた⑭層は褐色砂質シルト。⑮層は褐色砂質シルトと暗褐色砂質土が混ざり合う。⑯・⑱層は径1cmほどの褐色シルト塊がごく少量混じりしまりのある暗褐色砂質土。⑰層はしまりのある暗褐色砂質土で、幅1～3cmの褐色砂質土のレンズ状ブロックが多く含まれる。⑲層はしまりがあるにぶい黄褐色シルトで、径1cmの暗褐色砂質土塊がごく少量混じる。

SP-127は、長辺85cm、短辺80cm、深さ42cmを測る隅丸長方形の掘り形をもつ。掘り形のほぼ中央で径20cmの立柱痕跡を確認できた。埋土は、柱が抜かれた後に流れ込んだ①～③層、立柱痕跡の④層、柱を固定するために掘り形内に詰め込まれた⑤～⑮層に分層できる。

立柱が抜かれた後に流れ込んだ①～③層は、砂礫が

多く混じる暗褐色砂質土を主体とする。①層は径３㎜前後の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、幅１㎝ほどのにぶい黄褐色シルトのレンズ状のブロックをごく少量含む。②層は径５㎜の礫や小石が多く混じる暗褐色砂質土である。③層も暗褐色砂質土で、径１～２㎝の輪郭がぼやけたにぶい黄褐色砂質土塊がごく少量混じる。立柱痕跡の④層は先端が尖り、掘り形内に打ち込まれたと考えられる。暗褐色砂質土で、径１～３㎝の丸い褐色シルト塊が少量混じる。

柱を固定している掘り形埋土は、きめが細かくしまりがあるにぶい黄褐色シルトと褐色シルトが混じり合う⑥・⑨・⑩・⑫・⑮層の間に、径１～２㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土の⑤層、径１㎝ほどの楕円形のにぶい黄褐色塊がごく少量混じる暗茶褐色砂質土の⑦層、褐色シルトの⑧層、褐色シルトの⑪層、径１㎝ほどの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がごく少量混じる暗茶褐色砂質土の⑭層がブロック状に詰め込まれる。

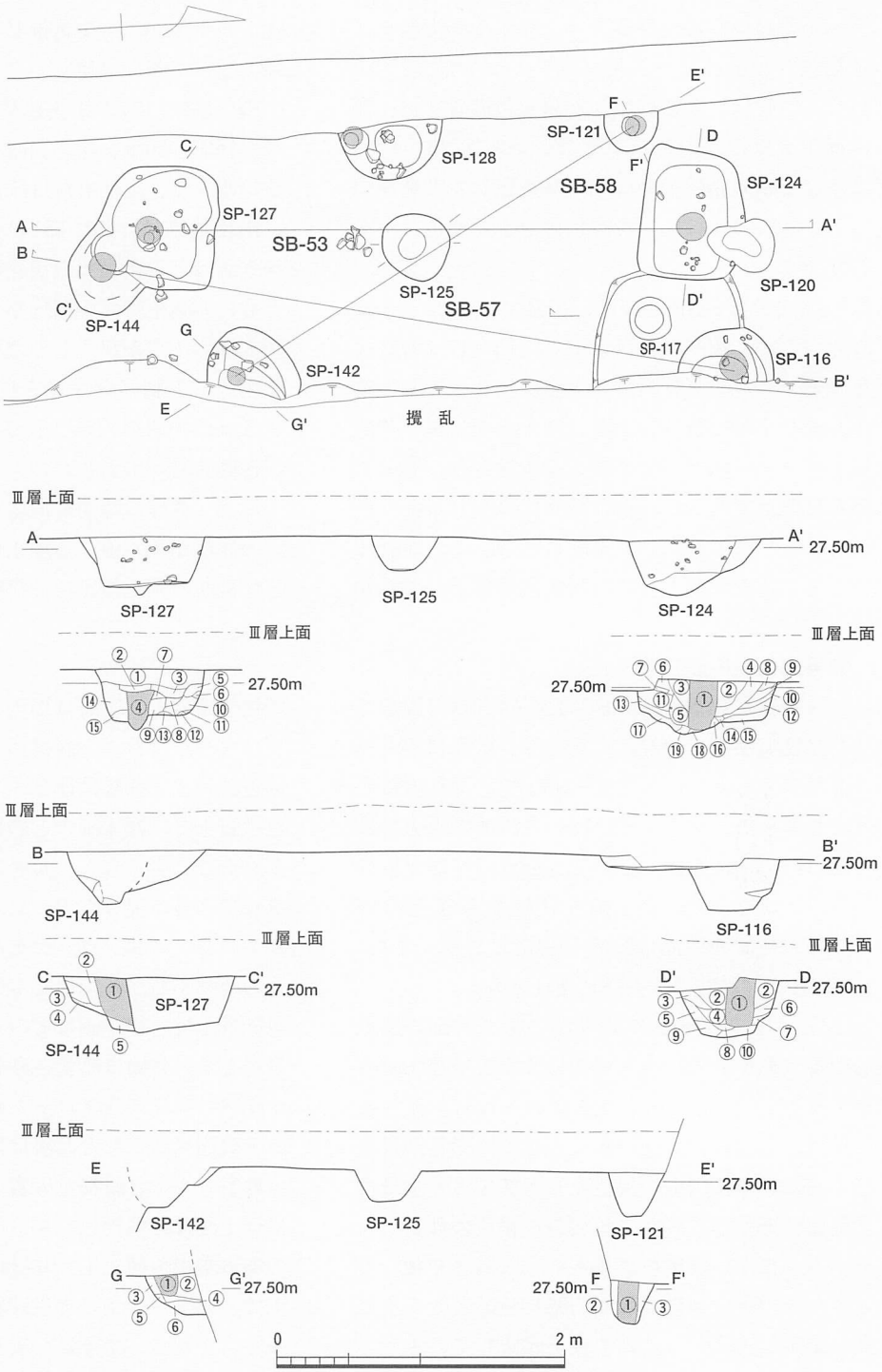

Fig. 110　SB-53・57・58遺構実測図（縮尺１/50）

SP-125は、SP-124とSP-127の間のほぼ中央で検出した。略円形で、径44～48㎝、深さ24㎝を測り、SP-124・127と比べて、小型で浅い柱穴である。埋土は、径３～５㎜の礫や小石が多く混じる暗褐色砂質土で、幅２～３㎝の褐色シルトのレンズ状ブロックが多く混じる。しかし、立柱痕跡は検出されなかった。

出土遺物は、SP-124・127・125から細片～小片化した土器片、炭化物片が出土しているだけである。SP-124では、立柱痕跡の①層から土器細片、径0.5～

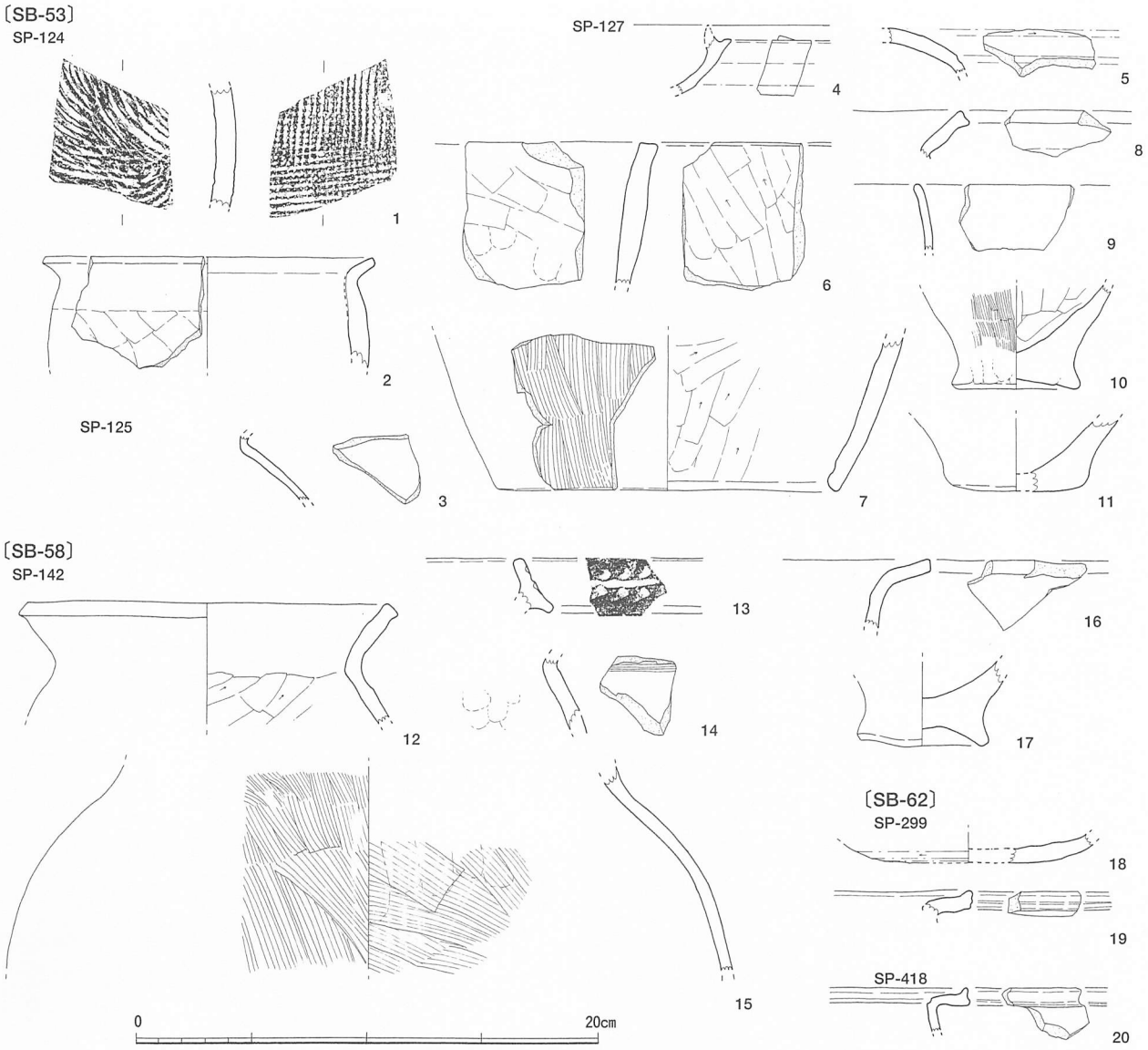

Fig. 111　SB-53・58・62出土遺物実測図（縮尺１/３）

１㎝の角張った炭化物片が少量出土した。掘り形埋土から、須恵器の甕もしくは壺の胴部破片（Fig. 111-１）、弥生土器の甕の口縁部破片（Fig. 111-２）、土師器や弥生土器の胴部小片が10数点、径４㎝、厚さ２㎝ほどの不整楕円形の泥岩円礫が出土した。また、③・⑥・⑧・⑨・⑪・⑫・⑯層には、径0.5～１㎝の角張った炭化物片や、径２～３㎜の粒状の炭化物片がごく少量含まれていた。

SP-127の埋土中からも遺物が出土している。ほとんどが弥生時代中期後葉～後期の甕や壺で、「く」字形口縁甕（Fig. 111-８）、身が深い深鉢型の鉢（Fig. 111-９）、甕の底部（Fig. 111-10・11）がある。その中に、ごく少量であるが、須恵器坏身（Fig. 111-４）や坏蓋（Fig. 111-５）、土師器の甑（Fig. 111-６・７）など、古墳時代後期の遺物が混じる。その中で、４は受け部が厚く、口縁部の立ち上がりも短いと考えられ、古墳時代後期のものである。②・③層からは径１～２㎝の細長い炭化物をごく少量出土した。

SP-125からは、弥生土器の胴部小片12点、古墳時代前期の布留式と考えられる甕の肩部小片（Fig. 111-３）、径３㎜の粒状の炭化物片がごく少量出土した。

以上、遺構の時期を決定できる遺物は少ない。SP-127出土の須恵器坏身（Fig. 111-４）と、各柱穴の埋土に砂礫が多く混じることから、SB-53は古墳時代後期の掘立柱建物に比定できる。

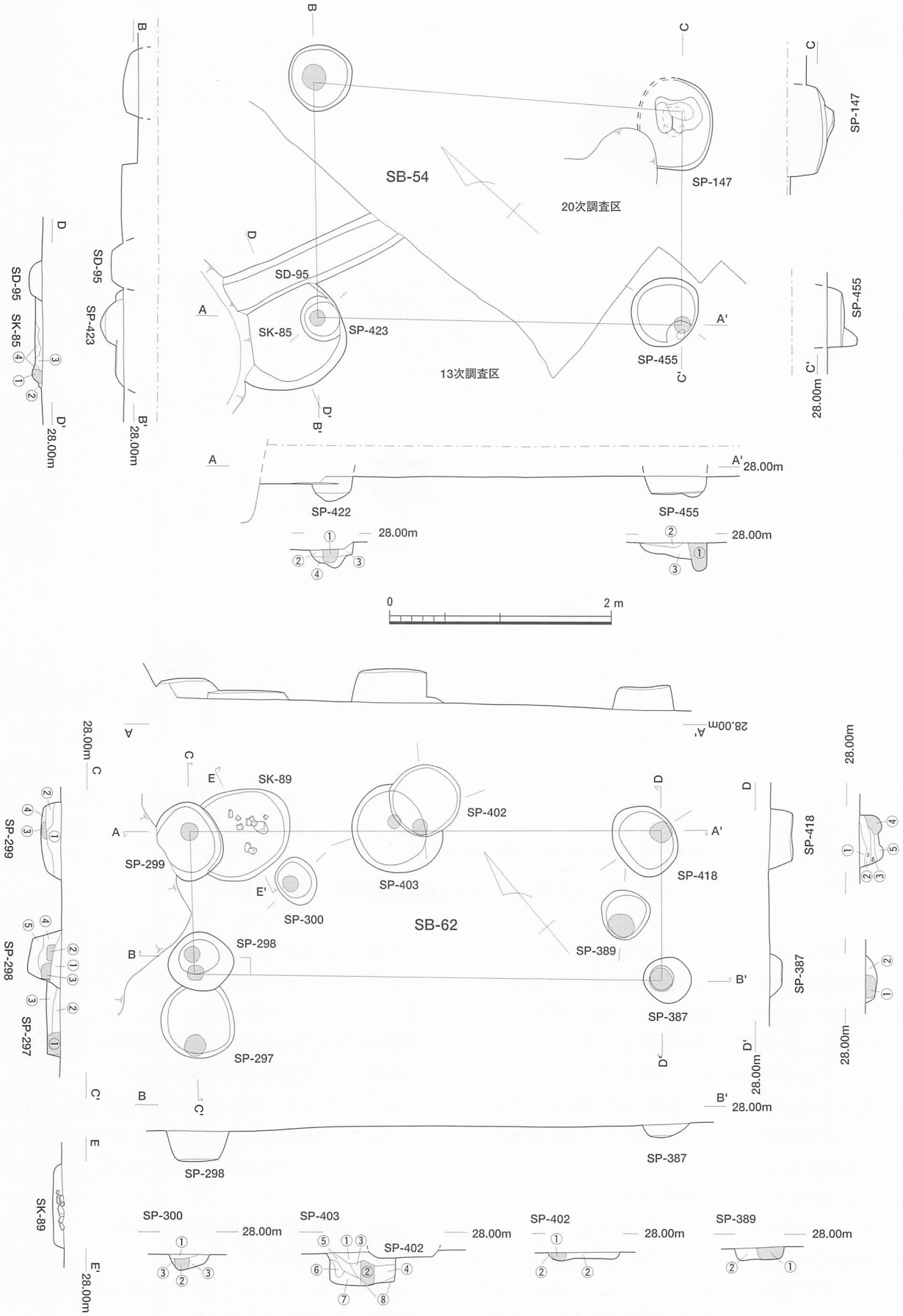

Fig. 112　SB-54・62、SK-89遺構実測図（縮尺 1 /50）

SB-54号建物（Fig. 112）

調査区東端のほぼ中央のCX-13・14区で立柱痕跡を確認できたSP-423・455と、20次調査区SP-147・152で構成される掘立柱建物である（Fig. 112）。梁間１間（梁間長1.9m、2.1m）、桁行１間（桁行長3.28m、3.32m）で、やや矩形の柱配置である。また、SP-423はSK-85を切る。

SP-423は、径36cm前後、深さ22cmの略円形の掘り形をもつ。掘り形内のやや北よりで径16cmの立柱痕跡を検出できた。①層は立柱痕跡、②～④層は掘り形埋土である。①層は径２～３㎜の砂礫が混じる暗褐色砂質土で、褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量みられる。②・③層は径１～３㎜の角礫が混じるにぶい黄褐色砂質土で、褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量含まれる。④層は暗褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量みられる。

SP-455は、長径65cm、短径58cm、深さ25cmの長円形の掘り形をもち、南壁に沿って径15cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は黒褐色シルトに小指先大の黄褐色シルト塊が混じる。②層は黄褐色シルト塊が詰まり、その間に黒褐色土砂質土が混じる。③層は黒褐色シルトである。

出土遺物は、SP-423の立柱痕跡①層から、弥生土器もしくは土師器の胴部細片２点、径２～３㎜の粒状の炭化物片がごく少量出土しただけである。また、掘り形埋土の②層にも、径２～３cmの粒状の炭化物片が少量含まれていた。SP-455では、弥生土器もしくは土師器の胴部細片が、掘り形埋土中から２点、立柱痕内から３点出土した。

出土土器は細片で、遺構の時期を決定する手がかりとはなりえない。しかし、各柱穴の埋土に砂礫を多く混じる特徴から、SB-54は古墳時代後期の掘立柱建物と判断した。

SB-57号建物（Fig.105・110）

DG-14・15区に位置するSP-116・144は、立柱痕跡の径、掘り形の平面形状や規模・深さが共通する。桁行１間（桁行長4.4m）の掘立柱建物を復元した（Fig. 110）。ただし、調査区が狭いために、これに対応する桁行の柱列は不明である。SP-144はSB-53の柱穴であるSP-127に切られる。

SP-116は径66cm、深さ40cmの略円形の掘り形をもつ。掘り形の中央からやや北よりで径19cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は、径３～５㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、全体的にわずかに灰色みをおびる。径２～３cmの輪郭がぼやけた楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊がごく少量含まれる。掘り形内埋土は、柱を立てるため底面に敷かれた⑧～⑩層、柱を固定した②～⑦層に分層できる。

立柱を固定する②層は径0.5～１cmの礫や小石が多く混じる暗褐色砂質土。③層は径５㎜前後の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径１cmほどの楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊が少量含まれる。④層は径３～５㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径２cmの楕円形の灰黄褐色砂質土塊をごく少量含む。⑤層は径３～５㎜の礫が少量混じる暗褐色砂質土で、径３cmの輪郭がぼやけた楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊が少量含まれる。⑥層も径３～５㎜の礫が少量混じる暗褐色砂質土で、やや灰色みをおびる。⑦層は暗褐色砂質土で、径３cmの楕円形の黄褐色シルト塊が多く混じる。

掘り形底面に敷かれた⑧層は径３～５㎜の礫が少量混じる暗褐色砂質土。⑨層も３～５㎜の礫が少量含まれる暗褐色砂質土。⑩層は暗褐色砂質土で、径１～３cmの楕円形の褐色シルト塊が少量混じる。

SP-144は径53cm、深さ46cmの略円形の掘り形をもち、ほぼ中央で径18cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は径２～３㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径１cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がごく少量含まれる。掘り形内は、底面に⑤層を敷き、その上に柱を立て②～④層で固定する。②層は暗褐色砂質土で、下部に黄褐色砂質土が混じる。③層は暗褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が混じり合う。④層は暗褐色砂質土で、径１cmの褐色シルトのレンズ状ブロックをやや多く含む。⑤層は暗褐色砂質土で、径１cmの褐色シルトのレンズ状ブロックがかなり多く混じる。

出土遺物は、SP-116の埋土中から、須恵器の坏身の口縁部細片（Fig. 105-35）、高坏の坏部と脚部の破片（Fig. 105-36・37）に加えて、①・②・③・⑤・⑩層から土師器や弥生土器の小片～細片、径５～5.5cm、厚さ３cmほどの花崗岩円礫が出土した。また、①・②・④・⑤層には１～３㎜の粒状の炭化物片が、

⑧～⑩層には径５㎝の角張った炭化物片が混じる。

SP-144では、①層から径５㎜の角張った炭化物片がごく少量出土。また、埋土中として取り上げた遺物には、古墳時代後期の須恵器、土師器の胴部破片20点がある。その中には、須恵器の坏蓋の口縁部と天井部破片（Fig. 105-38・39）が混じる。

以上の出土遺物の中で、須恵器の坏や高坏は古墳時代後期のもので、各柱穴の埋土に砂礫が多く混じる特徴からも、SB-57は当該期の掘立柱建物と考えた。

SB-58号建物（Fig. 106・110・111）

DG-14・15区では、SB-53を構成するSP-124・125・127、SB-57のSP-144・116以外に、SP-121・128・142で立柱痕跡を確認できた。その中で、SP-121とSP-142は、掘り形の規模や平面形は異なるが、掘り形の深さや立柱痕跡の径は共通する。SP-121・142が梁間（１間、梁間長3.25m）を構成する掘立柱建物を復元する（Fig. 110）。ただし、調査区が狭いために、SP-121・142に対応する柱列は不明である。

SP-121は略円形で、径38㎝、深さ29㎝を測る。西半部は調査区外にのびる。掘り形内のやや北よりで径14㎝の立柱痕跡を検出した。立柱痕跡の①層は、径２～５㎜の礫や小石が多く混じる暗褐色砂質土。掘り形埋土の②・③層も、同様に砂礫が多く混じる暗褐色砂質土である。径１～２㎝の丸い褐色シルト塊がごく少量含まれる。

SP-142は、長径65㎝、短径55～60㎝の長円形の掘り形をもち、東半部を共同溝で破壊されている。掘り形内のやや南よりで、径15㎝の立柱痕跡を確認できた。土層断面でみると、柱はやや北西（SP-121の方向）へ傾いている。埋土は、径２～３㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土が基本で、立柱痕跡にあたる①層は暗褐色砂質土である。掘り形埋土は、立柱を固定する②・③層、底面に敷かれた④～⑥層に分層できる。②層は暗褐色砂質土で、幅１～２㎝のにぶい黄褐色砂質土のレンズ状ブロックがごく少量混じる。③層は褐色シルトと暗褐色砂質土が混じり合う。④・⑥層は暗褐色砂質土で、幅１～３㎝の褐色シルトのレンズ状ブロックがやや多く混じる。⑤層は暗褐色砂質土と褐色シルトが混じり合う。

出土遺物としては、SP-121埋土から、弥生土器の胴部細片６点、径0.5～１㎝の角張ったごく少量の炭化物片がある。SP-142からも、①層で径５㎜ほどの角張った炭化物片がごく少量出土し、比較的多くの土器片が出土している。大半は細片～小片化した土器片であるが、いずれも弥生土器である。弥生時代中期後葉の上げ底の甕底部破片（Fig. 111-17）、後期中葉の甕の口縁部破片（Fig. 111-12）と同一個体と考えられる内面に乱雑にケズリを施した胴部破片、後期の二重口縁壺の口縁部小片（Fig. 111-13）、甕肩部小片（Fig. 111-14）、鉢の口縁部破片（Fig. 111-16）、内外面を乱雑に刷毛目調整した甕の大形破片が出土（Fig. 111-15）、この他に弥生時代中期後葉～後期の壺や甕の胴部破片25～30点ほどがある。また、上面と端部に敲打痕が残る砂岩円礫を利用した凹石の欠損品（Fig. 106-３）が出土している。

出土遺物は弥生時代の遺物だけである。しかし、各柱穴の埋土には砂礫が多く混じる。埋土の特徴から考えて、SB-58は古墳時代後期の掘立柱建物と判断した。

SB-62号建物（Fig. 111・112）

CZ・DA-13・14区に位置するSP-298・299・387・418で構成される掘立柱建物である（Fig. 112）。北側の桁行列のSP-299・418の中央に、立柱痕跡が確認できたSP-402があるが、これに対応する柱穴を南側では確認できていない。梁間１間（梁間長1.35m、1.27m）、桁行１間（桁行長4.22m、4.18m）で、桁行長は梁間の約３倍の長さである。また、SP-298はSP-297、SP-299はSK-89、SP-387はSC-34を切る。

SP-298は径53㎝前後、深さ30㎝の不整円形の掘り形をもつ。埋土中位で径15㎝前後の２つの立柱痕跡を検出した。①層は立柱が抜き取られた後に流れ込んだ土層で、小礫がわずかに混じる黒褐色シルト。②・③層は立柱痕跡で、ともに黒褐色シルト。南側の立柱痕跡がSB-62に伴うものである。④・⑤層は掘り形埋土で、黒褐色シルト。④層には径１～３㎝の黄褐色シルト塊が縞状に、⑤層には小指先大の拉げた黄褐色シルト塊がほぼ水平に帯状に点々と混じる。

SP-299は径60～66㎝、深さ17㎝の不整円形の掘り

形をもつ。埋土中位で径16cmの立柱痕跡を確認した。①・②層は立柱が先端を残して折り取られた後に流れ込んだ土層。ともに小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、②層には小指先大の黄褐色シルト塊が点々と含まれる。③層は立柱痕跡で、小礫混じりの黒褐色シルトである。④層は掘り形埋土で、黒褐色シルト。

SP-387は径40～42cm、深さ10cmの浅い皿状の掘り形をもつ。他の柱穴と比べて、掘り形は小さく浅い。径19cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡の①層は砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、黄褐色土が散漫に混じる。掘り形埋土の②層は黒褐色シルトである。

SP-418は、長径65cm、短径54cm、深さ18～20cmの不整な長円形の掘り形をもつ。埋土下部で立柱の抜き跡である④層を検出した。径は19cm前後。①～③層は立柱が抜き取られた後に流れ込んだ土層で、いずれも径１～３㎜の砂礫が混じる。①層はにぶい黄褐色砂質土で、明黄褐色シルトの小塊が所々にみられる。②・③層は暗褐色砂質土で、③層には径１～３㎜の丸い明黄褐色シルト塊がみられる。立柱痕跡の④層は小礫が混じる暗褐色砂質シルトで、径３㎜の丸い明黄褐色シルトが少量混じる。⑤層は掘り形埋土で、砂礫混じりの暗褐色砂質シルトで、径３㎜の丸い明黄褐色シルト塊がみられる。

出土遺物は少ない。SP-299では、赤焼き須恵器の坏身の底部（Fig. 111-18）、弥生時代中期後葉の甕の口縁部破片（Fig. 111-19）、弥生土器の甕の胴部小片３点が出土した。SP-387の掘り形埋土①層から、土師器の胴部片と考えられる土器片１点が出土。SP-418の上部流入土①層から、弥生土器の胴部小片４点が出土。他に、甕口縁部片（Fig. 111-20）や、弥生土器の甕や壺などの胴部細片～小片10数点がある。

遺構の時期を決定できる遺物はないが、各柱穴の埋土に砂礫が混じる特徴から、SB-62は古墳時代後期の掘立柱建物と判断した。

（４）杭列（柵？）

SA-20号杭列（Fig. 113・114）

DB-14区でSC-28を完掘した後に、西からSP-235・237・545・568・546・556の小穴が、北西－南東方向に一直線に連なっていることに気がついた。SP-235・237・556では立柱痕跡を検出でき、SP-545・546では立柱痕跡は確認できなかったが、ほぼ65～70cm（SP-545・546間のみが90cm）と等間隔に小穴が並ぶ。さらに、その下部には同じ方向に細長い溝状の土壙がある。布掘り状に溝状の土壙を掘り、その上に立柱を並べるための小穴を掘った杭列（柵？）と考えた（Fig. 113）。

溝状の布掘り部分の埋土は、砂礫混じりの暗褐色砂質土である。

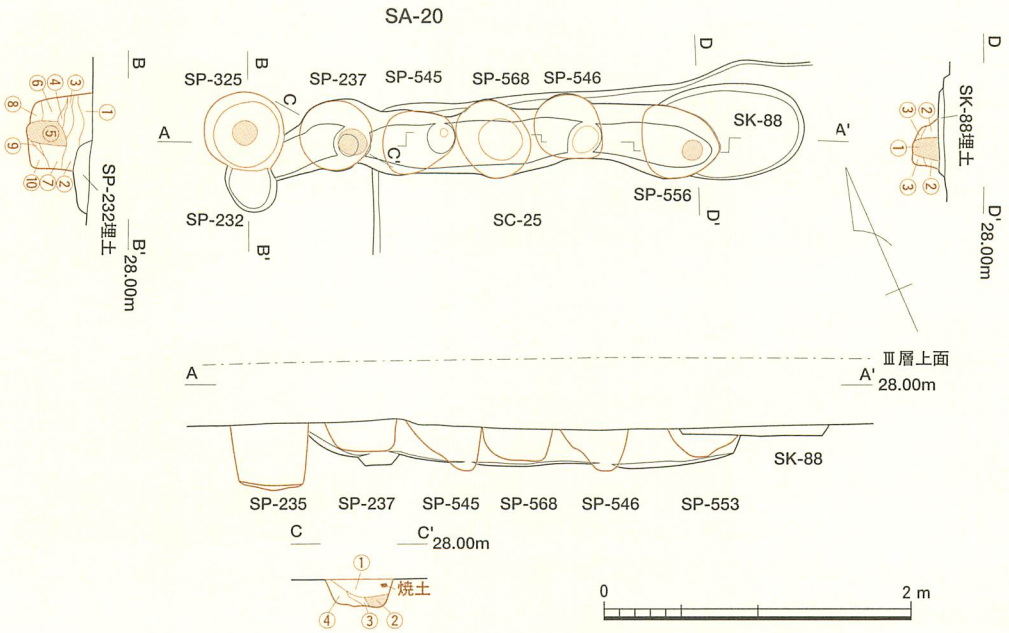

Fig. 113　SA-20遺構実測図（縮尺１/50）

SP-235は、SP-232に切られ、径55cm、深さ43cmの略円形の掘り形をもち、径16cmの立柱確認できた。立柱は先端を残して折り取られている。①～④層は、立柱の折り取り後に流入した土層。①層は黒褐色シルトで、親指先大の黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。②層は黒褐色シルト。③層は黒褐色シルトに黄褐色砂質シルトが混じる。④層は黄褐色砂質土である。立柱痕跡の⑤層は 黒褐色シルトで、部分的に小指先大の焼土塊が含まれる。⑥～⑩層は掘り形埋土で、黄褐色砂質シルトのレンズ状ブロックである⑨層を除き、いずれも黒褐色シルトと黄褐色シルトが2～3cmの厚さで縞状に互層となる。

SP-237は径46～48cm、深さ19cmの略円形の掘り形をもつ。掘り形下部で径14cm前後の立柱痕跡を確認できた。立柱は先端を残して折り取られ、その後、焼土塊が点々と混じる黒褐色シルトの①層が流入している。立柱痕跡にあたる②層は黒褐色シルト。掘り形埋土の③層は黒褐色シルトで、④層は黒褐色シルトに親指先大の黄褐色シルト塊が非常に多く混じる。

SP-545は長径49cm、短径40cm、深さ29cmの不整な長円形の掘り形をもつ。埋土は径2～3mmの礫が多く混じる黒褐色砂質土で、上部には径3～4cmの楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。

SP-568は長径52cm、短径44cm、深さ22cmの長円形の掘り形をもつ。埋土は砂礫混じりの黒褐色砂質シルトである。

SP-546は長径50cm、短径44cm、深さ26cmの不整な長円形の掘り形をもつ。埋土は、上部に径2～3mmの礫がやや多く混じる暗褐色砂質土である。

SP-556はSK-88に切られる。径50～53cm、深さ18cmの不整形の掘り形をもち、径13～14cmの立柱痕跡が確認できた。立柱痕跡の①層は小礫が混じる暗褐色砂質土で、径2mm前後の粒状の焼土塊がわずかにみられる。掘り形埋土の②・③層は径1mmの礫が少量混じる暗褐色砂質シルトで、下半部の③層には径2～3cmの丸いにぶい黄褐色シルト塊が点々とみられる。

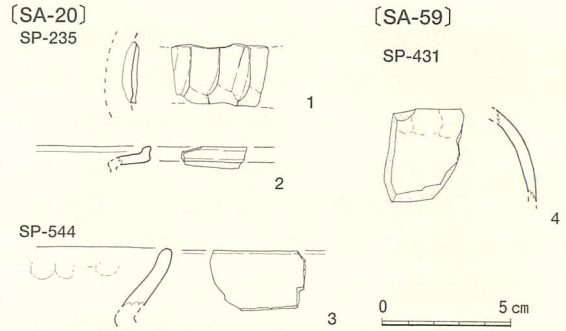

Fig. 114　SA-20・59出土遺物実測図（縮尺1/3）

溝状の布掘り部分から遺物は出土していない。SP-235では、柱痕痕跡の⑤層から弥生中期の外面にミガキを施す甕胴部片が出土。他に、弥生土器の壺や甕の胴部小片13点ほど、弥生時代中期後葉の甕の口縁部細片（Fig. 114-2）、弥生後期前葉の壺胴部の突帯片（Fig. 114-1）がある。SP-237からは、土器細片や、径1cmの角張った炭化物片、径2～3mmの粒状の炭化物片が多く出土した。SP-545からは、弥生土器の大壺胴部片ほか細片数点と、径1cmの角張った炭化物片がやや多く出土。SP-546からは、弥生土器の胴部の細片～小片10数点、径2～3mmの粒状の炭化物片が少量出土している。SP-556の立柱痕跡の①層からは、弥生土器もしくは土師器の胴部細片2点が出土。他に、土師器の甕口縁部細片、胴部細片1点がある。

遺構の時期は遺物からは判断できないが、埋土に砂礫が混じる特徴から、古墳時代後期の時間幅の中でSA-20の時期を捉えておきたい。

SA-59号杭列（Fig. 104・114）

CY-14区の北端に位置する。東からSP-431・315・314・447はほぼ一直線上に並び、杭痕跡が検出された。北側のSB-42の梁間と方向が一致し、その延長線上にSB-49の桁行中央の柱穴SP-430が位置する。掘り形には違いがあるが、柵を構成する杭列と考えた（Fig. 104）。全長2.2m、SP-447・314間は0.85m、SP-314・315間は0.65m、SP-315・431間は0.7mを測る。

SP-431は長さ53cm、幅40cm、深さ20cmの不整な隅丸長方形の掘り形をもち、径10cmほどの先端が尖った杭痕跡を埋土下部で確認した。上部には①層が流れ込み、杭の先端を残して折り取られたと考えられる。掘り形がSP-314・315などと比べて大きく不整形であるのは、その際に杭の周囲が掘り返されたためと言えよう。上部流入土の①層は径1～3mmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、幅1cmほどの褐色シルトのレンズ状ブロックが少量みられる。杭痕跡の②層は径1～2mmの砂礫がやや多く混じる暗褐色砂質土で、褐色シルトのレンズ状ブロックが少量みられる。掘り形埋土の

③・④層は径１～２㎜の砂礫がごく少量混じる暗褐色砂質土。⑤層は部分的に粘性をおびた暗褐色砂質土である。③～⑤層には幅１～２㎝の褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。

SP-315は径21～23㎝、深さ20㎝の略円形の掘り形をもち、径12㎝の先端が尖った杭痕跡を確認できた。杭痕跡の①層は黒褐色シルトで、やわらかい小指先大の黄褐色シルト塊が含まれる。これと比べて、掘り形埋土の②層には黄褐色シルト塊が多く混じる。

SP-314は径22～23㎝、深さ10～11㎝の円形の掘り形をもち、その中央で先端が尖る径12㎝の杭痕跡を確認できた。杭痕跡の①層は小礫混じりの黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルトで、中央に向かって落ち込むように黄褐色シルトのレンズ状ブロックがみられる。

SP-447は長径43㎝、短径35㎝、深さ７㎝の長円形の掘り形で、その南よりで径10㎝の杭痕跡を検出した。杭痕跡の①層は暗褐色砂質土で、径５㎜の楕円形の褐色シルト塊が少量混じる。掘り形埋土の②層は暗褐色砂質土で、幅１～２㎝の褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられた。

遺物が出土したのはSP-341の上部流入土①層からだけである。土師器の小型丸底壺の胴部片（Fig. 114-３）、弥生土器の胴部細片３点、サヌカイト石片、径２～３㎜の粒状の炭化物片がごく少量出土した。

出土遺物からみると、SA-59の上限は古墳時代前期である。しかし、埋土に砂礫が多く混じる特徴や、SB-42の梁間と方向が一致すること、SA-59の東への延長線上にSB-49のSP-430が位置することから、SB-42・49と同時に造られた杭列（柵？）列と考えた。

SA-60号杭列（Fig. 104）

調査区北東隅のCY-14・CX-15区で出土したSP-318・327・328もほぼ一直線上に並び、杭痕跡が検出された（Fig. 104）。掘り形の形状や杭痕跡の大きさはほぼ共通する。南側のSB-43の梁間の方向とほぼ一致する。柵列を構成する杭列と考え、SA-60とした。全長1.2m、SP-318・327間は0.75m、SP-327・328間は0.45mを測る。

SP-318は径22～24㎝、深さ15㎝の略円形の掘り形をもち、径11㎝の先端が尖った杭痕跡を確認できた。杭痕跡にあたる①層は黒褐色で、やや北に傾く。掘り形埋土の②層は黒褐色シルトに黄褐色シルトがわずかに混じる。

SP-327は径21～23㎝、深さ15～16㎝の不整円形の掘り形をもち、径13㎝ほどの先端がやや尖った杭痕跡を検出した。杭痕跡の①層は黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。掘り形埋土の②層は黄褐色シルトに黒褐色シルトが多く混じる。

SP-328は径19㎝、深さ13㎝の円形の掘り形で、径９㎝の先端が尖る杭痕跡を確認した。杭痕跡の①層は黒褐色シルトで、上部にやわらかい黄褐色シルトがつぶれた状態で混じる。掘り形埋土の②層は黒褐色シルトに黄褐色シルトが散漫に混じる。

出土遺物は、SP-318で径５㎜の角張った炭化物片がごく少量出土しただけである。しかし、SB-43の梁間の方向とほぼ一致することから、SB-43と同時併存する古墳時代後期の杭列（柵？）列と考えた。

（５）溝

SD-92号溝（Fig. 22・115）

DF-13区のSC-11の床面で検出した。調査中にはSD-152としていたが、調査後に遺構番号をSD-92に振り替えた。埋土には砂礫が多く混じることから、古墳時代後期の遺構であり、本来SC-11を切る溝と考えた（Fig. 22）。

幅30㎝、深さ10㎝を測る。溝底はかなり凹凸があり、中央に径１㎝の楕円形のにぶい黄褐色砂質土が少量混じる暗褐色砂質土の①層、その両側にやや灰色みをおびた暗褐色砂質土の②層、にぶい黄褐色砂質土の③・④層、暗褐色砂質土の⑤層が流れ込む。

溝底を中心として花崗岩の円礫や土器片が出土した（Fig. 115-１～３）。１は丸みをおびた天井部をもち、天井部と口縁部の境に浅い凹線が巡る。口縁部は回転横ナデされ、先端内面に小さな面ができている。２は土師器の甕。指頭による整形後、横ナデを施して口縁端面に小さな面をつくる。３は脚台付き鉢で、「ハ」

字形に広がる脚台部に焼成前に穿孔を施す。この他、2と同一個体と考えられる土師器の胴部小片、弥生土器や土師器の胴部細片が10点ほどが出土した。また、①層からは、径2～3㎜の粒状の炭化物片が少量含出土している。

出土遺物からみて、SD-92は古墳時代後期の溝である。

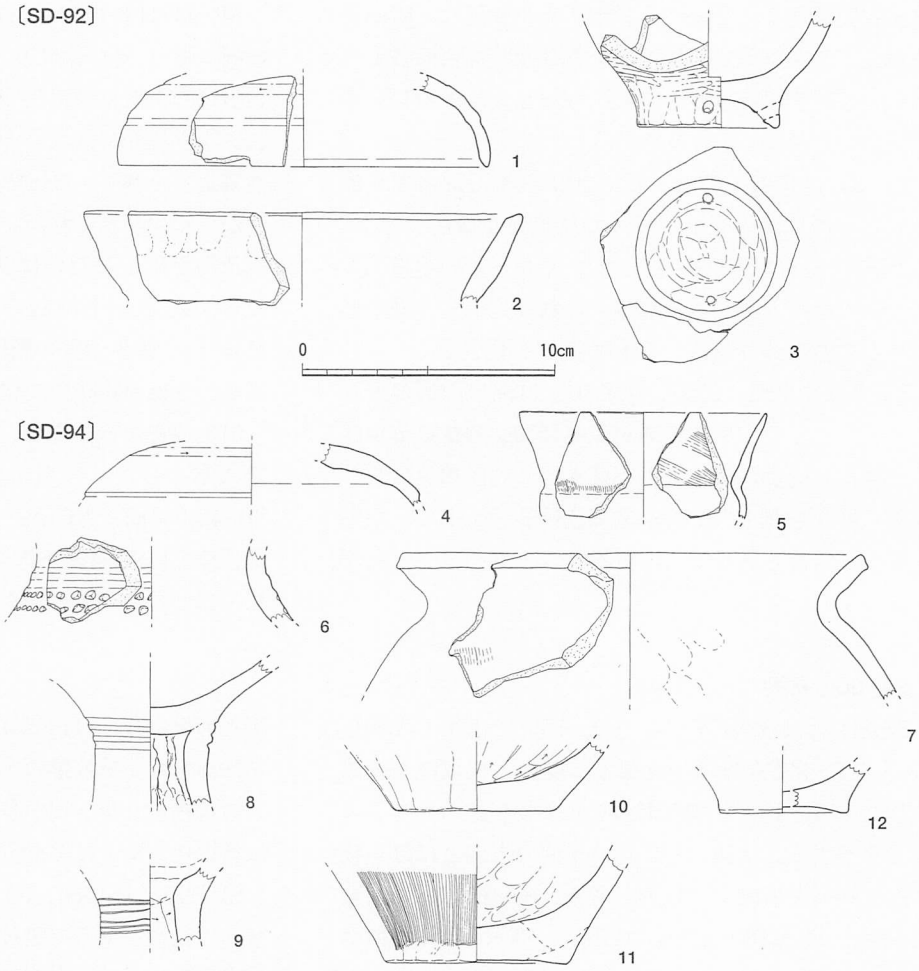

Fig. 115　SD-92・94出土遺物実測図（縮尺1/3）

SD-94号溝

(Fig. 14・115)

DG-18区南端に位置する。調査中にはSD-356としていたが、調査後に遺構番号をSD-94に振り替えた（Fig. 14）。

溝幅は60㎝を測り、東端がややすぼまり気味で、細長い溝状の土壙である可能性もある。断面は幅の広いU字形で、深さ6㎝を測る。SK-82・364を切り、SP-363に切られる。また、直上のⅢ層部分ではSK-1を確認している。

SC-7の床面で確認したが、Ⅲ層部分から古墳時代の遺物も出土しているので、SC-7よりも新しい可能性が高い。

埋土は、壁際の底面に褐色砂質土の②・③層が流れ込み、その上部に径0.5～1㎝の楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がまばらに混じる暗褐色砂質土の①層が堆積している。

①層中から径0.3㎝の角張った炭化物片がごく少量出土しているが、他に遺物は出土していない。

これに対して、Ⅲ層部分からは遺物は比較的多く出土した（Fig. 115-4～11）。弥生時代中期後葉～後期前葉が大半を占めるが、古墳時代前期の小型丸底壺（Fig. 115-5）や、古墳時代後期の須恵器坏蓋の天井部破片（Fig. 115-4）などが少量混じる。

埋土は暗褐色砂質土であり砂礫が混じらないこと、SK-82・83を切っていることから考えると、弥生時代中期後葉～古墳時代中期の時間幅で捉えることができるが、Ⅲ層から古墳時代前期の遺物があることから、SD-94は当該期の溝である可能性が高い。

（6）鍛冶炉

SF-41号炉（Fig. 116・117）

発掘調査の最終段階で、工事の設計変更に伴って、DF-11区で幅1.1m、長さ5mの管路部分の調査を実

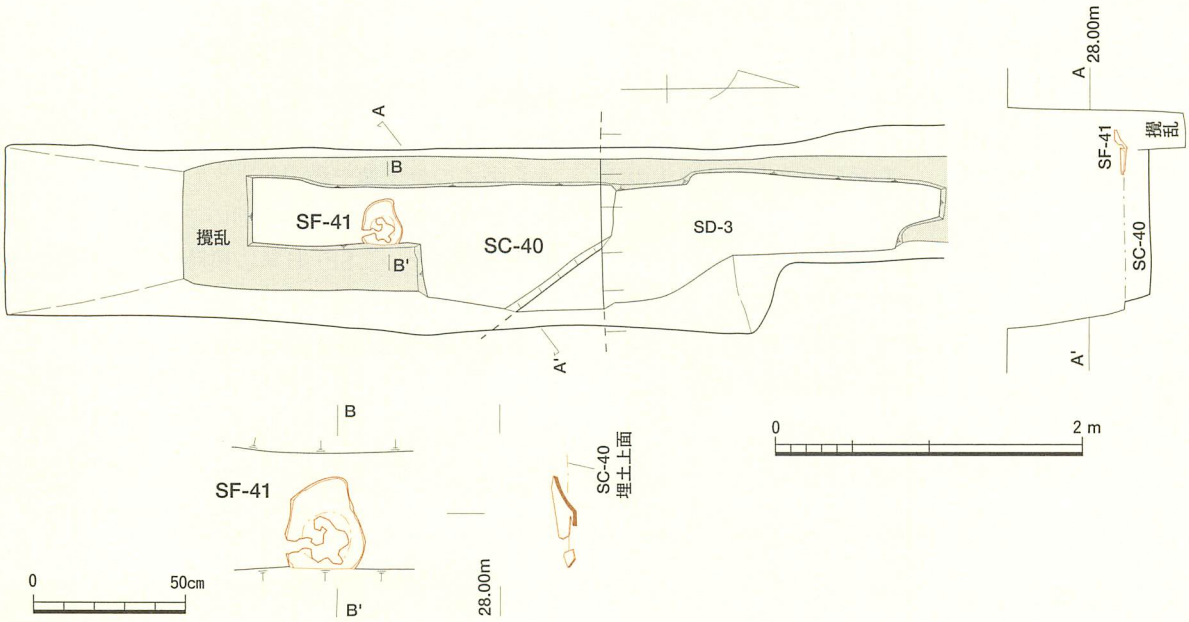

Fig. 116　SF−41遺構実測図（縮尺１/50、１/25）

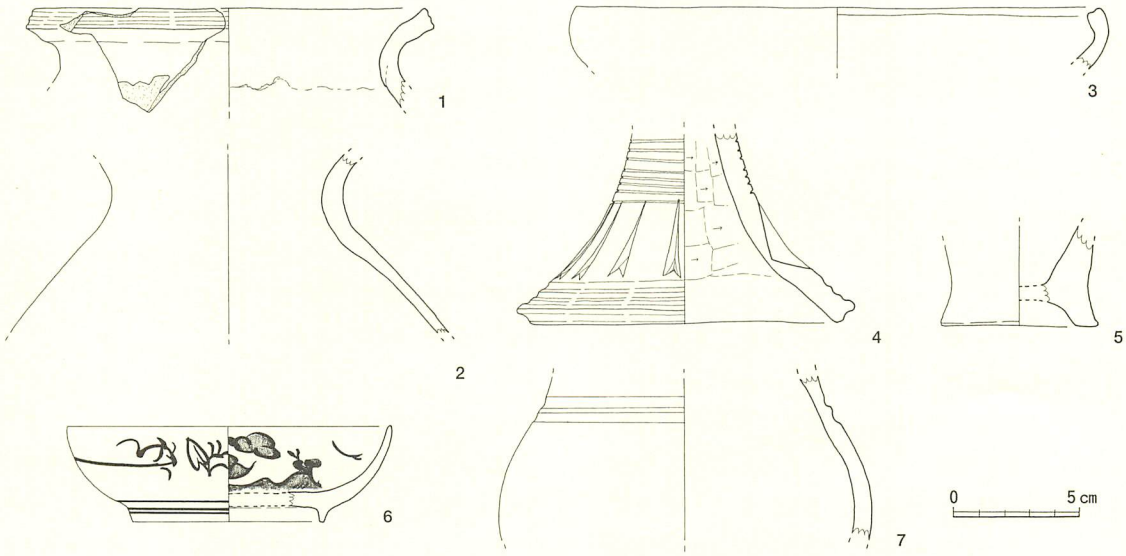

Fig. 117　SF−41上部暗褐色砂質シルト砂礫層出土遺物実測図（縮尺１/３）

施することとなった。表土層を除去すると、基本層序Ⅱ層の城北団地造成以前の旧水田層があらわれたが、西壁沿いや、南端部分、東壁沿いの一部は、既設の配管を埋設した際の撹乱で破壊されていた。

Ⅱ層を除去すると、暗褐色砂質シルト砂礫層を確認し、さらに掘り下げを進めると、Ⅳ層上面で南北にのびる暗褐色砂質シルト砂礫層の広がりと、これに切られた砂礫をあまり含まない暗褐色砂質土層部分があらわれた。Ⅱ層直下からあらわれた暗褐色砂質シルト砂礫層部分は、堆積状況から古代末～中世のSD-３の埋土と判断した。その下層で検出した砂礫をあまり含まない暗褐色砂質土層部分は、先に報告した弥生時代の竪穴式住居跡であるSC-40の埋土部分である。

そのSC-40上面で、南北長25cm、東西幅30cm、深さ８cmの凹レンズ状に窪む鉄滓が出土した（Fig. 116）。周辺を精査したが、これに伴う掘り込みを明確にできなかった。しかし、SF-41の下面には灰白色の砂礫が混じる暗褐色砂質土がみられ、SC-40埋土の砂礫をあまり含まない暗褐色砂質土層とは明確に区分できる。また、鉄滓の凹レンズ状に窪む部分の中には灰白色の

砂礫が詰まり、上面を覆うSR-3埋土最上部の暗褐色砂質シルト砂礫層とも異なっている。そのため、凹レンズ状に窪む鉄滓は原位置を保っているものと判断し、鍛冶炉の可能性を考えた。

SF-41に伴う遺物はない。上面を覆うSD-3埋土の暗褐色砂質シルト砂礫層部分から出土した遺物をみると、弥生時代中期後葉～後期初頭の土器（Fig. 117-1～5）に混じり、最上面のⅡ層との層界部分から近代の染付皿（Fig. 117-6）や施釉陶器（Fig. 117-7）が出土している。弥生土器はSC-40の埋土がSD-3によって削られ混入した遺物と考えられる。

こうした層序関係と出土状況から、SF-41は弥生時代後期～古代末の時間幅で捉えるしかない。ただし、今次調査で出土した古墳時代後期の遺構には、埋土中から多くの焼土塊や鉄滓が出土している。その一方で、弥生時代後期～古墳時代中期の遺構には、そうした遺物がみられない。SF-41は古墳時代後期の遺構である可能性が高い。

なお、SF-41は遺構を切り取って保存している。

（7）土壙

SK-1号土壙（Fig. 118・119）

DG-18区南半部のⅢ層上面で焼土と炭化物が比較的集中する広がりを検出した。Ⅲ層上面を少し掘り下げ、焼土と炭化物の広がりを追いながら、遺構輪郭を検出し、長径78cm、短径52cmの不整な隅丸長方形の土壙であることを確認した（Fig. 118）。下層にはSD-94がある。

深さ7～8cmの浅皿状の土壙で、底面はかなり凹凸がある。壁面および周辺は強い火熱で赤変し、埋土中にも小さな焼土塊が散乱する。

埋土上部には、径2～3mmの礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土の①・③層と、にぶい黄褐色砂質土の④・⑤層が堆積している。①層には径5mmほどの焼土塊、③層には焼土塊と径5mmの細長い炭化物片が混じる。②層は生物擾乱痕跡で、径1cmの礫がごく少量混じるにぶい黄褐色砂質土である。下部にいくにつれて暗褐色へ変化する。埋土の下部には⑥層が底面全体にひろがる。厚さ3cmほどで、径5mmの楕円形の黄褐色シルト塊がごく少量混じる暗褐色砂質土で、0.5～1cmの楕円形の炭化物片を非常に多く含む。⑦層はⅢ層部分が火熱を受けて赤変した部分である。

埋土から出土した遺物は少ない。埋土上部の③層から弥生時代後期初頭と考えられる甕の口縁部端部（Fig. 119-1）、弥生時代後期後葉の凸レンズ状の不安定な壺の底部（Fig. 119-2）が出土しているが、他には胴部細片が20数点ほどみられただけである。

SK-1上部のⅢ層部分からは、弥生時代中期後葉～後期前葉の壺の口縁部（Fig. 119-3）、頸部（Fig. 119-4）、深鉢形の甕口縁部（Fig.119-5）があり、他に壺の比較的大形の胴部破片、甕の胴部破片が数10点出土した。

このように、SK-1から出土した遺物は弥生土器ばかりである。しかし、埋土が砂礫が多く混じり、下層のⅣ層上面で出土したSD-94よりも新しいことから、古墳時代後期の土壙と考えられる。

SK-9号土壙（Fig. 118・119）

共同溝部分北端近くのDF・DG-20区の境界部に位置する不整な長楕円形の土壙である（Fig. 118）。SC-5を切る。長さ192cm、幅88cmを測る。東壁の立ち上がりは緩やかであるが、他の壁はかなり急な立ち上がりをみせる。底面には緩やかな凹凸がある。

埋土の上半部にあたる①層は、砂礫混じりの褐色砂質シルトで、径1～2mmのにぶい黄褐色シルト塊が点々と混じる。下層の②層と比べて黒みが弱く、土質も粗くざらついている。下半部には②・③層が流れ込んでいる。②層は砂礫混じりの暗褐色砂質シルト。③層はきめが細かくさらさらした質感をもつ。輪郭がぼやけた径1cmのにぶい黄褐色シルト塊が混じる。④～⑥層は生物擾乱の痕跡である。④・⑥層はにぶい黄橙色シルト、⑤層は砂礫混じりのにぶい黄褐色シルト。

遺物の大部分は①層から出土している。弥生土器ばかりである。凹線文も巡らす壺の口縁部（Fig. 119-6）、小型甕の口縁部（Fig. 119-7）、甕胴部片や、弥生土器の胴部細片～小片がある。いずれも、弥生時

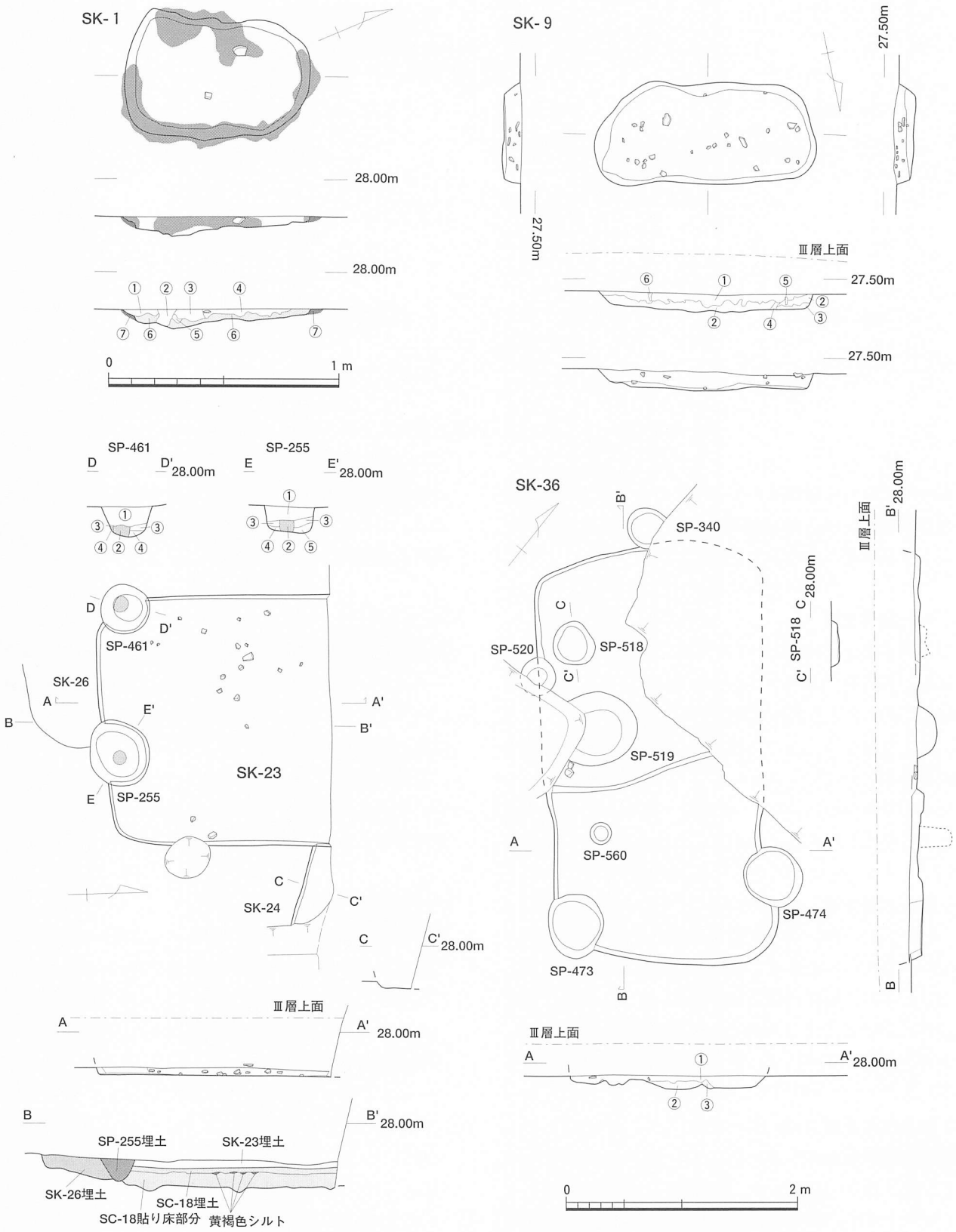

Fig. 118　SK-1・9・23・24・36遺構実測図（縮尺1/25、1/50）

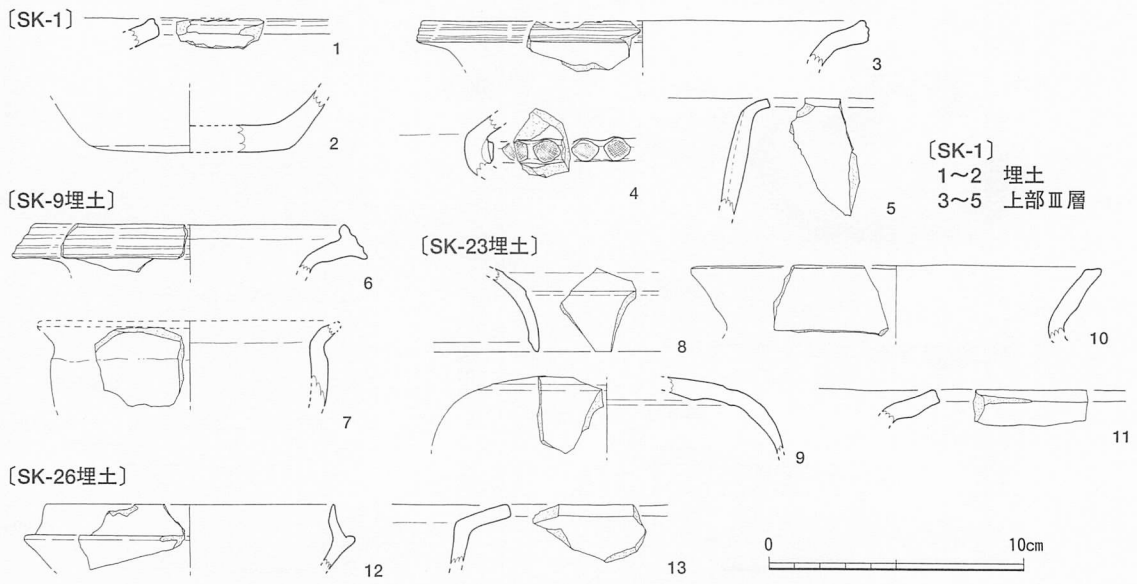

Fig. 119　SK-1・9・23・26出土遺物実測図（縮尺1/3）

代中期後葉～後期初頭のものである。また、上部Ⅲ層部分からは、弥生中期後葉～後期の甕や壺に加えて、ごく少量の須恵器の細片が出土した。

以上、SK-9から出土した遺物は弥生土器ばかりである。しかし、埋土に砂礫が多く混じる特徴から、古墳時代後期の土壙と判断した。

SK-23号土壙（Fig. 118・119）

DB-15区に位置する隅丸方形の土壙である（Fig. 118）。SK-26を切り、SP-255・461に切られる。東西幅2.17mを測り、北半は調査区外にのびる。

埋土は径2～5㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

埋土中から、土師器・須恵器・弥生土器の破片が点々と出土している。しかし、いずれも細片～小片であり、遺構時期を推定できる特徴的な部位の破片はみられない。上部のⅢ層部分からも、弥生土器・土師器・須恵器が出土しているが、これも細片～小片化したものばかりである。

遺構の時期を判断する手がかりとなる遺物はないが、埋土に砂礫が多く混じる特徴から古墳時代後期の土壙と考える。

SK-24号土壙（Fig. 118）

DB-15区のSK-23の東側で東西壁が直線的にのびる遺構の落ち込みを確認できた（Fig. 118）。西側をSK-23に切られ、東側は攪乱部で破壊され、大部分が調査区外にのびるので、全体の規模や形状は不明である。壁の立ち上がりが急で、竪穴式住居跡の可能性もあるが、確証はない。ここでは土壙として報告する。

埋土は礫が混じる暗褐色砂質土である。遺物は出土していない。

埋土に砂礫が多く混じる特徴から、古墳時代後期の土壙と判断した。

SK-26号土壙（Fig. 81・119）

DB-14・15区で、SC-22、SK-23、SP-255に切られ、SC-18を切る土壙で、部分的にしか残存していない（Fig. 81）。SK-23の土層断面では、SP-255の北側に同質の土層がみられないので、幅が80㎝ほどの細長い楕円形の土壙と考えられる。埋土は、径2～3㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

遺物は、埋土中から古墳時代後期の須恵器の坏身（Fig. 119-12）、弥生時代中期後葉～後期前半の鉢（Fig. 119-13）、須恵器甕もしくは壺の胴部細片が出土しているだけである。

SK-26を切るSC-22が古墳時代後期、SK-26に切られるSC-18も古墳時代後期の遺構であり、埋土出土の

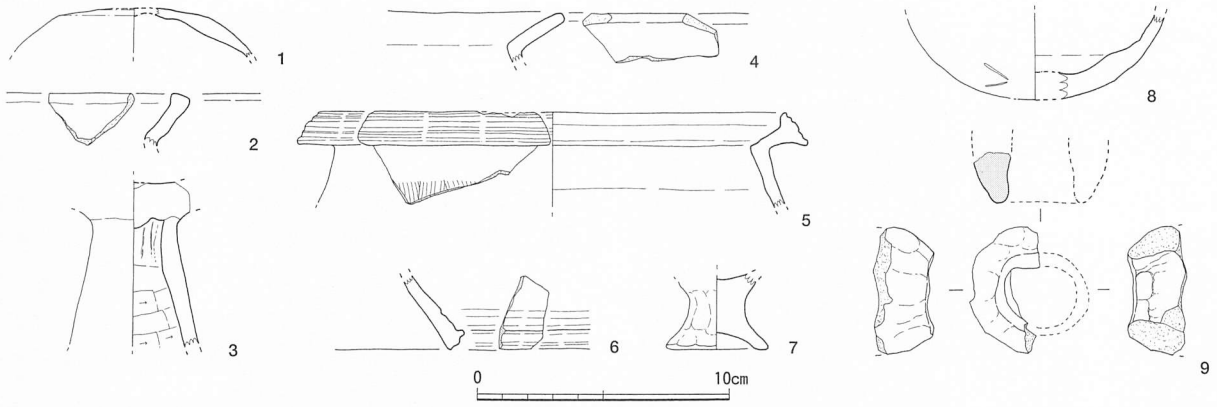

Fig. 120　SK-36出土遺物実測図１（１～７：埋土、８・９：上部Ⅲ層、縮尺１/３）

須恵器坏蓋とあわせ、古墳時代後期の土壙と考える。

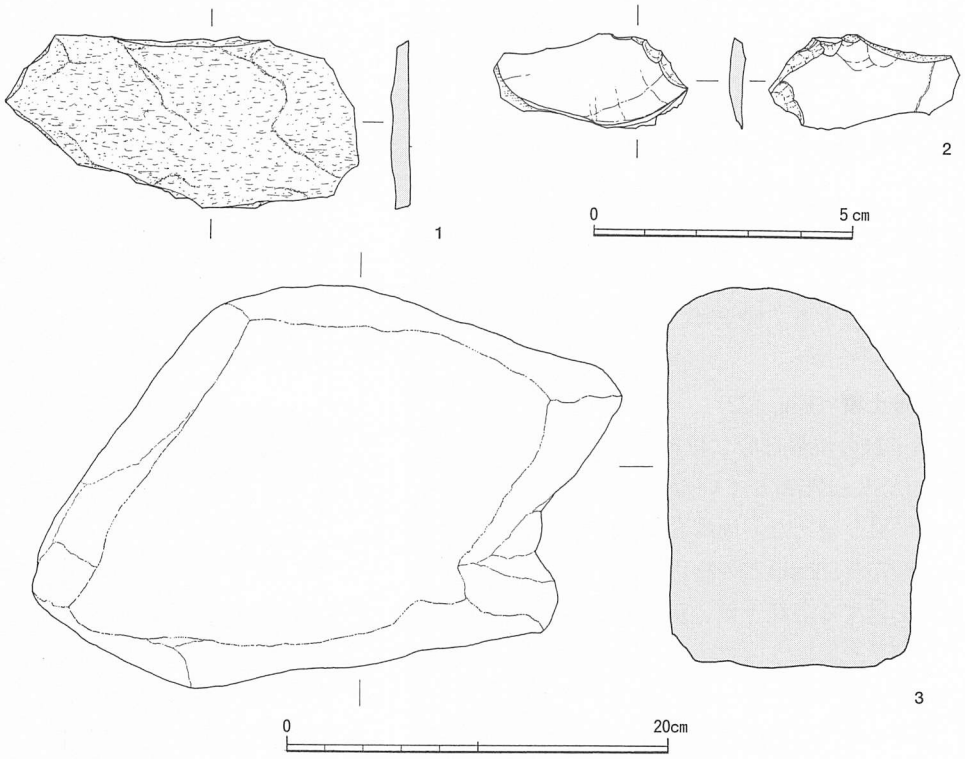

Fig. 121　SK-36出土遺物実測図２（縮尺２/３、１/４）

SK-32号土壙

(Fig. 99)

調査区北壁沿いのCZ・DA-15区で検出した隅丸方形の土壙である(Fig. 99)。SC-31・33を切り、SP-502に切られる。北半部分は調査区外にのびており、南北長は不明。東西幅は2.2～2.3mを測る。床面はほぼ平坦である。

埋土は径２～９㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質シルトである。埋土中には炭化物片が若干混じる。

遺構の時期を決定できる遺物は出土していない。しかし、砂礫が多く混じる埋土の特徴から、古墳時代後期の土壙と判断できる。

SK-36号土壙（Fig. 118・120・121、Pl. 23）

CY-13・14、CZ-14区で出土した隅丸長方形の土壙である（Fig. 118）。SP-340・473・474・519・520に切られ、SP-471・559を切る。また、SP-518を底面で確認したが、SK-36との関係は不明である。北東部分の1/4ほどを攪乱で破壊されるが、長さ3.63m、幅1.78～1.94mを測る。西半部は深さ４～５㎝と浅いが、東半部は６～12㎝と一段深くなっている。底面はかなり凹凸がある。

埋土の主体である①層は、径２～５㎜の礫が多く混じる黒褐色砂質土である。径１㎝の楕円形の褐色シル

ト塊がごく少量含まれる。底面の東半部分のほぼ中央には、火熱を受けて赤変した砂礫混じりの黒褐色砂質土である②層のレンズ状の塊がみられた。炉跡の可能性も考えて精査したが、平面的には②層の広がりはほとんどなかった。径1㎝の楕円形の褐色シルト塊がごく少量含まれる。③層は暗褐色砂質土の塊である。

底面から、弥生土器の甕胴部と、古墳時代後期の須恵器甕胴部の細片が各1点ずつが出土した。他は埋土中に散乱した状態で出土している。埋土中の遺物は少量で、弥生土器の細片（Fig. 120-4～7）が多いが、古墳時代後期の短頸壺の蓋と考えられる須恵器破片（Fig. 120-1）、古墳時代中期の土師器甕（Fig. 120-2）、高坏（Fig. 120-3）、緑色片岩の石片（Fig. 121-1）、サヌカイトの石片（Fig. 121-2）が出土している。

SK-36上部のⅢ層部分からも弥生土器・土師器・須恵器が出土している。しかし、いずれも細片ばかりである。外底面にヘラ記号を施す須恵器の甑（Fig. 120-8）、鞴羽口（Fig. 120-9、Pl. 23-①）、砂岩の台石（Fig. 121-3）がある。

埋土から出土した遺物には、弥生時代あるいは古墳時代中期の遺物が混在するが、短頸壺の蓋と考えられる須恵器があり、砂礫が多く混じる埋土の特徴もあわせ、SK-36は古墳時代後期の土壙と考えた。上部Ⅲ層の須恵器の甑と鞴羽口は当該期に伴うものと考えられる。

SK-77号土壙（Fig. 122）

DF-14区に位置する楕円形と考えられる小型土壙である（Fig. 122）。両端を既設の管路で破壊されている。調査中にはSK-174としていたが、調査後に遺構番号をSK-77に振り替えた。幅70㎝前後を測り、深さ5～8㎝の皿状を呈する。埋土は、暗褐色砂質シルトであるが、他の土壙と比べて、やや砂礫混じりで、土色もやや灰色みをおびる。

遺物は出土しなかった。

埋土には砂礫が混じる特徴から、古墳時代後期の土壙と考える。

SK-78号土壙（Fig. 122）

DF-13・14の境界部分に位置する小型土壙である。調査中にはSK-175としていたが、調査後に遺構番号をSK-78に振り替えた。両端を既設の管路で破壊されている。幅76～85㎝ほどの楕円形で、深さ2～4㎝の浅い皿状を呈する。埋土は、SK-77と同じく、やや灰色みをおびた暗褐色砂質シルトで、全体に砂礫が少量混じる。

出土遺物はない。

埋土に砂礫が混じる特徴から、古墳時代後期の土壙と考える。

SK-81号土壙（Fig. 26・123、Pl. 19）

CY-13区のSC-35の床面で検出した不整形の土壙である（Fig. 26）。長さ90㎝、最大幅60㎝、深さ15㎝を測る。不整形であるため、当初、SP-348・349の切り合いを考えたが、埋土の観察から1基の土壙であることを確認し、遺構番号を調査後にSK-81に振り替え、SP-348・349を欠番とした。SC-35を切ると考えられる。

埋土最上部の①層は径3㎜の礫が少量混じる黒褐色砂質土で、径1～2㎝の楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。②層は径2～5㎜の礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土。①層直下には、厚さ2㎝ほどの焼土層の③層が南側に落ち込むように広がる。径3㎜ほどの礫が混じる。その下位にある暗褐色砂質土の④層にも焼土が混じる。埋土下半部には、径2～5㎜の礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土の⑤層、径3～5㎜の各礫が少量混じる暗褐色砂質土の⑥層が堆積している。

③層の焼土層を一気に取り上げて水洗選別した。外面を刷毛目、内面をケズリ調整した古墳時代後期の土師器甕の胴部、弥生時代中期末の甕（Fig. 123-1）や壺（Fig. 123-3）の口縁部細片、サヌカイトと微細石片、ヤマグワの炭化材片、炭化米が出土した。炭化材と炭化米については第Ⅳ章を参照されたい。

また、焼土直下の⑤層～⑥層上部から、完形品を含む3点の小型丸底壺（Fig. 123-4～6）、高坏脚裾部（Fig. 123-7）が出土した。4（Pl. 19-⑦）は略完形である。出土状況からSK-81に伴う遺物と考えられる。古墳時代中期に比定できる。

この他、弥生時代中期後葉～後期の鉢や甕（Fig.

123-2)、壺の口縁部や胴部の破片があるが、いずれも細片である。

埋土に砂礫があまり混じらないことと、出土遺物から、SK-81は古墳時代中期の土壙と判断した。

SK-82号土壙（Fig. 122）

DF・DG-18区東部の共同溝余掘り壁の土層観察で、Ⅲ層と類似する暗褐色砂質土のごく浅い落ち込みを確認していた。Ⅲ層掘り下げ中やⅣ層上面で遺構の平面輪郭を確認することに努めたが、攪乱溝の南側で隅丸方形の土壙平面形を把握できたが、北側では確認できなかった。しかし、共同溝余掘り壁の土層観察で確認された落ち込みと、南側で検出できた平面形から、長辺1.7m、短辺1.5m前後の長方形土壙であると考えた（Fig. 122）。調査中にはSK-355としていたが、調査後に遺構番号をSK-82に振り替えた。

底面にはやや凹凸があり、北側に向かって緩やかに浅くなる。

埋土は、西壁沿いに径2cmほどの褐色砂質土塊が少量混じる暗褐色砂質土の④層が流れ込み、底面全体をしまりのないにぶい黄褐色砂質土の③層が覆う。埋土の最上部には、径0.2～0.3cmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土の①層が堆積する。①層には径1～2cmの拉げた楕円形の褐色砂質土塊が少量混じる。②層は径0.2～0.5cmの角礫や小石がやや多く混じる暗褐色砂質土で、攪乱際で急に落ち込む。遺構検出面や土壙底面では確認できなかったが、SK-82を切り込む小穴の埋土である可能性を考えておく。

遺物は出土しなかったが、埋土に角礫が多く混じる特徴から、古墳時代後期の土壙と判断した。

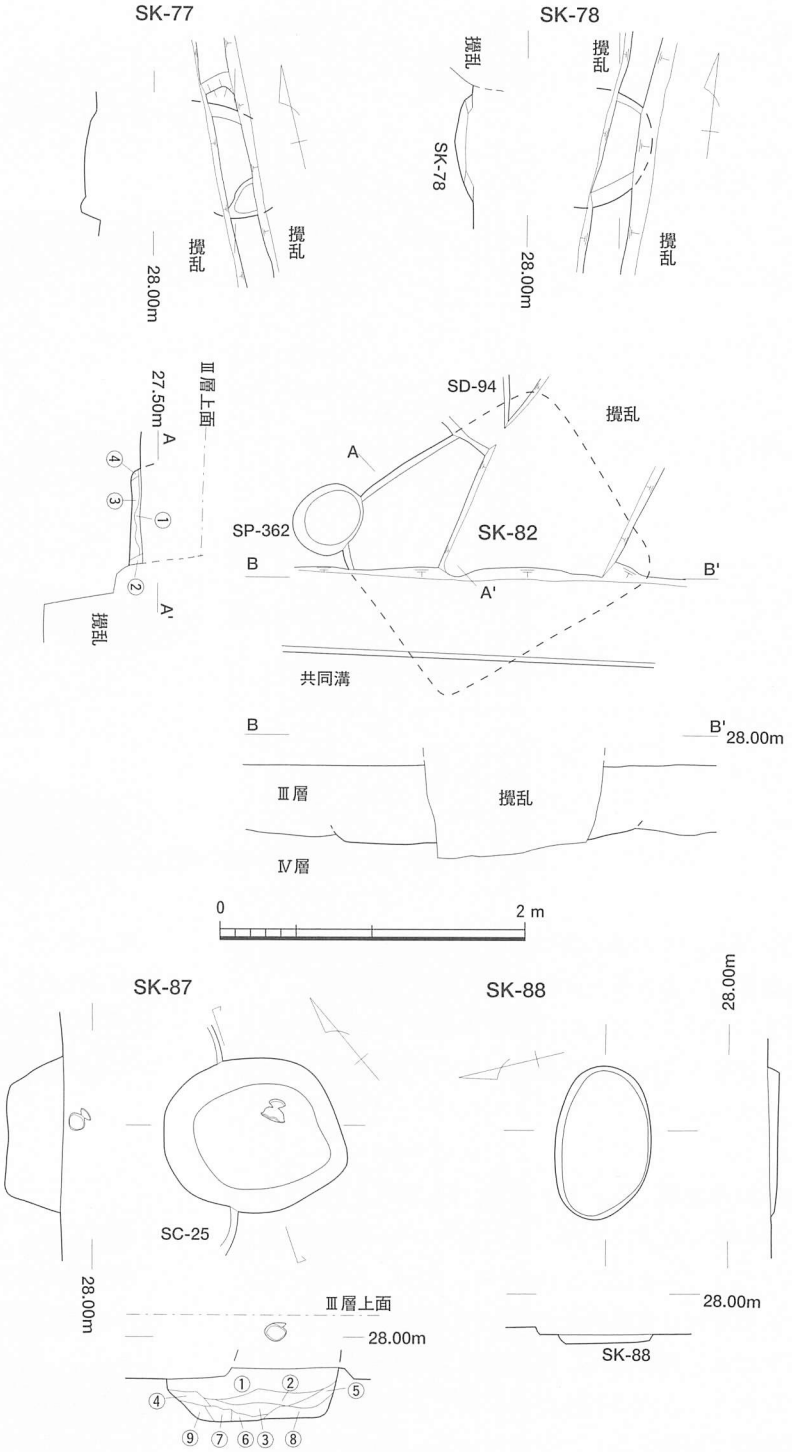

Fig. 122　SK-77・78・82・87・88遺構実測図（縮尺1/50）

SK-86号土壙（Fig. 104・123）

調査区北東隅のCY-14・15の境界部分に位置する小形土壙である（Fig. 104）。SP-316を切る。調査中にはSP-445としていたが、調査後に遺構番号をSK-86に振り替えた。

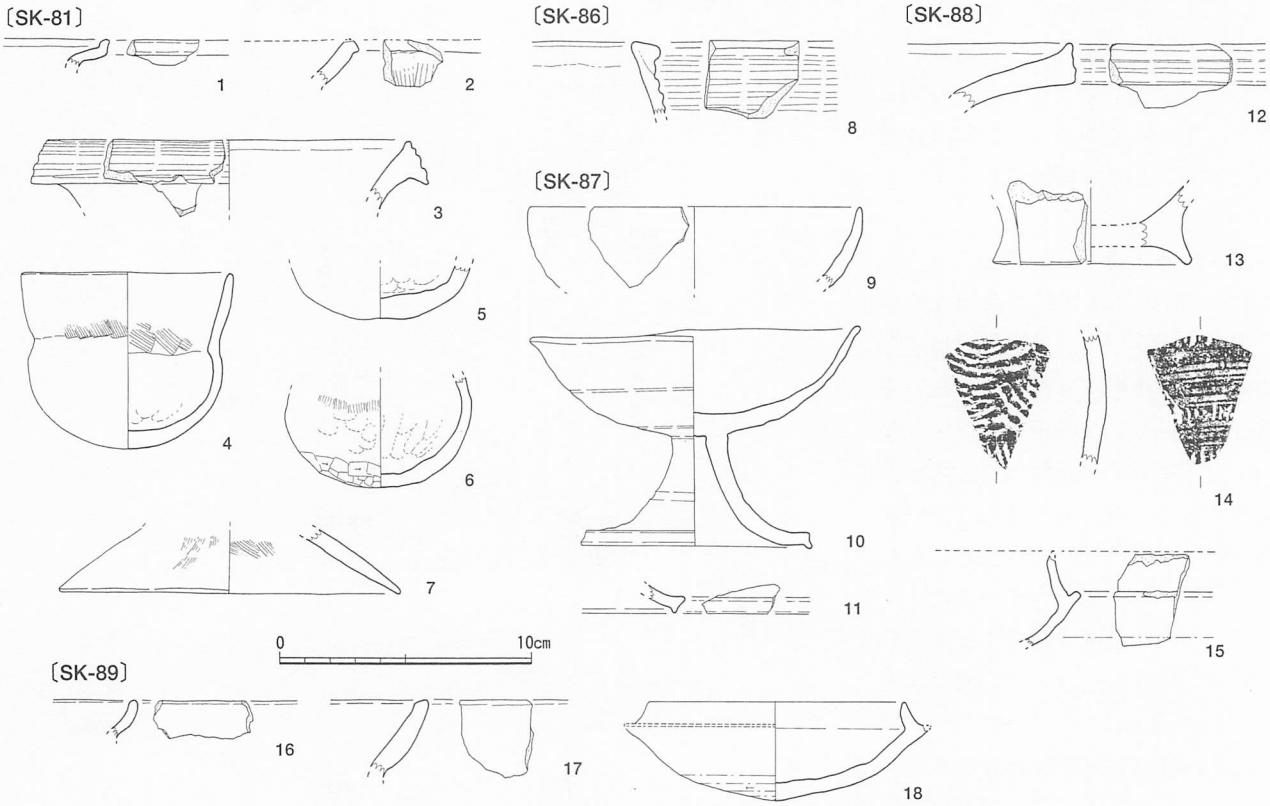

Fig. 123　SK-81・86・87・88・89出土遺物実測図（縮尺1/3）

長さ73cm、最大幅55cmの胴が張った隅丸長方形の平面形をもち、深さ6～7cmの浅い皿状を呈する。

埋土は、径2～3mmの角礫が少量混じる暗褐色砂質土で、径1～2cmの楕円形のにぶい黄褐色シルト塊が少量含まれる。

埋土中から、弥生時代中期後葉～後期初頭の脚台付鉢の口縁部片（Fig. 123-8）、弥生土器の胴部細片～小片10点ほどが出土した。しかし、埋土に砂礫が目立つことから、古墳時代後期の土壙と考える。

SK-87号土壙（Fig. 122・123、Pl. 21）

DA-13区に位置し、SC-25に切られる不整楕円形の土壙である（Fig. 122）。調査中にはSK-494としていたが、調査後に遺構番号をSK-87に振り替えた。

長径92cm、短径83cm、深さ26cmを測る。埋土上半部には、径2～5mmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土の①層が厚く堆積する。下半部には②～⑨層がレンズ状に重なって堆積する。その中で②～⑧層は径2～5mmの砂礫が混じる暗褐色砂質土である。下部ほど礫が小さい。②層には砂礫がとくに多く混じり、③層は礫の量がやや少ない。④層には径3cmほどの楕円形の褐色砂質シルト塊が少量含まれる。⑦層には径1～3cmの楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊がやや多く含まれる。⑧層ににぶい黄褐色砂質土塊がとくに多い。⑨層は褐色砂質シルトで、径2mmほどの礫を含む暗褐色砂質土が混じる。

埋土中からは、弥生土器や土師器の胴部破片数10点、須恵器胴部破片数点が出土しているが、いずれも細片～小片で、図示できる遺物はない。弥生土器が多いが、古墳時代後期の土師器・須恵器がある。他に、径2～3mmの炭化物片が点々と出土している。

上部のⅢ層部から、略完形の須恵器高坏（Fig. 123-10、Pl. 21-⑨）、須恵器の高坏の坏部口縁部（Fig. 123-9）や脚裾部（Fig. 123-11）、弥生土器もしくは土師器の胴部細片～小片が10数点出土している。完形の高坏はSK-87に伴う遺物である可能性が高い。

埋土出土の遺物には遺構の時期を決定できる遺物はない。しかし、Ⅲ層出土の高坏はSK-87に伴うと考えられ、古墳時代後期の土壙と判断できる。

SK-88号土壙（Fig. 122）

DB-14区に位置する長円形の浅い小型土壙である（Fig. 122）。SA-20を構成するSP-556を切る。調査中、SK-552としていたが、調査後に遺構番号をSK-88に振り替えた。

長径101cm、短径62cm、深さ７cmを測る。埋土は径１～２mmの礫が混じる褐色砂質土で、径２cmほどの焼土塊が含まれる。

埋土から出土した遺物には、弥生土器の壺の口縁部（Fig.123-12）や甕の底部（Fig. 123-13）、胴部の細片数点、須恵器の胴部破片（Fig. 123-14）がある。他に、径１cmの角張った炭化物片が出土。また、上部のⅢ層部分から坏身（Fig. 123-15）が出土している。

埋土に砂礫が混じること、上部Ⅲ層の遺物もあわせせ、SK-88は古墳時代後期の土壙と考えた。

SK-89号土壙（Fig.112）

DA-14区に位置する長円形の小型土壙である（Fig. 112）。SB-62の柱穴であるSP-299に切られる。調査中にはSK-558としていたが、調査後に遺構番号をSK-89に振り替えた。

推定長90cm前後、幅80cm、深さ７cmを測る。埋土は砂礫混じりの黒褐色砂質シルトで、灰や小指先大の焼土塊や炭化物が多く目立った。そのため、埋土を水洗選別したが、炭化米やサクラ属の炭化材を確認できた。第Ⅳ章の報告を参照されたい。

埋土上面から、比較的かたまって古墳時代後期のと考えられる土師器の小型甕口縁部（Fig. 123-16）、土師器もしくは弥生土器の胴部細片数点が出土した。上部Ⅲ層の遺物には、弥生時代中期後葉～末の土器片、古墳時代中期の土師器の甕口縁部（Fig. 123-17）、後期の須恵器坏身（Fig. 123-17）や胴部片が混じる。とくに、須恵器坏身は大形の破片で、SK-89に伴う遺物と考えられる。

埋土の特徴と出土遺物から、SK-89は古墳時代後期の土壙と判断した。

（８）その他の遺構－焼土・炭化物の集積

SX-61号遺構（Fig. 109）

CX-14区北半部のⅢ層上半部で出土した焼土のレンズ状ブロックである。周囲では掘り込みなどは確認できなかった。灰や炭化物はみられず、焼土だけが南北長44cm、東西幅20～45cmの範囲に広がる。断面は厚さ７cmほどの不整な凸レンズ状を呈する。

焼土塊をすべて取り上げて水洗したところ、須恵器の細片１点出土した。

SX-63号遺構（Fig. 99）

CZ-14・15区に位置する。Ⅳ層上面でSC-33を検出時に確認した。長さ80cm、幅40cmほどの不整形の範囲に広がる焼土のレンズ状ブロックである。厚さは３～４cmを測る。周囲では明確な掘り込みは確認できず、SC-33の東壁沿いに位置することから、SC-33の埋積過程で投棄された可能性が高い。出土遺物はない。

SX-64号遺構（Fig. 26）

CY-13区のSC-35北半部のⅢ層上半で出土した。平面形はU字形であり、当初は造り付けの竈の可能性を考えたが、長さ35cm、幅35cmと小さく、厚さも４cmと薄いレンズ状を呈するため、SX-64とした。周囲では掘り形などは確認できなかった。

焼土塊をすべて取り上げて水洗したところ、土器片が少量出土した。しかし、細片ばかりで、時期の決め手となる遺物はない。

SX-65号遺構（Fig. 26・124）

CY-13区のSC-35中央部のⅢ層上面で、焼土が点々と出土した。もっとも大きい焼土は、長さ15～35cm、

幅７～15cm前後で、断面は薄いレンズ状である。周辺を精査したが、これらに伴う掘り込みは確認できなかった。

SX-66号遺構（Fig. 89・95）

DA-12区のSC-30の埋土中で確認された焼土・炭化物の塊である（Fig. 95）。南北長70cm、東西幅50cm、最大厚さ10cmを測る。北から南に向かってSC-30へ流れ込んだように次第に厚くなっており、SC-30の埋没過程で投棄された焼土の塊と考えられる。焼土に混じり、椀形の鉄滓が出土した（Fig. 89-11）。

SX-67号遺構（Fig. 84）

DB-13区のSC-25上部のⅢ層中部で確認された。焼土と炭化物のブロックで、南側は攪乱溝で破壊されている。南北残存長55cm、東西幅87cm、最大厚さ７～８cmを測る。

炭化物層が上面にのり、北から南に向かって薄く流れたような状態で出土している。下部の土層はSC-25の埋土と同質であり、周囲で掘り込みも確認できなかったので、SC-25の廃絶後に投棄されたものと考える。炭化物には、シイ科の炭化材が混じり、動物骨が少量みられた。タイ科の遊離歯と同定されている。詳細は第Ⅳ章の報告を参照されたい。

SX-68号遺構（Fig. 90・124）

CZ・DA-12・13区の境界部分、SC-28南東部上面のⅢ層部分で検出した（Fig. 90）。焼土混じりの炭化物のブロックである。南北110cm、東西150cmに広がる。最大厚さは３cm前後を測る。SC-28の埋没過程で投棄された焼土・炭化物である。

SX-69号遺構（Fig. 90・124）

CZ-13区のSC-28北東部上面のⅢ層部分で検出した焼土と炭化物のブロックである（Fig. 90）。北端を攪乱溝で破壊されているが、南北85cm、東西110cmの範囲に広がる。北側には厚さ６cmの焼土層がレンズ状にみられ、その直下の南半部を中心として厚さ４cmの炭化物層が広がる。出土状況から、SC-28の埋没過程で投棄されたものと判断した。

焼土・炭化物層を取り上げて水洗したが、弥生土器の胴部破片、弥生時代中期末～後期初頭の高坏坏部片（Fig. 124-５）、古墳時代後期の須恵器短頸壺の蓋（Fig. 124-４）や坏胴部片が３～４点出土した。また、炭化米とともに、コナラ属・サクラ属の炭化材が確認された。同定については、第Ⅳ章を参照されたい。

焼土塊を取り上げて水洗したところ、須恵器の甕もしくは壺の胴部破片（Fig. 124-１）や、古墳時代後期の土師器胴部片が数点出土した。

水洗選別を行った結果、弥生土器や土師器の土器片と炭化物を選別できた。土器片は、いずれも胴部の小片ばかりで、図示できるものはない。また、炭化物には、コナラ属・マツ属・サクラ属などの炭化材とともに、オオムギの炭化種子がある。詳細は、第Ⅳ章の報告を参照されたい。

焼土・炭化物を取り上げて水洗したが、須恵器の蓋（Fig. 124-２）、甕もしくは壺の胴部（Fig. 124-３），土器もしくは土師器の胴部細片が多く出土した。須恵器の蓋は、古墳時代後期のものである。また、マダイの歯骨・椎骨、炭化米がある。

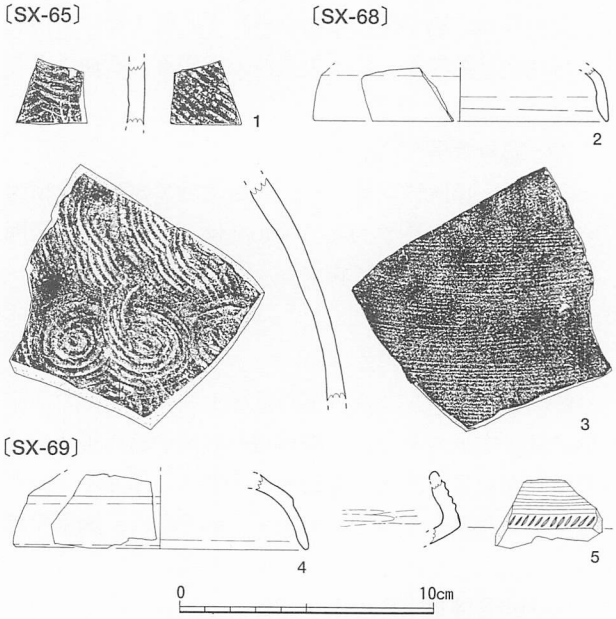

Fig. 124　SX-65・68・69出土遺物実測図（縮尺１/３）

SX-70号遺構（Fig. 68）

DD-14区のSC-21の検出面と埋土中で確認できた焼土・炭化物片の広がりをSX-70とした。中央部が攪乱部分で破壊されているが、南北1.25m、東西1.4mの範囲に広がり、断面は薄いレンズ状である。

出土状況から、SC-21の埋積過程で投棄された可能性が高い。

SX-71号遺構（Fig. 68）

DC-14・15区の境界部で出土した焼土の広がり、SC-16上面のⅢ層を掘り下げ中に確認した。63×52cm、厚さ5cmの不整形の塊である。

ほぼ同じレベルで土器片や須恵器片が出土し、これらと一緒にSC-16の埋積途中で投棄されたものである。

SX-72号遺構（Fig. 68）

DD-14区のSC-16検出時に確認した焼土の薄いレンズ状の焼土の広がりである。SC-21に切られる。南北長54cm、東西残存幅30cm、厚さ1～2cmを測る。

出土状況から、SX-71と同じく、SC-16の埋積途中で投棄されたものと考える。

SX-74号遺構（Fig. 68）

DC-14区のSC-16南側で、Ⅲ層掘り下げ中に検出した。長さ30cm、幅22cm、厚さ1～2cmの薄いレンズ状の焼土の広がりである。Ⅲ層のほぼ同じレベルからは土器片が数点出土している。これらの焼土や遺物の周囲を精査したが、掘り込みなどは検出できなかった。

（9）柱穴・小穴

SP-128（Fig. 125～127）

DG-14区に位置するSP-128は、立柱痕跡が確認され、SP-121と掘り形の規模や平面が類似しているため、当初SP-121とともに掘立柱建物の梁間を構成するものと考えた。しかし、深さがまったく異なるため、SP-121はSP-142と桁行列の柱穴と判断し、立柱痕跡が確認された柱穴として報告する（Fig. 125）。

西半部が調査区外にのびるが、径74cmの略円形の柱穴である。南壁沿いで径13～14cmの立柱痕跡を検出できた。柱痕跡にあたる①～④層と、掘り形埋土の⑤～⑩層に分層できる。

立柱痕跡の①層は暗褐色砂質土が褐色シルトと混ざり合う。②層は径2～3mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土。③層はきめの細かなにぶい黄褐色シルト。Ⅳ層の崩れ落ちたブロック。④層は砂礫がわずかに混じるにぶい黄褐色砂質土である。

掘り形埋土の⑤層は径2～3mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土。⑥層はにぶい黄褐色砂質土で、径2cmの楕円形の褐色シルト塊がごく少量混じる。⑦層は径3～5mmの砂礫が混じる暗褐色砂質土で、小さな楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。⑧層は砂礫が少量混じる暗褐色砂質土。⑨層は砂礫がごくわずかに混じる暗褐色砂質土。⑩層は褐色シルトで、南側から暗褐色砂質土のブロックが流れ込む。

立柱痕跡からは、②層に径3mmの粒状の炭化物片がごく少量含まれていた以外、出土遺物はない。掘り形埋土の⑤・⑦・⑧層からは、弥生時代中期後葉の甕の口縁部（Fig. 126-1・2）や底部（Fig. 126-3）、甕の胴部細片、高坏の脚部細片、扁平な花崗岩の円礫の一面に敲打痕が残る敲石（Fig. 127-7）が出土した。⑤・⑧層には径5mmの角張った炭化物片が混じる。この他、緑色片岩の直線刃石庖丁の破損品（Fig. 127-1）がある。

このように、SP-128の出土遺物は弥生土器ばかりであるが、砂礫が多く混じる埋土の特徴から、古墳時代後期の遺構と考える。

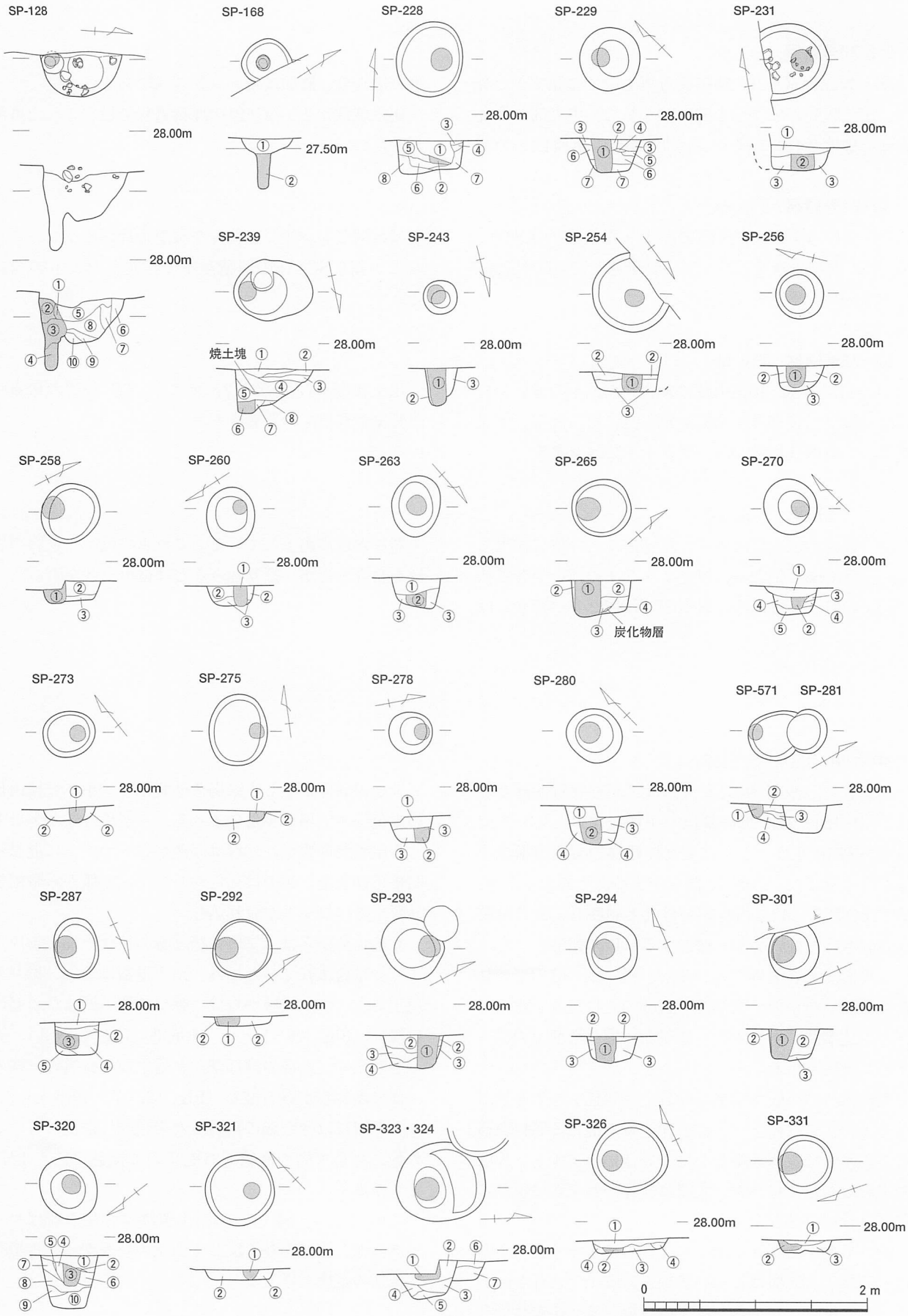

Fig. 125　立柱痕跡・杭痕跡をもつ小穴ほか遺構実測図１（縮尺１/50）

SP-141（付図、Fig. 126）

DG-15区に位置する長円形の小穴である（付図）。長径50cm、短径45cmを測る。埋土は砂礫混じりの暗褐色砂質土で、幅１～２cmの褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる。

埋土中からは、弥生時代中期後葉の壺の肩部や甕の口縁部や胴部の小片、古墳時代後期の須恵器坏身（Fig. 126-４）、瑳の口縁部破片（Fig. 126-５）、土師器の甑（Fig. 126-６）、甕の口縁部破片（Fig. 126-７）、胴部破片、径2.5cm、厚さ0.5～1.2cmの砂岩の扁平な小円礫、長さ12cm、幅・厚さ９cmの砂岩円礫が出土している。とくに、４の坏は３片に割れて出土し、全周の1/4ほどの比較的大きめの破片に復元できた。この他、径３～５cmの角張った炭化物片が少量出土している。

SP-168（Fig. 125・126）

DF-14区に位置する（Fig. 125）。中央南よりで、打ち込まれたような状態で径11～12cmの立柱痕跡を検出した。径が大きいが杭に近い。その痕跡にあたる①層は砂礫混じりの暗褐色砂質土で、径１cmほどの褐色シルト塊がごく少量混じる。上部を覆う②層は径１～２mmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

埋土中から、弥生時代後期と考えられる甕胴部上半部の部片１点が出土。上層のⅢ層部分からも弥生時代中期後葉～後期初頭の壺や甕の大型破片が比較的まとまって出土している（Fig. 126-12～15）。

SP-223（Fig. 108）

DB-13区に位置する。大半が調査区外にのびるが、調査区壁面の土層観察で、Ⅲ層上面から掘り込まれていること、SB-47の柱穴であるSP-224を切ること、径16cmの立柱痕跡を観察できた（Fig. 108）。

立柱は先端を残して折り取られている。立柱の折り取り後に小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトの①・②層が流れ込む。②層には小指先大の黄褐色シルト塊が点々と含まれる。立柱痕跡の③層も黒褐色砂質シルトで、小指～親指先大の軟らかい黄褐色シルト塊が点々と混じる。④～⑥層は掘り形埋土。④層は砂礫混じりの黒褐色砂質シルトで、小礫は①・②層ほど多くない。⑤層は黒褐色シルトで、拉げた小指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。⑥層は黄褐色シルト塊がより多くみられる。

SP-228（Fig. 125）

DB-13区に位置する。長径66cm、短径60cm、深さ30cmの不整な長円形の掘り形をもち、掘り形中位で径18cmの抜き取られた立柱痕跡を確認できた（Fig. 125）。

立柱の抜き取り後に流入した①層は、小礫が多く混じる黒褐色シルトである。立柱痕跡の②層は黒褐色シルト。③～⑧層は掘り形埋土。上部の③～⑤層は黒褐色シルトににぶい黄褐色砂質シルトが混じり、④層には小礫が多い。下部の⑥・⑦層は黒褐色シルトで、小指～親指先大のにぶい黄褐色シルト塊が混じる。⑦層はにぶい黄褐色シルト塊が特に多い。⑧層は黒褐色シルトである。

埋土から、内外面を丁寧にナデ仕上げた弥生土器の胴部小片１点、弥生時代後期と考えられる甕胴部細片２点、弥生土器もしくは土師器の胴部細片が10数点が出土。

SP-229（Fig. 125・126）

DB-14区に位置する。径54～56cm、深さ30cmの略円形の掘り形をもち、掘り形中位で径16～17cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 125）。

立柱痕跡の①層は黒褐色シルトで、下部の10～15cmには小指先大のにぶい黄褐色シルト塊や焼土小塊が落ち込んだように混じる。掘り形埋土上部の②～⑤層は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトが混じる。②・⑤層ではにぶい黄褐色シルトは小指先大の塊となり、③層には小礫が多く混じる。中位～下部の⑥・⑦層は、黒褐色シルトの中に、薄く拉げたにぶい黄褐色シルトが点々とみられる。⑥層には比較的多くの小礫が混じる。

弥生土器の鉢口縁部片（Fig. 126-10）、高坏の脚部柱部片１点、甕口縁部片１点、胴部細片２点が出土した。

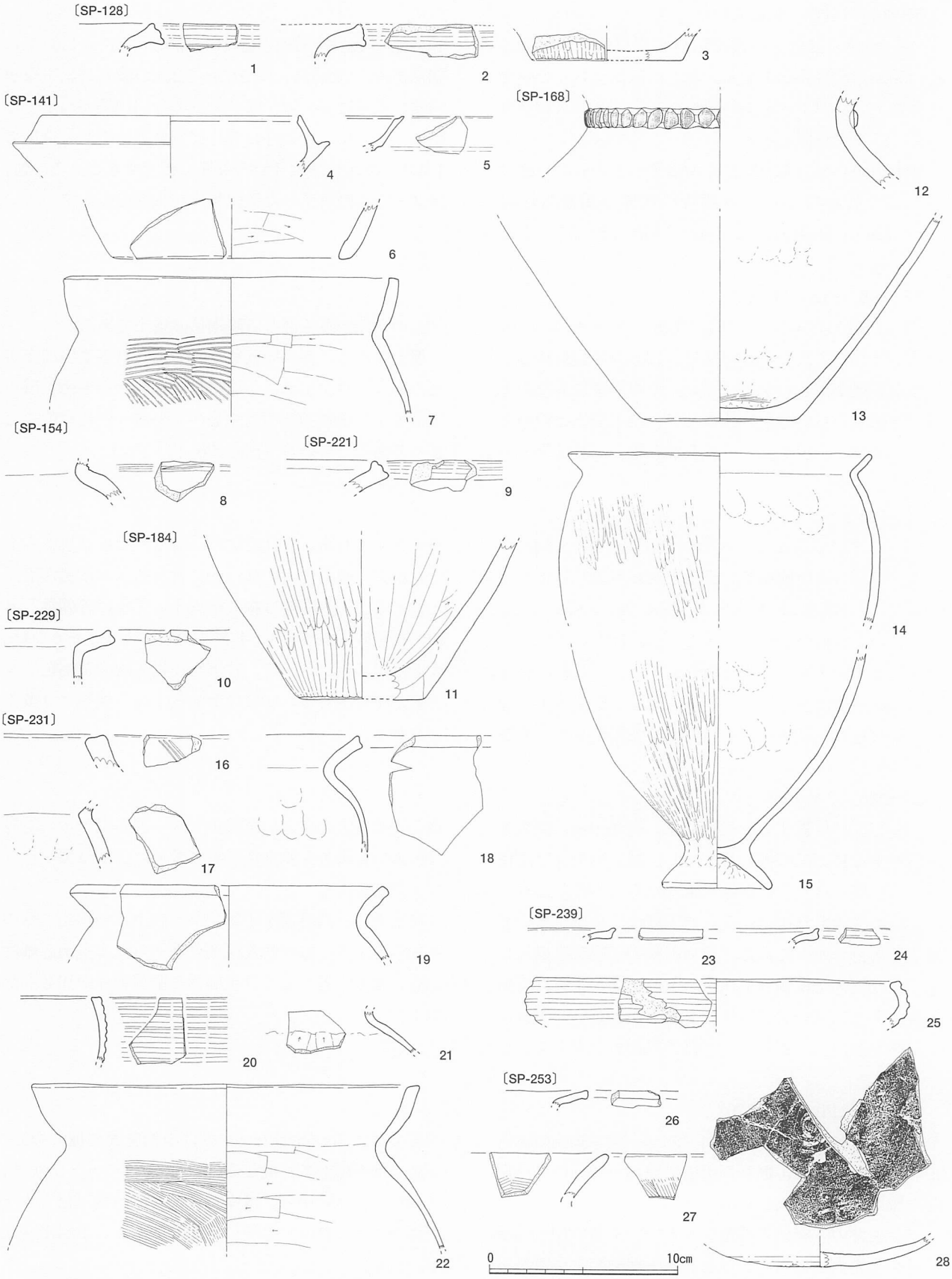

Fig. 126　SP−128・141・154・168・184・221・229・231・239・253出土遺物実測図（縮尺 1 / 3 ）

SP-231（Fig. 125・126）

DB-14区に位置し、SP-230を切る。径57cm、深さ22cmの略円形の掘り形をもつ（Fig. 125）。掘り形中位で径20cm前後の立柱痕跡を確認できた。立柱は先端を残して折り取られ、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトの①層が流れ込む。立柱痕跡の②層は黒褐色シルト。掘り形埋土の③層は黒褐色シルトで、径２～３cm大の黄褐色シルト塊が点々とみられる。

上部流入土の①層から、弥生時代後期の複合口縁壺の口縁端部の細片（Fig. 126-16）と、甕胴部片が出土。掘り形埋土の③層からは、比較的多くの遺物が出土している。しかし、いずれも細片ばかりである。古墳時代後期の土師器の甕口縁部片（Fig. 126-22）や、弥生時代中期末～後期初頭の高坏（Fig. 126-20）、後期初頭～前葉の甕口縁部片（Fig. 126-18・19）、後期の甕肩部破片（Fig. 126-17）、壺胴部破片、古墳時代前期の外面に刷毛目調整を施し煤が付着した甕肩部片（Fig. 126-21）、外面をミガキ、内面をケズリ調整した甕胴部小片ほか２点、胴部片３点、壺胴部片１点、その他細片２点、径７cm、厚さ３cmほどの扁平な餅形の花崗閃緑岩の円礫がある。

SP-239（Fig. 125・126）

DB-14区に位置する。長径71cm、短径55cm、深さ40cmの不整な長円形の掘り形をもち、掘り形下部で径17cmの先端を残して折り取られた立柱痕跡を検出した（Fig. 125）。

埋土①～⑤層は立柱が折り取られた後に流れ込んだ土層である。①層は角礫が多く混じる褐色砂質シルト。②～⑤層は黒褐色シルトで、黄褐色シルトが混じる。黄褐色シルトは、②層では不整形の塊、③・⑤層では親指大の小塊となる。立柱痕跡の⑥層は黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。掘り形埋土の⑥・⑦層は黒褐色シルトで、⑦層はやや白っぽい土色である。

埋土中からは、弥生土器の胴部細片４点のほか、甕の口縁部（Fig. 126-23・24）、高坏の口縁部（Fig. 126-25）が出土している。しかし、いずれも細片ばかりである。

SP-243（Fig. 125）

DB-14区に位置する。径30cm前後、深さ34cmの略円形の掘り形をもち、径16cmの立柱痕跡を確認した（Fig. 125）。立柱痕跡の①層は径１～２mmの礫が少量まじる黒褐色砂質土で、径１cm前後の楕円形のにぶい黄褐色シルト塊がまばらにみられ、下部はやや粘性をおびる。掘り形埋土の②・③層は暗褐色砂質土で、径0.5～１cmの楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊が混じる。②層はにぶい黄褐色砂質土塊の量が多いとともに、径１～２mmの礫がやや多く混じる。

遺物は出土していない。

SP-254（Fig. 125）

DB-15区に位置し、SC-22を切る。径68cm前後、深さ17cmの円形の掘り形をもつ。掘り形の中央で径17～19cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 125）。

埋土には全体に径２～３mmの礫が多く混じる。立柱痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の上部の②層は黒褐色砂質シルト、下部の③層は黒褐色シルトに幅５cm前後の黄褐色シルトのレンズ状ブロックが縞状に混じる。

立柱痕跡①層から、内外面を刷毛目調整した弥生土器の甕の胴部細片１点、掘り形埋土②・③層からは、土師器や弥生土器の胴部細片～小片が10数点、径2.5cm、厚さ２cmの球状に近い含礫シルト岩が出土している。この他、須恵器の坏口縁部かと考えられる細片（Fig. 128-１）、胴部小片（Fig. 128-２）、土師器もしくは弥生土器の胴部細片12点、須恵器胴部細片～小片３点がある。

SP-255（Fig. 118・128）

DB-15区に位置し、SC-18、SK-26を切る。長径53cm、短径44cm、深さ22cmの不整な長円形の掘り形をもつ。掘り形中位で、先端を残して折り取られた径12cmの立柱痕跡を確認した（Fig. 118）。

立柱の折り取り後に流入した①層は、小礫がわずかに混じる黒褐色砂質シルト。立柱痕跡の②層は黒褐色

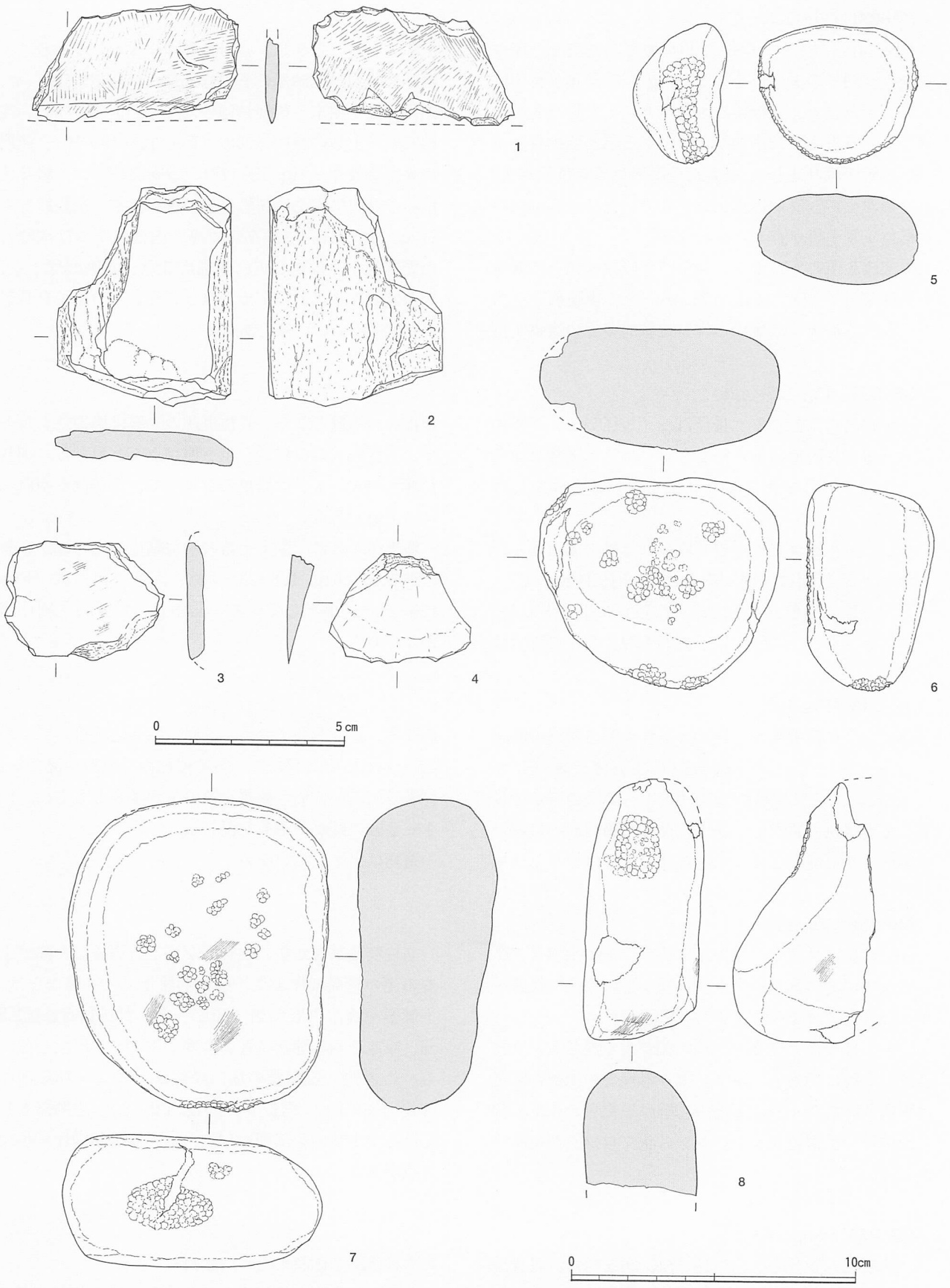

Fig. 127　SP-128・431・519・531・543・579出土遺物実測図（縮尺 2 / 3 、 1 / 2 ）

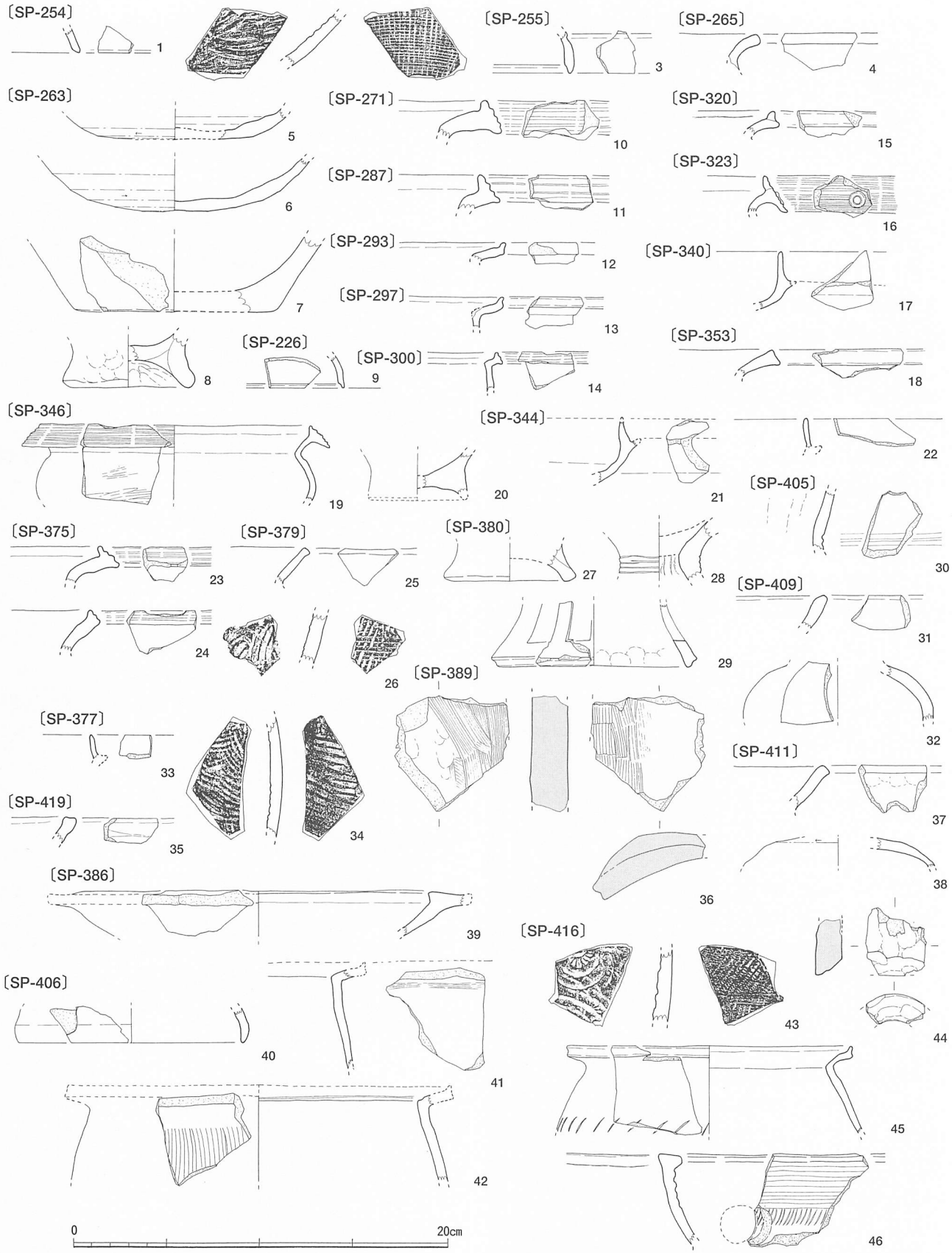

Fig.128　SP−226・254・255・263・265・271・287・293・297・300・320・323・340・344・346・353・375・377・380・386・389・405・406・409・416・419出土遺物実測図（縮尺１/３）

シルトで、点々と小指先大の黄褐色シルト塊が混じる。③～⑤層は掘り形埋土。③層は黒褐色砂質シルトに黄褐色シルトが薄い縞状にみられる。④層は黄褐色シルトの塊、⑤層は黒褐色シルトである。

上部流入土①層から、弥生土器もしくは土師器の胴部小片、掘り形埋土③～⑤層からは土師器の甕胴部小片が出土。その他、埋土中として取り上げた遺物として、弥生土器もしくは土師器の胴部小片、須恵器の坏口縁部（Fig. 128-３）がある。

SP-256（Fig. 125）

DB-13区に位置し、SC-25の床面で検出した（Fig. 125）。掘り形は円形で、径43～44cm、深さ23cmを測る。立柱痕跡は平面形が楕円形もしくは隅丸方形に近く、径は18cm前後を測る。

立柱痕跡の①層は小礫が多く混じる黒褐色シルト。掘り形埋土も小礫が多く混じる黒褐色であるが、上半部の②層には小指先大の黄褐色シルト塊、下半部の③層には拉げた親指大の黄褐色シルト塊が多く混じる。

立柱痕跡の①層から弥生土器の甕胴部小片５点、掘り形埋土②・③層から比較的大形の弥生土器の甕胴部破片が出土した。他に、須恵器胴部細片１点、弥生土器もしくは土師器の胴部小片６点がある。

SP-258（Fig. 125）

DA-13区に位置し、SC-28の床面で検出した。長径56cm、短径51cm、深さ20cmの長円形の掘り形をもち、径20cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 125）。

立柱痕跡の①層は小礫が少量混じる黒褐色シルトで、拉げた黄褐色シルトの小塊が点々と含まれる。掘り形埋土上半の②層は小礫混じりの黒褐色砂質シルト。下半の③層は黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が多く含まれる。

遺物は、弥生土器の胴部細片が10数点出土しただけである。

SP-260（Fig. 125）

DA-12・13区の境界部に位置し、SC-28の床面で検出した。長径52cm、短径43cm、深さ18cmの長円形の掘り形をもち、径13～14cmの立柱痕跡を確認した（Fig. 125）。立柱痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルト、③層は拉げた不整形の黄褐色シルトの小塊が混じる黒褐色シルトである。掘り形埋土②・③層から古墳時代後期と考えられる土師器の胴部小片が４点出土した。

SP-261（Fig. 90）

CZ-13区のSC-28床面で検出した。長径68cm、短径53cm、深さ26cmの不整な長円形の掘り形をもち、径23cmの立柱痕跡を確認した（Fig. 90）。

立柱痕跡の①層は小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルトで、小礫が少量混じる。

立柱痕跡①層から弥生土器の胴部細片２点、掘り形埋土②層から弥生土器の胴部と須恵器坏身の細片が出土している。他に弥生土器甕胴部破片10点ほどがある。

SP-263（Fig. 125・128）

DA-13区のSC-28床面で検出した。SK-262を切る。長径55cm、短径45cm、深さ27cmの不整な長円形の掘り形をもつ（Fig. 125）。径18～19cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は先端を残して折り取られている。

①層は立柱の折り取り後に流入した土層。小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色シルト塊が多く含まれる。立柱痕跡の②層は黒褐色シルト。掘り形埋土の③層は黒褐色シルトで、径３～４cmの丸い黄褐色砂質シルト塊が多く含まれる。

上部流入土①層から古墳時代後期の須恵器坏（Fig. 128-５）や弥生土器ないしは土師器の細片数点、立柱痕跡②層から弥生土器の胴部４点、掘り形埋土の③層から須恵器の底部（Fig. 128-６）と弥生時代中期の甕底部（Fig. 128-８）が出土した。他に、弥生中期の大型壺の底部（Fig. 128-７）と胴部細片５点ほどがある。

SP-265（Fig. 125・128）

CZ・DA-12・13区の境界部に位置し、SC-28の柱穴であるSP-264を切る。径50～53cm、深さ33cmの略円形の掘り形の中で径22cmの立柱痕跡を確認した（Fig. 125）。

立柱痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の②～④層も黒褐色シルトで、②・③層には拉げた小指先大の黄褐色シルト塊が少量、②・④層と比べて③層には黄褐色シルト塊が多く混じる。③・④層の間にはレンズ状の炭化物層が挟まる。

掘り形底面近くから、土師器の小型壺の口縁部（Fig. 128-４）と、弥生土器の細片１点が出土している。

SP-270（Fig. 125）

DB-13区に位置し、SC-25を切る。径47～50cm、深さ24cmの略円形の掘り形をもち、掘り形中位で径16cmの立柱痕跡を検出できた（Fig. 125）。立柱は先端を残して折り取られているものと考えられる。

立柱の折り取り後に流入した①層は、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトである。立柱痕跡にあたる②層は黒褐色砂質シルト。③～⑤層は掘り形埋土。③層は黒褐色シルトで、径２～３cmの黄褐色砂質シルト塊が全体の半分近く混じる。④・⑤層は黒褐色砂質シルトで、⑤層はややしまった土質である。

SP-275（Fig. 125）

DA・DB-13区で、SC-25床面で検出した。長径64cm、短径53cm、深さ12cmの楕円形の掘り形をもつ（Fig. 125）。東壁沿いで径13cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の②層は小礫が多くみられる黒褐色砂質シルトで、黄褐色シルトと混じり合う。

掘り形埋土②層から、弥生土器の甕の口縁部細片１点と胴部小片６点が出土している。

SP-280（Fig. 125）

DA-13区に位置し、SC-25に切られる。長径51cm、短径46cm、深さ35cmの長円形の掘り形をもつ（Fig. 125）。径19cmの立柱痕跡を掘り形中位で確認した。先端を残して折り取られ、立柱は東へ傾く。

立柱の折り取り後に流入した①層は、砂礫混じりの黒褐色砂質シルトである。立柱痕跡の②層は黒褐色シルト。③～⑤層は掘り形埋土。③層は黄褐色砂質シルトに親指先大の黒褐色シルト塊が点々と混じり、④層は黒褐色砂質シルトである。

遺物は出土していない。

SP-287（Fig. 125・128）

DB-12・13区に位置する。長径53cm、短径40cm、深さ30cmの長円形の掘り形をもち、径19cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 125）。立柱は先端を残して折り取られている。折り取られた後に流れ込んだ①・②層は、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトである。下部の②層には黄褐色シルトの小塊が少量含まれる。立柱痕跡の③層は黒褐色シルトで、軟らかで拉げた親指先大の黄褐色シルト塊が少量含まれる。掘り形埋土の④層は、黒褐色シルトと黄褐色シルトがほぼ水平に縞状に重なる。⑤層は黄褐色シルトの塊。

上部流入土①・②層から、弥生時代中期の壺口縁部（Fig. 128-11）、胴部小片２点が出土した。他に、外面を刷毛目調整、内面をケズリ調整した甕胴部片２点、内外面とも刷毛目調整した甕胴部片３点、胴部の細片～小片10数点がある。いずれも弥生時代中期後葉～後期前葉に比定できる。

SP-292（Fig. 125）

CZ・DA-13区に位置し、SC-28を切る。径52cm、深さ９cmの略円形の掘り形の中で径21の立柱痕跡を確認できた（Fig.125）。立柱痕跡の①層は小礫混じりの黒褐色砂質シルトである。掘り形埋土の②層も小礫混じりの黒褐色砂質シルトであるが、小礫は少ない。

掘り形埋土②層から、弥生土器の甕や壺の胴部小片５点、弥生土器の小片２点が出土している。

SP-296（Fig. 24）

DA-13区に位置し、SC-27を切る（Fig. 24）。長さ35cm、幅31cm、深さ11cmの不整な隅丸方形の掘り形をもつ。北半部で径18cmの立柱痕跡を検出した。

立柱痕跡の①層は黒褐色シルトで、焼土塊を含む。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルトで、拉げた親指先大のひしゃげた黄褐色シルト塊が帯状にみられる。

立柱痕跡①層から弥生土器の細片、掘り形埋土②層から弥生土器の胴部小片４点が出土。他に、弥生土器の胴部細片２点、径１cmの角張った炭化物片がある。遺物は弥生土器だけで、埋土も砂礫があまり目立たないが、SC-27との切り合い関係から、古墳時代の柱穴と考える。

SP-297（Fig. 112・128）

DA-14区に位置する。SC-27を切り、SB-62の柱穴であるSP-298に切られる（Fig. 112）。径65～70cm、深さ12cmの長円形の掘り形をもち、南壁沿いで径18cmの立柱痕跡を検出した。

①層は立柱痕跡、②・③層は掘り形埋土。①層は小礫が多く混じる黒褐色シルト。②層は礫がとくに多く混じる黒褐色シルトで、径３cmほどの拉げた黄褐色シルト塊が点々とみられる。③層は黒褐色シルトで、径３～５cmの黄褐色シルト塊が混じる。

埋土中からは、弥生時代中期末の甕の口縁部細片（Fig. 128-13）、外面ミガキで内面刷毛目調整の壺胴部小片、外面を刷毛目調整し煤が付着する甕胴部小片、胴部小片20点と、須恵器の胴部破片が出土した。他に、長さ2.5cm、幅・厚さ２cmほどの砂岩円礫がある。

SP-300（Fig. 112・128）

DA-14区に位置する。長径43cm、短径36cm、深さ14cmの長円形の掘り形をもち、やや西よりで立柱痕跡を確認した（Fig. 112）。先端が尖っていないので立柱痕跡としたが、径は14cmと細めの立柱である。

①層は先端を残して立柱を折り取った後に流入した黒褐色砂質シルト。立柱痕跡の先端部分の①層は、砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。②層は掘り形埋土で、黒褐色シルトと径３cmの黄褐色シルト塊が全体に縞状に重なる。

埋土中からは、弥生時代中期後葉～後期前葉の小型甕の口縁部細片（Fig. 128-14）や、甕胴部細片数点、底部近くの破片１点が出土している。

SP-316（Fig. 104）

CY-14区のSB-42とSA-59の間で出土した。SK-86に切られる（Fig. 104）。径21cm前後、深さ11cmの円形の掘り形の中に、径８cmの先端が尖った杭痕跡を確認できた。しかし、SP-316とともに柵列などを構成する遺構はみあたらず、SP-316だけを報告する。

杭痕跡の①層は暗褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが少量みられる。掘り形埋土の②層は褐色シルトで、暗褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックが少量みられる。ともに、径２～４mmの角礫がごく少量混じる。

土器の細片が出土しているが、器形・時期などは不明である。

SP-320（Fig. 125）

DA-13区の境界部に位置し、SC-28の床面で検出した。SK-262を切る。長径58cm、短径52cm、深さ46cmの長円形の掘り形をもつ（Fig. 125）。径17～18cmの立柱痕跡を確認した。立柱は掘り形中位で確認され、先端を残して折り取られたものと考える。

立柱の折り取り後に流入した①層は、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、薄い焼土層がみられる。②層は黄褐色シルトのレンズ状ブロック。立柱痕跡の③層は小礫が少量混じる黒褐色シルト。北側の④・⑤層は、立柱を抜く際に流れ込んだ黒褐色シルトで、⑤層には黄褐色シルトが縞状にみられる。⑥～⑩層は掘り形埋土。⑥層は小礫が少量混じる黒褐色。⑦層は黒褐色シルトで親指先大の黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。⑧～⑩層は黒褐色シルトで、⑧層には拳大の黄褐色シルト塊、⑩層には拉げた黄褐色シルトの小塊が多く混じる。

立柱痕跡③層から弥生時代中期後葉～末の甕口縁部片、掘り形埋土から弥生土器細片４点が出土した。

SP-321（Fig. 125）

DA-13区に位置する。径63～65cm、深さ9cmの円形の掘り形内で、径15cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 125）。立柱痕跡の①層は、側面近くを切っているため先端が丸くみえる。小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルトで、拉げたにぶい黄褐色シルトの小塊が多く混じる。

遺物は弥生時代の甕と壺の胴部小片2点が出土しただけである。

SP-323（Fig. 125・128）

CZ・DA-13区に位置し、SC-28を切り、SP-324に切られる。SP-324とともに掘り下げたために、形状や規模は不明である（Fig. 125）。

埋土上部の⑥層は小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト、下部の⑦層には親指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる黒褐色シルトが堆積する。

弥生時代中期後葉～後期初頭の鉢の口縁部片（Fig. 128-16）と胴部細片3点が出土している。

SP-324（Fig. 125）

CZ・DA-13区に位置し、SC-28、SP-323を切る（Fig. 125）。径55～60cm、深さ35cmの掘り形の中で、径21cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は黒褐色シルト。②～⑤層は掘り形埋土で黒褐色シルト。②層には拉げた親指先大の黄褐色シルト塊が多く混じり、③層は黄褐色シルト塊の量が少ない。⑤層は、黒褐色シルトと黄褐色シルトがそれぞれ厚さ1～2cmの縞状に混じる。遺物は出土していない。

SP-326（Fig. 125）

DA-13に位置し、SC-28を切る。径62～69cm、深さ13cmの略円形の掘り形内で、径18cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 125）。立柱痕跡は掘り形中位で確認でき、立柱の先端部分を残して折り取られたものと考えられる。

立柱の折り取り後に流れ込んだ①層は小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。立柱痕跡の②層は小礫がやや少なめの黒褐色シルト。掘り形埋土の③・④層は黒褐色シルトである。②層には小礫が大量に混じる。

遺物は出土していない。

SP-331（Fig. 125）

CZ-14区に位置する。径48～50cm、深さ12cmの不整円形の掘り形をもち、北壁沿いで径18cmの立柱痕跡を検出できた（Fig. 125）。土層断面の観察で、立柱は先端を残して抜き取られていることを確認できた。

立柱が抜き取り後に流入した①層は、砂礫が多く混じる黒褐色砂質土で、小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。立柱痕跡の②層は黒褐色シルトで、拉げた小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。掘り形埋土の③層は黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が非常に多く混じる。

遺物は出土していない。

SP-333（Fig. 129）

CZ-14区に位置する。径45cm、深さ21cmの掘り形をもち、埋土中部で立柱の抜き跡を確認できた（Fig. 129）。①層は立柱抜き跡後の流入土で、砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が多く含まれる。立柱痕跡の②層は黒褐色シルト。径は13～15cmと考えられるが、確実ではない。③層は掘り形埋土で、黒褐色シルトの中に親指先大の黄褐色シルト塊が部分的に帯状になって混じる。

埋土中からは、弥生土器もしくは古墳時代後期の土師器の胴部小片2点、二次的火熱をうけて赤変した土師器の小指先大の胴部細片4点、長さ16cm、幅15cm、厚さ5.5cmの砂岩の扁平な円礫が出土している。

SP-336（Fig. 40）

CZ-14区に位置し、SK-80を切る。長径58cm、短径51cm、深さ16cmの不整な長円形である（Fig. 40）。

埋土最上部の①層は径1㎜の小礫が混じる暗褐色砂質土。中部の②層は径1㎜の砂礫が少量混じる暗褐色砂質土。③層は砂礫混じりの褐色砂質シルトで、粒状の黄橙色シルトが少量混じる。SK-80の壁が崩れた部分。埋土最下部の④層はきめが細かい暗褐色シルト。径1～3㎝の拉げた楕円形の黄橙色シルト塊が所々にみられる。遺物は弥生土器の胴部細片2点が出土しただけである。

SP-339（Fig. 129）

CZ-14区に位置し、径21～24㎝、深さ9㎝を測る不整な円形の掘り形の中で、杭痕跡が確認できた（Fig. 129）。ただし、径が17㎝ほどと太い。杭痕跡の①層は礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は黒褐シルトで、親指大の黄褐色砂質シルト塊が混じる。

埋土中から、弥生土器の胴部細片1点が出土している。

SP-340（Fig. 104・128）

CZ-14区に位置する。東半部を攪乱壙で切られる（Fig.104）。径34㎝、深さ22㎝の小穴で、径12㎝の杭痕跡を確認できた。また、SB-43の桁行にあたるSP-335・474を結ぶ線上に位置する。しかし、北側の桁行列には、同様な小穴はないので、SB-43には伴わないと考えた。

杭痕跡にあたる②層は、径1～2㎜が砂礫が少量混じる暗褐色砂質土で、褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。埋土中位で確認され、全体に南に傾いているので、杭の先端を残して折り取られたものと考えられる。その上部には、杭の折り取り後に流入した①層がみられる、①層は径1～3㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径1㎝ほどの楕円形の褐色シルト塊が含まれる。掘り形埋土の③層は砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土と暗褐色砂質土である。

立柱痕跡の①層から、弥生土器の胴部細片2点、径5㎜の角張った炭化物片がごく少量出土。その他、掘り形埋土③層や上部流入土①層から、須恵器の坏身口縁部（Fig. 128-17）、弥生土器もしくは土師器の胴部細片7点が出土している。

SP-341（Fig. 129）

CZ-14区に位置する。径21㎝、深さ21㎝を測る略円形の掘り形の中に、先端が尖った径13㎝の杭痕跡を検出した。

杭痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の②層も黒褐色シルトであるが、小指先大の拉げた黄褐色シルト塊が点々と混じる。

埋土からは、外面にナデ調整、内面にケズリ調整を施す土師器の胴部破片が出土している。いずれも古墳時代前期～中期の遺物である。

SP-344（Fig. 26・128）

CZ-13区に位置する。径50㎝ほどの略円形の掘り形内で、径12㎝の立柱痕跡を確認した（Fig. 26）。しかし、調査中に雨水が流れ込み壁面が崩れてしまい、土層断面図を作図できなかった。埋土は暗褐色シルトである。

須恵器の坏身の細片2点（Fig. 128-21・22）、弥生土器甕胴部破片1点と須恵器1点が出土している。

SP-359（Fig. 14）

DG-17・18区の東北隅に位置する（Fig. 14）。鍋底状の小穴で、平面形は略円形で、径60㎝、深さ6㎝の鍋底状を呈し、中央はさらに10㎝ほど細長い窪みがみられる。SP-360に切られ、SP-361を切る。

埋土上部の①・②層は暗褐色砂質土で、径1～3㎝の輪郭がぼやけた楕円形のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる。中～下部には、にぶい黄褐色砂質土と褐色砂質シルトが混じり合う③層、幅2㎝ほどの細長いにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量混じる褐色砂質シルトの④層、やや粘性をおびた暗褐色砂質土の⑤層が、大きな塊となってみられる。

埋土中からは土器細片が出土しているが、器形・時

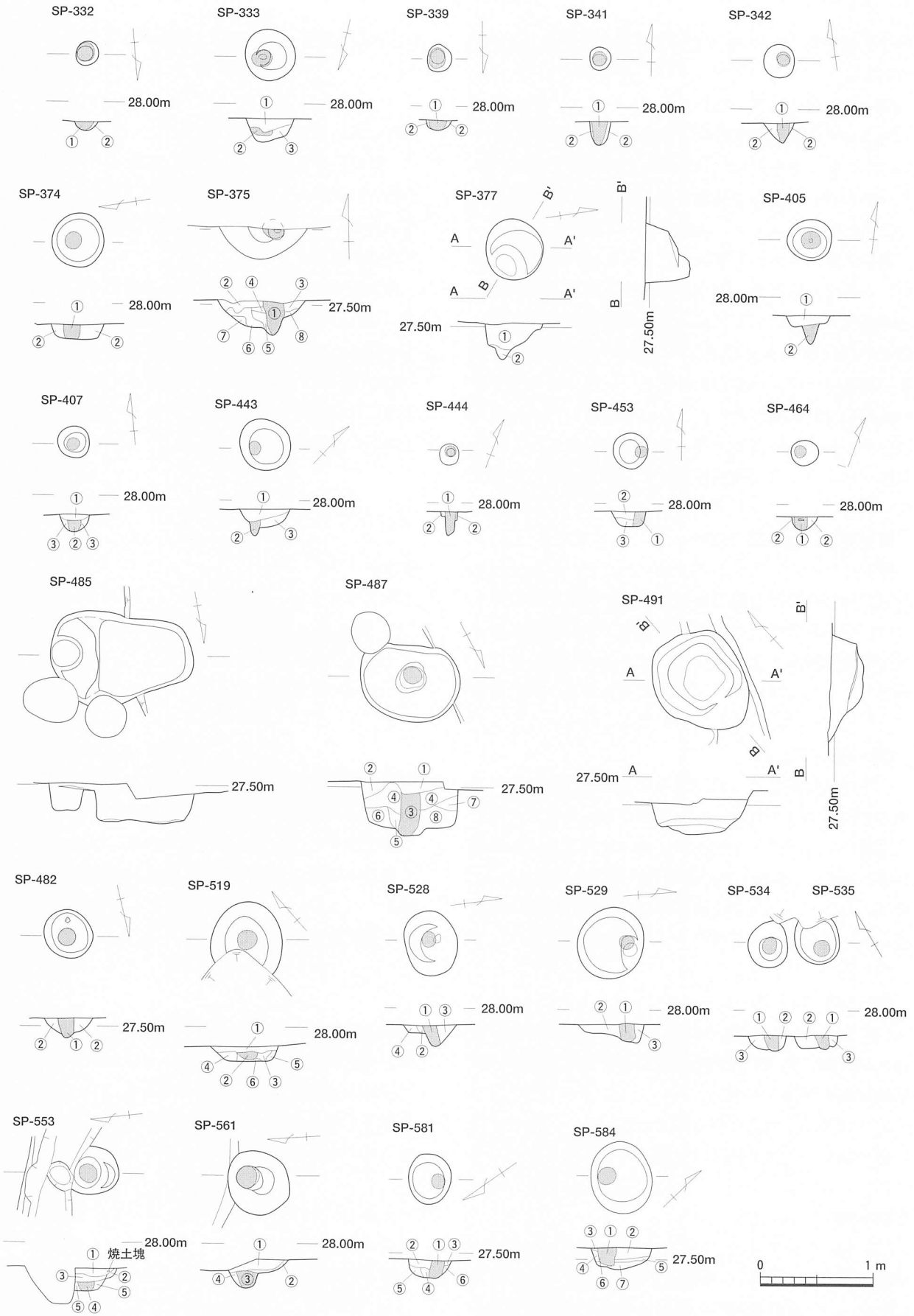

Fig. 129　立柱痕跡・杭痕跡をもつ小穴ほか遺構実測図２（縮尺１/50）

期は不明である。また、①・③層には径0.1～0.3cmの粒状の炭化物片が少量含まれていた。

SP-375（Fig. 128・129）

DE-14区の調査区北壁際に位置する。径75～80cmの略円形の掘り形をもち、径18cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 129）。掘り形は深めの丸底鍋状で、先端が尖った立柱を打ち込んで、周囲を埋土で固めている。

立柱痕跡にあたる①層は、径２～４㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土。掘り形埋土の②層は、径２～３㎜の角礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土で、径５㎜ほどの楕円形の褐色砂質シルト塊がやや多く含まれる。③層は、にぶい黄褐色砂質土で、径３cmの楕円形の暗褐色砂質土塊が多く混じる。④層は、径１㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土。⑤層は、径１～３㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、径１cmほどの楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊がごく少量含まれる。⑥層は、暗褐色砂質土で、径１cmの輪郭がぼやけた楕円形の褐色砂質シルト塊が少量混じる。⑦層はにぶい黄褐色シルトの塊。⑧層は、にぶい黄褐色シルトと黄褐色シルトが混ざり合う。

埋土中から、甕と考えられる口縁部片（Fig. 128-23・25）、壺口縁部（Fig. 128-23）、弥生土器の細片～小片20～30点、敲打痕が側縁に残る長さ5.5cm、幅4.5cm、厚さ２～2.2cmの餅形の砂岩円礫が出土した。また、立柱痕跡の①層には、径５㎜の角張った炭化物片がごく少量含まれていた。

SP-377（Fig. 128・129）

DE-14区に位置する略円形の小穴である（Fig. 129）。径55～57cm、深さ19cmを測る。南東部分の窪みには、暗褐色砂質土の①層が詰まり、立柱痕跡であった可能性も残す。その上部を、部分的に粘性をおびる径２～３㎜の砂礫が多く混じる黒褐色砂質土の②層が覆う。

埋土中からは、須恵器坏の口縁部細片（Fig. 128-33）、胴部片２点、弥生土器もしくは土師器の胴部細片～小片20数点が出土した。また、①層中からは、径２～３㎜の粒状の炭化物片がごく少量出土している。

SP-379（Fig. 26）

CZ-13区に位置するSC-35・38を切る円形の小穴である（Fig. 26）。径51～53cm、深さ12cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、上層部の①層には径２～３㎜の礫が多く混じり、小指先大の黄褐色シルト塊が含まれる。中層に帯状にみられる②層には径１cmの楕円形の黄褐色シルト塊が多く混じる。とくに、西壁際に多い。下層部分の③層は黄褐色シルト塊が②層よりも少なめである。④・⑤層は黄褐色シルトの塊である。

埋土中からは、弥生時代後期の甕口縁部破片、弥生土器の胴部細片～小片５点、古墳時代後期の須恵器胴部片、長さ3.8cm、幅3.2cm、厚さ１cmの含礫砂岩、粒状の炭化物片が出土している。

SP-386（Fig. 26・128）

CZ-13区のSC-34床面で確認できた。長径52cm、短径40cm、深さ20cmの長円形の掘り形をもち、径18cmの立柱痕跡を検出した（Fig. 26）。

立柱は先端を残して折り取られている。①層は立柱の折り取り後に流れ込んだ土層。小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトである。掘り形埋土の②層は黒褐色シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。立柱痕跡の③層は黒褐色シルトである。

掘り形埋土から、高坏の口縁部（Fig. 128-39）、弥生土器の胴部細片数点が出土している。

SP-389（Fig. 112）

CZ-13区に位置する。径43～44cm、深さ10cmの不整円形の掘り形をもち、径22cmの立柱痕跡を確認できた（Fig. 112）。立柱痕跡の①層は小礫混じりの黒褐色シルト、掘り形埋土の②層は小礫が少量混じる黒褐色砂質シルトである。

掘り形埋土①層から、弥生土器と考えられる土器片（Fig. 128-26）、炭化物小片が出土。他に、弥生土器の小片２点がある。

SP-398（Fig. 35）

DF-23区に位置する（Fig. 35）。径35cm、深さ11cmの略円形の小穴である。ほぼ中央で先端が尖り打ち込まれた状態の径13cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡の①層は暗褐色砂質土で、径５㎜の楕円形の暗褐色砂質土塊がごく少量混じる。②・③層は径１～２㎜の角礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

①層から土器片、径５㎜の角張った炭化物片がごく少量出土している。土器は細片で、器形や時期は不明である。

SP-402（Fig. 112）

CZ-14区に位置し、SP-403を切る（Fig. 112）。長径70cm、短径61cm、深さ７cmの長円形の掘り形をもち、南側によって径15cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の②層は黒褐色シルトで、径１～３cmの不整形の黄褐色砂質土塊が混じる。

遺物は①層から炭化物小片が出土しただけである。

SP-403（Fig. 112）

CZ-14区に位置し、SP-402に切られる。径70cm、深さ30cmの略円形の掘り形をもち、ほぼ中央で立柱痕跡を確認した（Fig. 112）。先端が尖っていないことから立柱痕跡としたが、径は12～13cmで杭に近い。また、立柱痕跡は埋土中位で確認され、先端を残して折り取られたものと考えられる。

①層は立柱を折り取った後に流れ込んだ土層で、径２～３㎜の礫が混じるにぶい黄褐色砂質土で、径１～２cmの楕円形の褐色シルト塊が少量みられる。立柱痕跡の②層も砂礫混じりの黒褐色砂質土で、幅１～３cmの褐色シルトのレンズ状ブロックをまばらにみられる。③～⑧層は掘り形埋土。③・④層は径２㎜の礫が少量混じる暗褐色砂質土で、褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが少量みられる。⑤層は暗褐色砂質土で、褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量含まれる。⑥層は褐色シルトで、幅１～２cmの暗褐色砂質土のレンズ状ブロックが多く含まれる。⑦層は暗褐色砂質シルトで、褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。⑧層は褐色シルトの塊である。

埋土中から、外面をミガキ、内面をケズリ調整した弥生時代中期～後期の壺胴部片、外面を刷毛目、内面をナデ調整した甕胴下半部片、胴部細片７点ほどが出土した。いずれも細片～小片である。また、①・②層からは、径５㎜の角張った炭化物片、⑦層からは径２～３㎜の粒状の炭化物片が少量出土している。

SP-405（Fig. 128・129）

CZ-14区に位置する。径37～38cm、深さ26cmの略円形の掘り形の中に、先端が尖る径16cmの杭痕跡を確認した（Fig. 129）。打ち込まれた杭の先端のみが残る。①層は、砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、杭が折り取られた後に流入した土層。杭痕跡の②層は黒褐色シルトである。

上部流入土①層から、弥生時代後期前葉～中葉の長頸壺の頸部細片（Fig. 128-30）、弥生土器の胴部細片２点が出土している。

SP-406（Fig. 26）

CZ-13区のSC-35の床面で検出したが、SC-35を切ると考えられる（Fig. 26）。径37～39cm、深さ15cmの略円形の掘り形をもち、径11cmの杭痕跡を確認した。杭は先端を残して折り取られている。

杭の折り取り後に流れ込んだ①層は、径１～５㎜の礫が多く混じる褐色シルトである。掘り形埋土の②層は暗褐色シルトで、径１cm前後の拉げたにぶい黄褐色シルト塊が多く含まれる。③層は暗褐色シルトの塊。杭痕跡の④層は径１～２㎜の礫が多く混じる暗褐色シルトである。

杭痕跡の④層から、弥生時代中期～後期初頭の甕の胴部（Fig. 128-41・42）を含む破片が数点、古墳時代後期の須恵器蓋（Fig. 128-40）が出土している。

SP-407（Fig. 129）

CZ-14区に位置する。径28cm、深さ15cmの略円形の掘り形の中に、径11cmの杭痕跡を確認した（Fig. 129）。先端を残して折り取られたと考えられる。

埋土上部には、砂礫が混じる黒褐色砂質シルトの①層が流れ込む。杭痕跡の②層は黒褐色シルト。掘り形埋土の③層は①とほぼ同質であるが、砂礫は混じらない。

SP-409（Fig. 99・128）

CZ-14区に位置し、SC-33、SK-39を切る（Fig. 99）。径62～69cm、深さ20cmの不整円形の掘り形をもち、その中で径16cmの立柱痕跡を検出できた。

立柱痕跡の①層は小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は小礫がかなり多く混じる黒褐色砂質シルト。③層は黒褐色シルトに多くの不整形の黄褐色シルト塊がみられる。

掘り形埋土中からは、弥生土器の胴部小片８点に混じり、土師器の甕口縁部（Fig. 128-31）、須恵器瑳の肩部（Fig. 128-32）が出土している。他に、胴部細片～小片10点ほどがある。

SP-411（Fig. 26）

CY・CZ-13区のSC-35の床面で検出したが、本来、SC-35を切ると考えられる（Fig. 26）。径34～36cm、深さ21cmの略円形の掘り形をもち、径14cmの立柱痕跡を確認した。

立柱痕跡の①層は径２㎜の礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は径１～２㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質シルト。③層は黒褐色砂質シルトで、部分的に粘性をおびる。④層は暗褐色シルトで、丸い褐色シルト小塊がごく少量含まれる。

弥生時代後期中葉～後葉の甕口縁部片、中期後葉～後期初頭の壺や甕の胴部細片が10数点、そして古墳時代後期の須恵器の蓋、粒状の炭化物片が出土している。

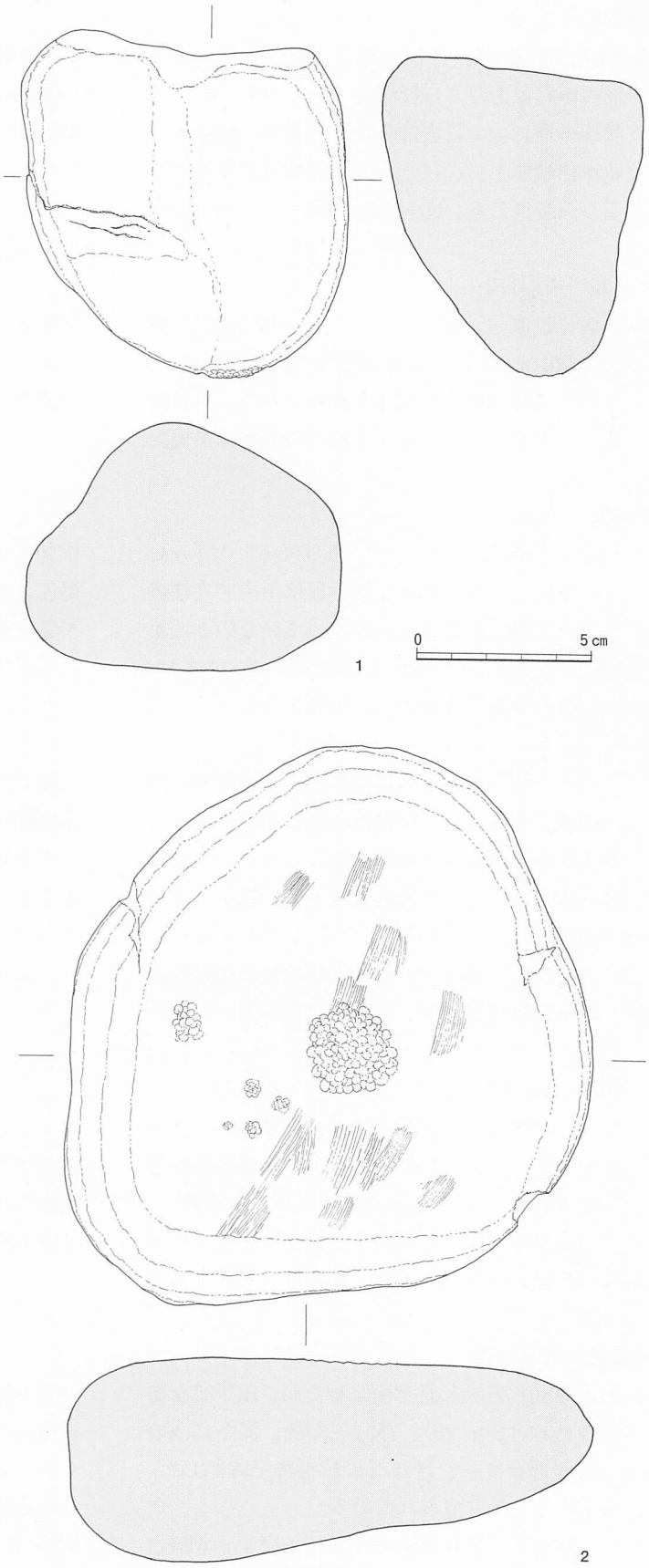

Fig. 130　SP-392・486出土遺物実測図（縮尺１/２）

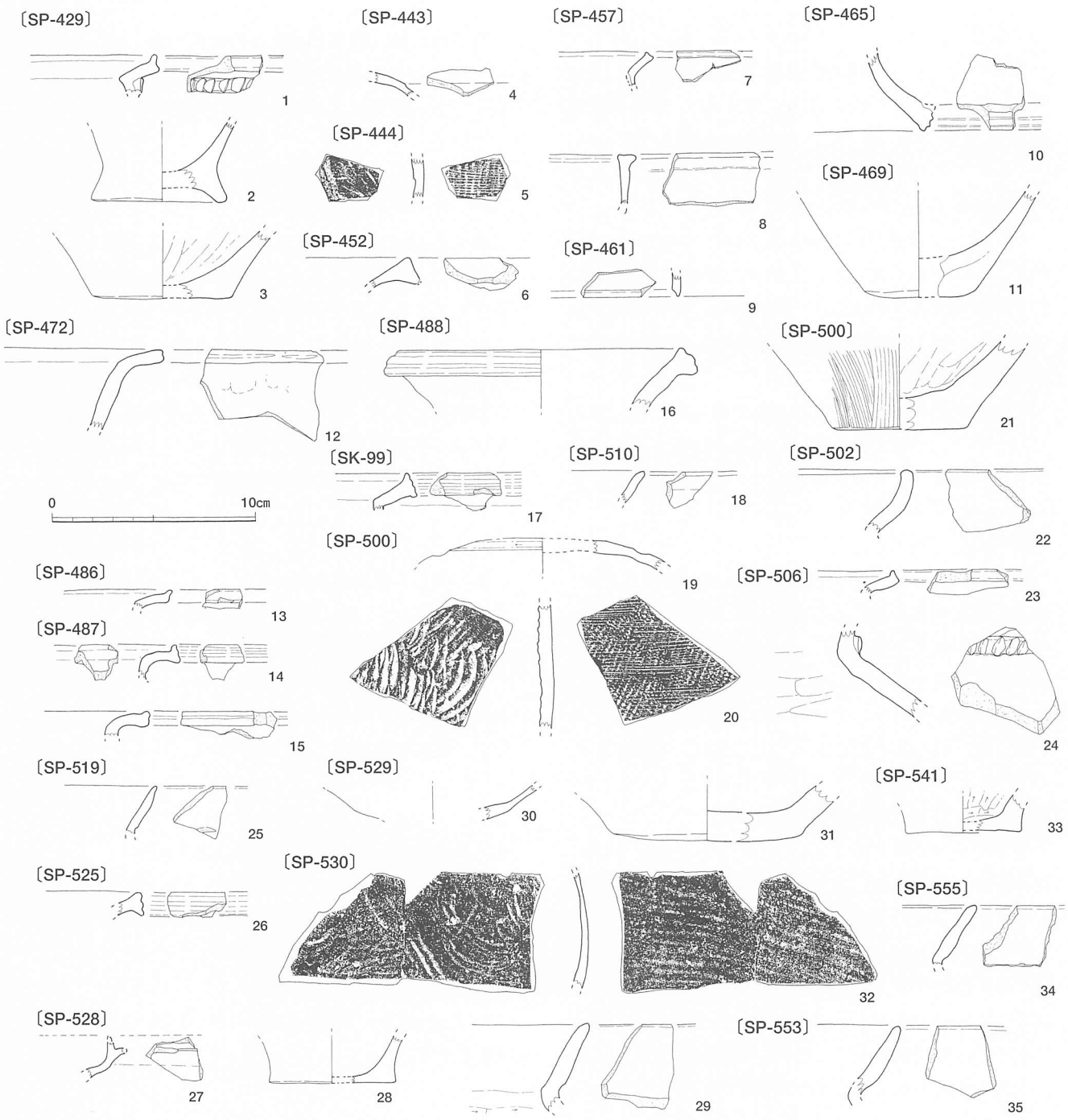

Fig. 131　SP-429・443・444・452・457・461・465・469・472・478・486・488・489・500・502・506・510・519・525・528・529・530・541・544・551・553・555・558出土遺物実測図（縮尺1/3）

SP-416（Fig. 26・128）

CZ-13区に位置し、SC-34・35を切る（Fig. 26）。長径54cm、短径47cm、深さ26cmの不整な長円形の掘り形をもち、径15cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は先端を残して折り取られている。折り取り後に流入した①層は、径2～3mmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量みられる。立柱痕跡の②層は暗褐色シルトで、径1～2cmの楕円形の褐色シルト塊が北側にやや多く混じる。掘り形埋土上半部の③層は、きめが細かな黒褐色砂質シルトで、径1cmの楕円形の褐色シルト塊が少量みられる。下半部の④層は暗褐色シルトで、径1cmの輪郭がぼやけた楕円形の褐色シルト塊がやや

多く混じる。

埋土中からは、古墳時代後期の須恵器胴部片（Fig. 128-43）、鞴羽口の破片（Fig. 128-44）、弥生時代中期後葉の甕（Fig. 128-45）、脚台付鉢（Fig. 128-46）、長さ5㎝、幅・厚さ2㎝ほどの砂岩円礫、径5㎝、厚さ2㎝ほどの円盤状の花崗岩円礫が出土した。また、径1～5㎜の粒状または角張った炭化物片が少量出土している。

SP-419（Fig. 32・106・128、Pl. 23）

CY-12区に位置する。SC-38の床面で検出したが、埋土に砂礫が多く混じることから、本来SC-38を切っていると考える（Fig. 32）。長径53㎝、短径46㎝、深さ17㎝の不整な長円形の掘り形をもち、径15㎝前後の立柱痕跡を確認できた。

埋土上半部の①層は、立柱が折り取られた後に流入した土層で、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトである。立柱痕跡の②層は黒褐色シルトで、小礫がわずかに混じる。掘り形埋土の③・④層は黒褐色砂質シルト。③層には小礫が混じるが、④層には小礫は混じらず、小指先大の黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。

上部流入土①層から、古墳時代中期の土師器の甕口縁部片1点（Fig. 128-35）、土師器もしくは弥生土器の胴部細片7点、炭化物片が出土している。その他、サヌカイト製の打製石鏃（Fig. 106-1、Pl. 23-⑨）、土師器もしくは弥生土器の胴部細片4点がある。

SP-420（Fig. 32）

CY-12区に位置する。SC-38の床面で検出したが、埋土に砂礫が多く混じることから、本来SC-38を切っていると考えた（Fig. 32）。径45㎝、深さ22㎝の長円形の掘り形の中に、径12㎝の杭が打ち込まれていた。杭痕跡は先端を残して折り取られている。

杭が折り取られた後に流入した①層は、小礫がとくに多く混じる黒褐色砂質シルトである。杭痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の③層は黒褐色シルトで、少量の径1㎝の黄褐色シルト塊が混じる。

上部流入土の①層から、弥生土器もしくは土師器の胴部小片1点、埋土中からも3点が出土。いずれも細片で、器形や時期は不明である。

SP-429（Fig. 109・131）

調査区北東隅のCX-14区に位置する（Fig. 109）。長径47㎝、短径38㎝、深さ22㎝の掘り形をもち、南に偏った位置で径14㎝の立柱痕跡を検出した。

立柱痕跡にあたる①層は、径2～3㎜の砂礫が多く混じる暗褐色砂質土。②～④層は掘り形埋土で、②層は径1～2㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土。③層は径1～2㎜の角礫が混じるにぶい黄褐色砂質土。④層は少量の砂礫が混じる暗褐色砂質土で、径1～2㎝の楕円形の褐色シルト塊がごく少量含まれる。

立柱痕跡の①層から、甕口縁部（Fig. 131-1）、径5㎜の角張った炭化物片がごく少量出土。掘り形埋土からは、壺もしくは鉢の底部（Fig. 131-3）、弥生土器の胴部小片2点、焼成不良の上げ底の甕底部（Fig. 131-2）、径2～3㎜の粒状の炭化物片がごく少量出土している。

SP-443（Fig. 129・131）

CY-13・14区に位置する。径45～48の略円形の小穴の中に、径12㎝の杭が打ち込まれている（Fig. 129）。

杭は先端を残して折り取られている。折り取り後に流入した①層は、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。杭痕跡の②層は黒褐色シルト。掘り形埋土の③層も黒褐色シルトで、部分的に黄褐色シルトが縞状にみられる。

上部流入土①層からは弥生土器の胴部小片3点、土師器や須恵器の胴部小片5点、杭痕跡③層からは弥生土器と考えられる細片3点が出土した。他に、土師器もしくは弥生土器の胴部細片4点、須恵器蓋の胴部細片（Fig. 131-4）が出土している。

SP-444（Fig. 89・129・131）

CX-14区に位置する。径18～19㎝、深さ25㎝の小穴で、径10㎝の杭が打ち込まれていた（Fig. 129）。杭痕

跡の①層は暗褐色砂質シルトで、褐色砂質シルトの1cm大の楕円のブロックが少量混じる。土質はきめ細かく、砂礫は混じらない。②層は暗褐色砂質シルト。径0.5cmの褐色砂質シルト塊が多く混じる。

埋土中から、弥生土器や土師器の胴部細片～小片20点前後、須恵器の胴部片4点が出土した。図示した須恵器胴部細片（Fig. 131-5）はその1点である。また、鉄滓（Fig. 89-8）の破片が出土している。

SP-461（Fig. 118・131）

DB-15区に位置しSC-22、SK-23を切る（Fig. 118）。径42～44cm、深さ26cmの円形の掘り形をもち、径14cm前後の立柱痕跡を確認した。立柱は、先端を残して折り取られている。折り取り後に流入した①層は、小礫がとくに多く混じる黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色砂質シルト塊が多く含まれる。立柱痕跡の②層は黒褐色シルトで、軟らかい親指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。掘り形埋土上部の③層は黒褐色シルトで、わずかに黄褐色シルトが混じる。下部の④層は黒褐色シルトで、径2～3cmの丸い黄褐色シルト塊が含まれている。

上部流入土の①層から弥生土器細片5点と須恵器の坏蓋口縁部（Fig. 131-9）、掘り形埋土③・④層から弥生土器の胴部細片3点が出土している。

SP-464（Fig. 129）

CY-13区に位置する。径23～24cm、深さ13cmの掘り形の中で、径12cmの杭痕跡を確認できた（Fig. 129）。杭痕跡の①層は径2～4mmの角礫が多く混じる暗褐色砂質土。掘り形埋土の②層は褐色シルト。

掘り形埋土から、古墳時代後期と考えられる内面を乱雑にヘラケズリした甕胴部片、弥生土器と考えられる胴部片の各1点、径2～3mmの粒状の炭化物片がごく少量出土している。

SP-491（Fig. 129・132）

DD-14区のSC-14床面で検出した。本来は胴張りの隅丸方形の掘り形をもつと考えられるが、南側の壁が崩落しているため、不整形となっている（Fig. 129）。埋土上部には、小指先大の拉げた黄褐色シルト塊が点々と混じる黒褐色砂質シルトの①層が堆積する。下部にも黒褐色砂質シルト流れ込むが、②層には親指先大の黄褐色シルト塊が多く混じり、③・④層には不整形の黄褐色砂質シルト塊が多く含まれる。いずれも小礫は含まれず、とくに②・④層はSC-14の貼り床部と共通した土質である。

埋土中からは、弥生時代中期後葉～後期初頭の壺頸部片（Fig. 132-1）、甕口縁部片（Fig. 132-2・3）、上げ底の底部片（Fig. 132-6）、高坏脚部片（Fig. 132-5）、弥生土器の胴部小片6点、長さ9cm、幅5cm、厚さ3～3.5cmの花崗岩円礫（R-1844）、長さ4.5cm、幅3.3cm、厚さ1.5cmの餅形の含礫砂岩が出土している。

SP-497（Fig. 62・89）

DD-14区のSC-14の床面で検出した（Fig. 62）。径25～28cm、深さ22cmを測る略円形の掘り形をもつ。埋土は黒褐色砂質シルト。弥生土器の甕や壺の胴部細片～小片が10数点と鉄滓（Fig. 89-7）が出土している。

SP-500（Fig. 99・131）

DA-14区に位置し、SC-33を切る（Fig. 99）。径55～57cm、深さ23cmの略円形の掘り形をもつ。掘り形のやや北よりで径18cmの立柱痕跡を確認できた。立柱は、先端を残して折り取られている。

立柱の折り取り後に①層が流れ込む。①層は径2～5mmの礫がかなり多く混じるにぶい黄褐色砂質土で、褐色シルトの小さなレンズ状ブロックが多くみられる。立柱痕跡の②層は上部に礫が多く混じる暗褐色砂質土。③～⑤層は掘り形埋土。③・④層は径2～3mmの礫が多く混じる暗褐色砂質土で、幅2cm前後の褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。⑤層は径3mm前後の砂礫が混じる黒褐色砂質土で、一部が粘性をおびる。径1～2cmの楕円形の褐色シルト塊が少量含まれる。

上部流入土①層から、弥生時代中期後葉～後期前葉の鉢の底部（Fig. 131-22）、弥生土器ないし土師器の胴部細片～小片10数点、1㎝ほどの細長い炭化物片が少量出土している。立柱痕跡の②層からも、土師器もしくは弥生土器の胴部細片～小片5点、径2～3㎜の粒状の炭化物片が少量が出土。この他、掘り形埋土③～④層から出土した遺物に、須恵器、弥生土器ないし土師器の胴部細片～小片10数点がある。

SP-502（Fig. 99）

CZ-15区に位置し、SC-33、SK-32を切る（Fig. 99）。径46～48㎝、深さ21㎝の略円形の掘り形をもつ。掘り形の南よりの埋土下部で、やや細いが径12㎝の立柱痕跡を確認できた。

立柱は先端を残して折り取られていた。その後に流れ込んだ①・②層は、径2～4㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土である。②層には褐色シルトの幅1～2㎝のレンズ状ブロックが少量みられる。立柱痕跡の③層は径1㎜の礫が少量混じる黒褐色砂質土で、部分的に粘性をおびる。④・⑤層は掘り形埋土で、径2㎜前後の礫が少量混じる暗褐色砂質土。④層には径1㎝の楕円形の褐色シルト塊、⑤層には幅2～3㎝の薄い褐色シルトのレンズ状ブロックがみられる。

上部流入土①・②層から土器細片と径0.5～1㎝の角張った炭化物片、立柱痕跡の③層から径2～3㎜の粒状の炭化物片がごく少量出土している。

SP-519（Fig. 127・129・131）

CY-14区に位置する。SK-36を切り、南西部分は攪乱で破壊される。径65～70㎝、深さ13㎝の不整な長円形の掘り形をもつ（Fig. 129）。掘り形のほぼ中央の中程の深さで、径17㎝の立柱痕跡を検出した。先端部分を残し折り取られたものと考えられる。

①層は立柱折り取り後の流入土、②層は立柱痕跡、③～⑥層は掘り形埋土である。①層は径2～3㎜の砂礫が多く混じる暗褐色砂質土。②層も暗褐色砂質土であるが、砂礫が少なめである。③層はにぶい黄褐色砂質土で、径1～2㎝の楕円形の褐色砂質シルト塊が多く混じる。④層は褐色砂質土で、径2㎝の楕円形の褐色シルトを上部に多く含む。⑤層は暗褐色砂質土で、径1㎝の楕円形の褐色シルト塊がごく少量混じる。⑥層は褐色シルトである。

出土遺物には、古墳時代中期の小型丸底壺口縁部片（Fig. 131-26）、弥生時代中期の壺口縁部片、土師器もしくは弥生土器の胴部細片20点がある。胴部破片の中には、器体が小さな土塊となって崩れる焼成不良品が混じる。また、周縁に敲打痕を残す花崗岩円礫（Fig. 127-6）がある。

SP-534（Fig. 129）

DB-14区に位置する。長径41㎝、短径35㎝、深さ14㎝の不整円形の掘り形の中で、北西側に傾いた径12㎝の杭痕跡を確認できた（Fig. 129）。杭痕跡の①層は径1㎜の小礫が多く混じる暗褐色砂質土。②・③層は掘り形埋土で、径1㎜の小礫がわずかに混じる暗褐色ないしは褐色砂質シルトである。②層には径1㎝ほどの楕円形のにぶい黄褐色砂質シルト塊が少量みられ、③層では褐色砂質シルトとにぶい黄褐色砂質シルトと混じり合う。

遺物は拳大の花崗岩円礫が出土しただけである。

SP-535（Fig. 129）

DB-14区に位置し、北端を攪乱部分で破壊されている。短径39㎝、深さ12㎝の掘り形の中で、北西側から斜めに打ち込まれた径13㎝の杭痕跡を確認できた（Fig. 129）。杭痕跡の①層は径2㎜の礫が混じる暗褐色砂質土である。掘り形埋土の②層は径2㎜ほどの礫が多く混じる褐色砂質土で、径1～2㎝の楕円形のにぶい黄褐色砂質シルト塊が所々にみられる。

遺物は出土していない。

SP-553（Fig. 129・131）

DB-14区のSC-28の床面で確認した。SA-20に切られる。推定長径50㎝前後、短径43㎝、深さ21㎝の長円形の掘り形をもつ（Fig. 129）。掘り形下部で径15～17㎝の立柱痕跡を検出できた。立柱は先端を残して折り

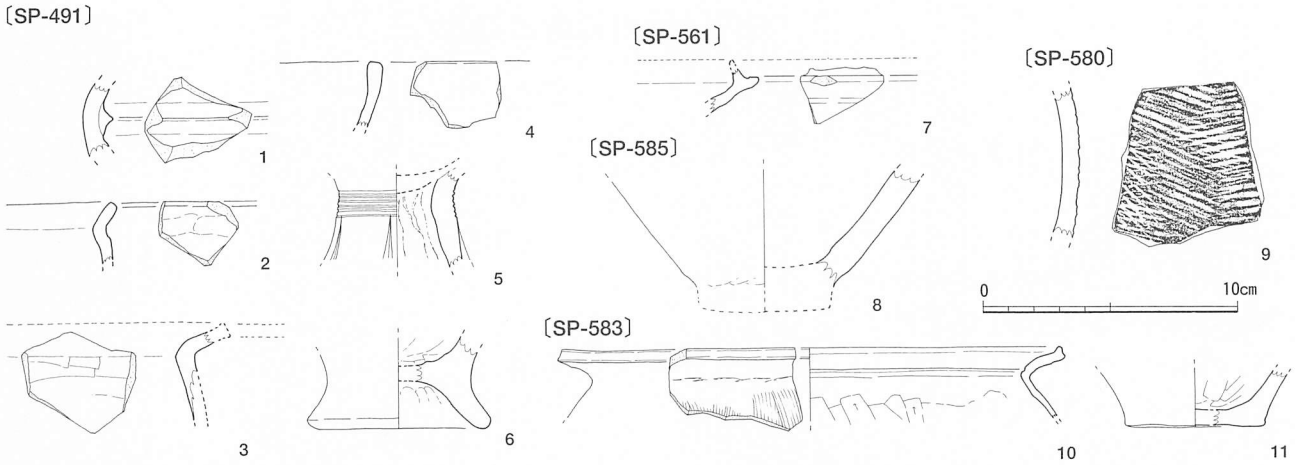

Fig. 132　SP-561・580・582・583・585出土遺物実測図（縮尺1/3）

取られている。折り取り後に①～③層が流入する。①層は径2㎜の礫が混じる褐色砂質土で、径2㎝の焼土がみられる。②・③層は砂礫が若干混じる暗褐色砂質シルト。②層には明黄褐色砂質シルトが混じり、③層には径2㎜ほどの粒状の焼土がわずかにみられる。立柱痕跡の④層は小礫混じりの暗褐色砂質シルト。掘り形埋土の⑤層は径1㎜の礫がわずかに混じる暗褐色砂質シルトで、径1～2㎝のにぶい黄褐色シルト塊が点々とみられる。

立柱痕跡の④層から、弥生土器もしくは土師器の胴部細片2点が出土。この他、土師器の甕口縁部細片(Fig.131-39)、胴部細片1点、径2～3㎜の粒状の炭化物片がある。

SP-561（Fig. 129・132）

CZ-12区に位置する。SD-3の下底面で確認した。長径60㎝、短径54㎝、深さ25㎝の不整な長円形の掘り形の中で、径20㎝の立柱痕跡を確認した（Fig. 129）。

立柱は先端を残して折り取られている。①・②層は、立柱の折り取り後に流入した土層である。①層は径3～5㎜の礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土で、径1㎝の楕円形の褐色シルト塊が多く含まれる。②層は径1～2㎜の礫が少量混じるにぶい黄褐色砂質土。立柱痕跡の③層は黒褐色砂質土で、下半部はやや明るい土色に変化する。にぶい黄褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが少量みられる。掘り形埋土の④層は径2～3㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土である。

掘り形埋土④層から、須恵器の坏身（Fig. 132-7）、坏胴部小片1点、弥生土器もしくは土師器の胴部片6点が出土している。また、上部流入土①層からは径5㎜の角張った炭化物片、立柱痕跡の③層からも径3㎜の粒状の炭化物片が少量出土した。

SP-583（Fig. 72・132）

DD-15区に位置する。長円形で、長径40㎝、短径28㎝、深さ41㎝の掘り形をもち、その下部で径15㎝の立柱痕跡を確認できた（Fig. 72）。①・②層は立柱が抜かれた後に流れ込んだ土層である。①層は径1㎜の小礫がごく少量混じる暗褐色砂質土。薄い褐色シルトのレンズ状ブロックが少量みられる。②層は黒褐色砂質土で、褐色シルトの薄いレンズ状ブロックが点々とみられる。立柱痕跡の③層はわずかに粘性をおびる暗褐色砂質土。④層はわずかに残る掘り形埋土。径1～2㎜の小礫が少量混じる暗褐色砂質土で、径1㎝の楕円形の褐色シルト塊が少量混じる。

弥生時代中期の甕口縁部（Fig. 132-10）、底部(Fig. 132-11)、壺や甕の胴部細片～小片13点、径2～3㎜の丸い炭化物片が出土している。

3　古代以降の遺構と遺物

（1）古代以降の遺構の分布

出土遺物および出土状況、切り合い関係、埋土の特徴から、古代以降と判断できた遺構を報告する。当該期の遺構には、溝２条（SD-２・３）、土壙１基（SK-19）、柱穴および小穴がある。

SD-３は、土層断面から数条の溝が重複していることを確認できた。SD-２も、そうした溝の一部である。土壙SK-19からは時期を決定できる遺物は出土していないが、SD-３を切って掘り込まれ、埋土が灰色みをおびた暗褐色砂質土であり、近世以降の遺構である可能性が高い。柱穴・小穴は、立柱痕跡や杭痕跡が確認できたものを中心として報告する。しかし、それらと組み合って掘立柱建物や柵列（杭列）を構成するものは確認できていない。他の小穴については、巻末の遺構一覧表を参照されたい。

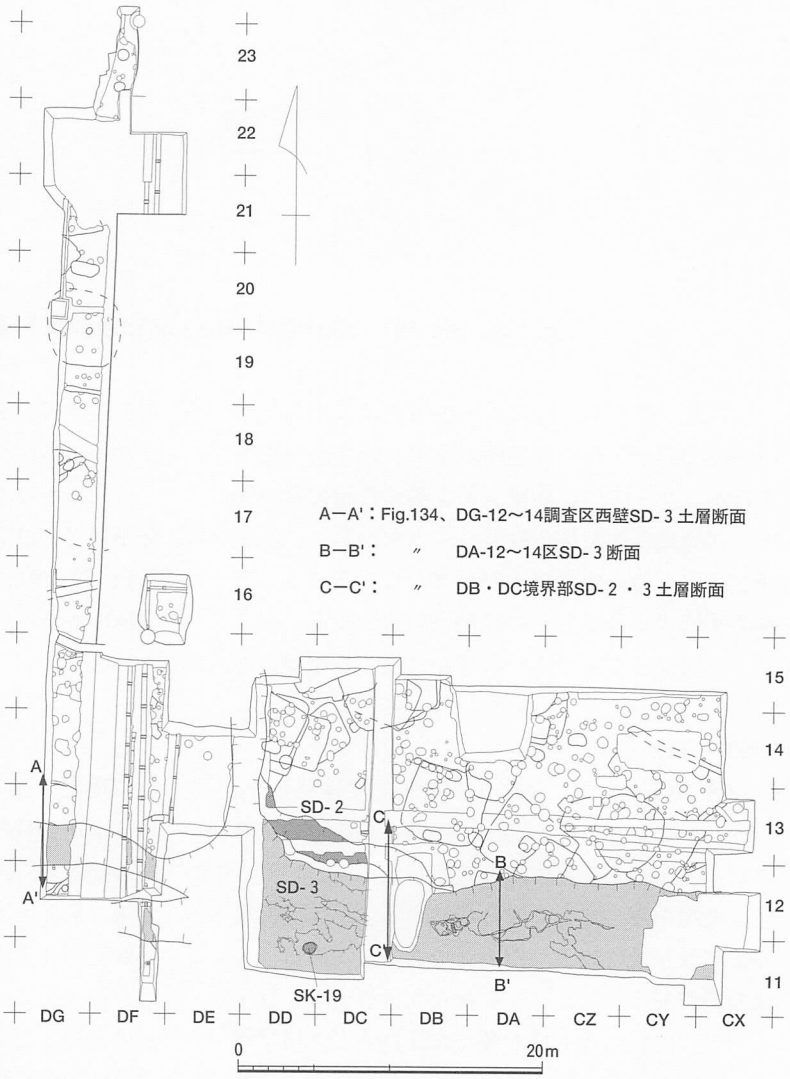

Fig. 133　文京遺跡13次調査における古代以降の遺構（縮尺１/500）

（2）溝

SD-２号溝（Fig. 133～135）

DC・DD-13区のⅣ層上面で、SD-３に切られる南東から北東方向にのびる溝を検出し、SD-２とした。Ⅳ層の上面で幅1.2～２m、深さ20cmほどを測る（Fig. 133）。しかし、DB・DC区境界部の土層断面でⅢ層を切り込んでいることを確認でき、Ⅲ層の厚さを考慮すれば、溝幅は２～2.5m、深さ50cmほどと考えられる。溝底には小さな窪みが多く見られ、凹凸にとむ。

埋土は、暗褐色砂礫土を主体とし、北側上部には部分的ににぶい黄褐色砂礫層が堆積する。DB・DC区境界部の土層断面では、上部ににぶい黄褐色砂礫の⑮層、下部に暗褐色砂礫土の⑯層が堆積する。⑮・⑯層ともに、径0.3～１cmの礫や小石が混じる（Fig. 135-③）。以上の埋土の特徴はSD-３と共通し、SD-３は何条かの溝が重複していることから、SD-２はそうした溝の一部で、最も古い溝にあたる。

調査範囲が狭い割にコンテナ１箱の遺物が出土している（Fig. 134）。弥生時代中期後葉～後期前葉、後期後葉、古墳時代後期などの遺物がほとんどを占めるが、古代末～中期の土師器坏の口縁部や胴部片が３点だけ

混じる。いずれも細片であるが、1点を図示できた(Fig. 134-1)。こうした土師器があることから、SD-2が機能していた時期は、SD-3とほぼ同じ古代末～中世の時間幅で考えてよい。他の時期の遺物は、調査区北半部の遺構や遺物包含層がSD-2に削られて混入したものである。詳細は巻末の遺物観察表を参照されたい。

SD-3号溝（Fig. 133・135～140、Pl. 11・21・22）

調査区南部を東西に流れる溝である。調査区西端のDG-12～14区で、Ⅲ層の上面から掘り込まれていることを確認できた（Fig. 133）。ただし、この部分では1条の溝であるが、DC・DD-11・12区の底面で幅1～1.6mの帯状の窪みが東西方向にのびていることや、DB・DC区境界部の土層断面の観察から、少なくとも4条の溝が重複することを確認できた。しかし、個々の溝の埋土を見分けることができず、調査においてはSD-3として一括して調査を進めた。

DG-12～14調査区西壁土層断面では、埋土中部～上部に砂礫や小石が混じる砂質土である①～④層、溝底～下部に細砂～シルトの薄いレンズ状ブロックがみられる暗褐色砂質土の⑤・⑥層が堆積する（Fig. 135-①）。

埋土中部～上部の①層は、やや灰色みをおびたにぶい黄褐色砂質土で、径0.5～1cmの角礫や小石が非常に多く含まれる。②層は径0.5～1cmの角礫混じりのにぶい黄褐色砂質土。①層と比べてしまりがあり、小石の量は少ない。③層はやや灰色みをおびた暗褐色砂質土で、径3～5mmの角礫や小石が多く混じる。径1～3cmの楕円形のにぶい黄褐色砂質土塊が点々と見られる。④層は径3～5mmの角礫や小石混じりの暗褐色砂質土である。SD-3を一気に埋没させた洪水堆積物と考えられる。溝底～下部の⑤・⑥層は、暗褐色砂質土で、褐色細砂～シルトの薄いレンズ状ブロックが混じる。⑤層には、さらに不整形な径3～6cmの褐色シルト塊が多く含まれている。⑤・⑥層は、SD-3が機能している段階の流水堆積物である。

DB・DC区境界部では、前述したように、土層断面で4条の溝が切り合っていることを確認できた（Fig. 133-③、Pl. 11-1）。①～⑥層は、その中でも最も新しい溝を埋める堆積物である。①層は暗オリーブ褐色砂層で、径3～5mmの礫が多く混じる。②層はオリーブ褐色砂質土。③層は砂礫混じりのオリーブ褐色砂質土。④層は、③層中に見られる灰褐色細砂のレンズ状ブロックである。⑤層はオリーブ褐色の砂質土層と細砂層が薄い縞状に互層堆積する。⑥層は、⑤層の中に見られる径2～5mmのオリーブ褐色の礫のレンズ状ブロックである。

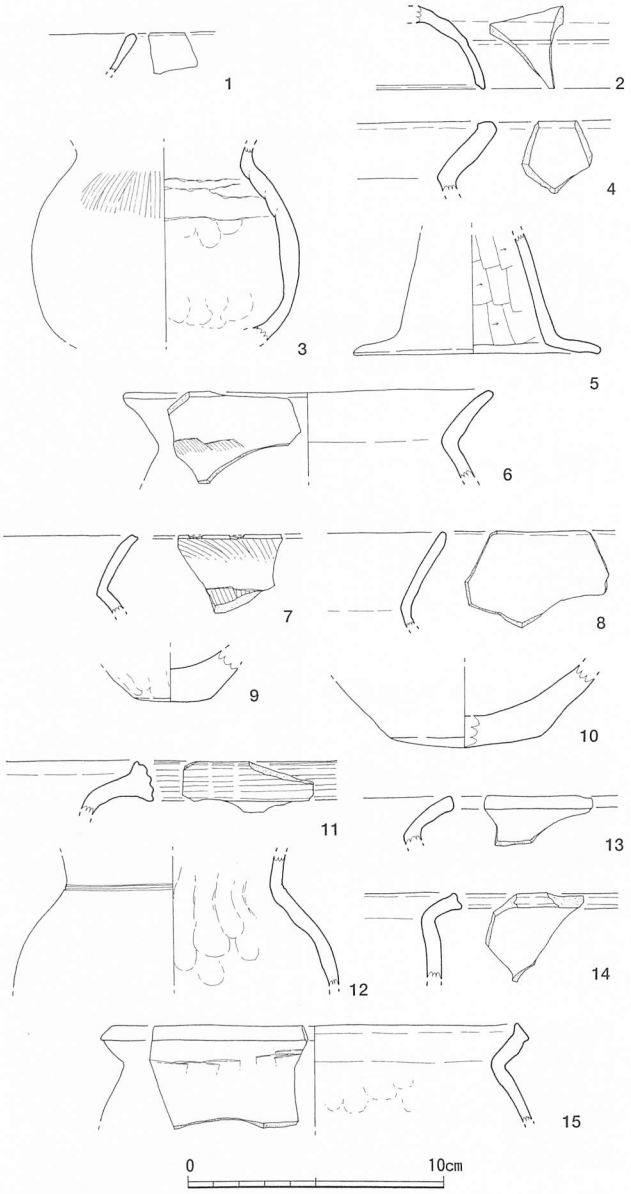

Fig. 134　SD-2出土遺物実測図（縮尺1/3）

これに先行して、北側に⑦・⑧層、⑨・⑩層、⑫～⑭層の3条の溝がある。⑦層は黒褐色砂質土。⑧層は砂礫混じりの黒褐色砂質土で、下部には暗灰色細砂の薄いレンズ状ブロックが互層堆積する。⑨層は暗オリーブ褐色砂で、径2～3cmの小石が多く混じる。⑩・⑪層は黒褐色～暗褐色の砂礫層で、上部には径2～3cmの小石が混じり、下部は細砂とシルト質細砂が薄い

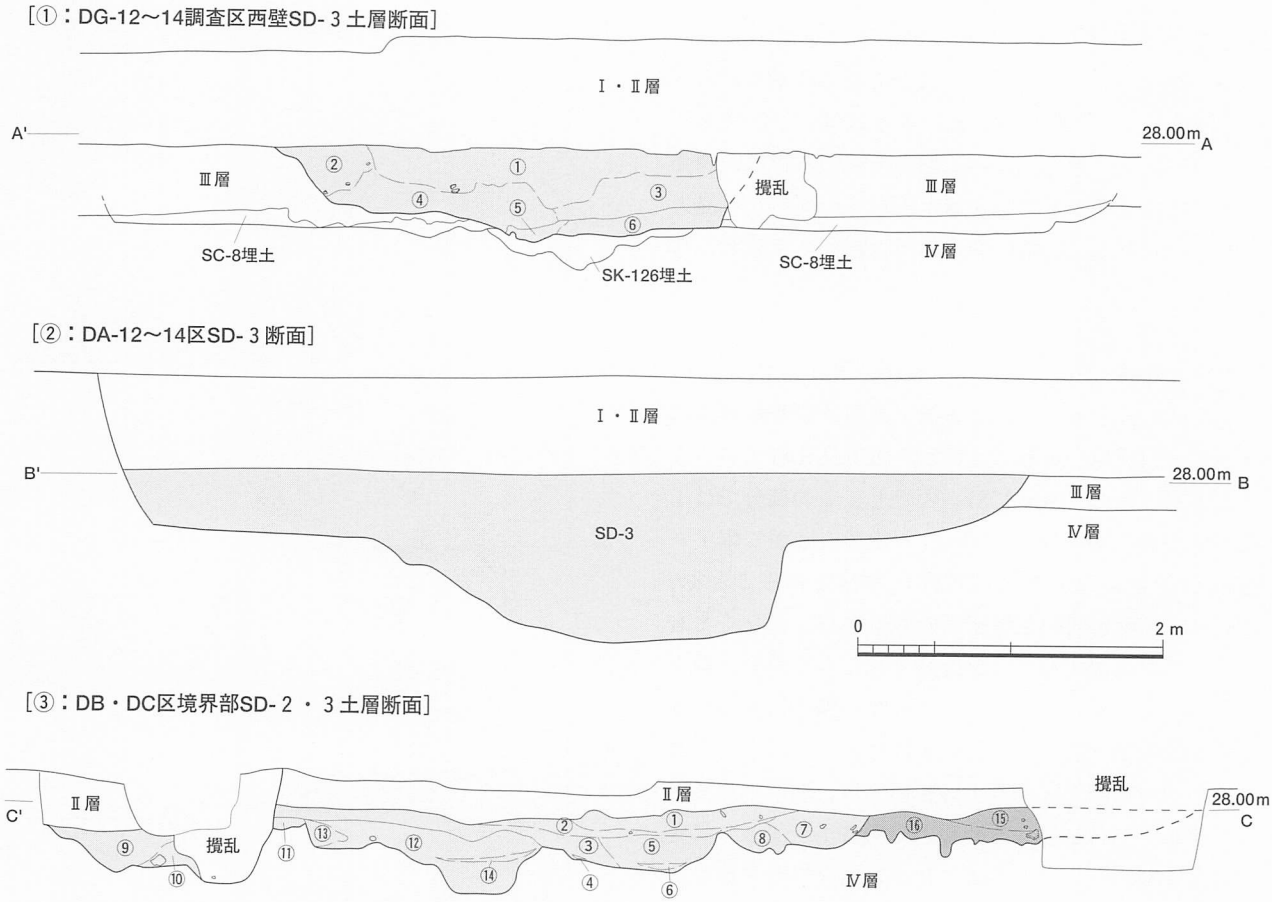

Fig. 135　SD-２・３土層断面図（縮尺１/50）

縞状になって互層堆積する。⑫層は細砂主体の砂礫混じりのオリーブ褐色砂質土。⑬層は⑫層中のにぶい黄褐色砂質シルト塊で、Ⅳ層部分の崩落部分と考えられる。⑭層は⑫層中にみられる暗灰色砂礫の薄いレンズ状ブロックである。いずれも溝底に流水があったことを示す細砂のレンズ状ブロックが認められる。

また、溝底はかなり凹凸にとむ。とくに、CZ～DB-12区では、DA-12～14区断面（Fig. 133-②）で示したように、底面からさらに50～60㎝深い不整形の帯状の窪みが東西にのびる。とくに、DA-12区周辺の窪みには暗灰色～灰褐色の粗砂や砂礫が堆積し、その中から遺物が比較的まとまって出土している。最下部粗砂層として遺物を取り上げた。

出土遺物には、弥生時代中期後葉～古墳時代後期の遺物が多く、大形の破片も目立つ。最も新しい遺物は古代末～中世前期のものである。また、DA-12区最下部粗砂層からは比較的集中して古代末～中世前期の遺物が出土している。弥生時代～古墳時代の遺物は、調査区北半部の遺構や遺物包含層が、SD-３によって削られ、覆土中に混入したもので、SD-３が機能していた時期は古代末～中世前期と考えてよい。

以下、SD-３の時期を示す古代末～中世前期の遺物については、細片までできるだけ図化することに努めた。その上で、埋土出土とDA-12区最下部粗砂層に分けて遺物を報告する。弥生時代～古墳時代の遺物は、大形の破片や時期決定が可能な遺物を抽出して図示し、他は報告を省略した。

〔埋土出土の遺物〕

SD-３の埋土から出土した古代末～中世前期の遺物には、土師器・黒色土器・瓦器・須恵質土器・白磁・瓦などがある（Fig. 136・137、Pl. 21・22）。

Fig. 136-１・２は土師器皿である。外底は回転糸切り離し。３は胴部の傾きから坏と考えたが、底径は皿に近く小さい。４～６は高台付き碗。７～18は坏である。いずれも外底は回転糸切り離し。19は柱状高台土師器。外底面は回転糸切り離し。他は回転横ナデ。底部には焼成前に内側から穿孔を施す。20～24は黒色土器Ｂ類の碗と高台付き碗。25～30は瓦器碗である。

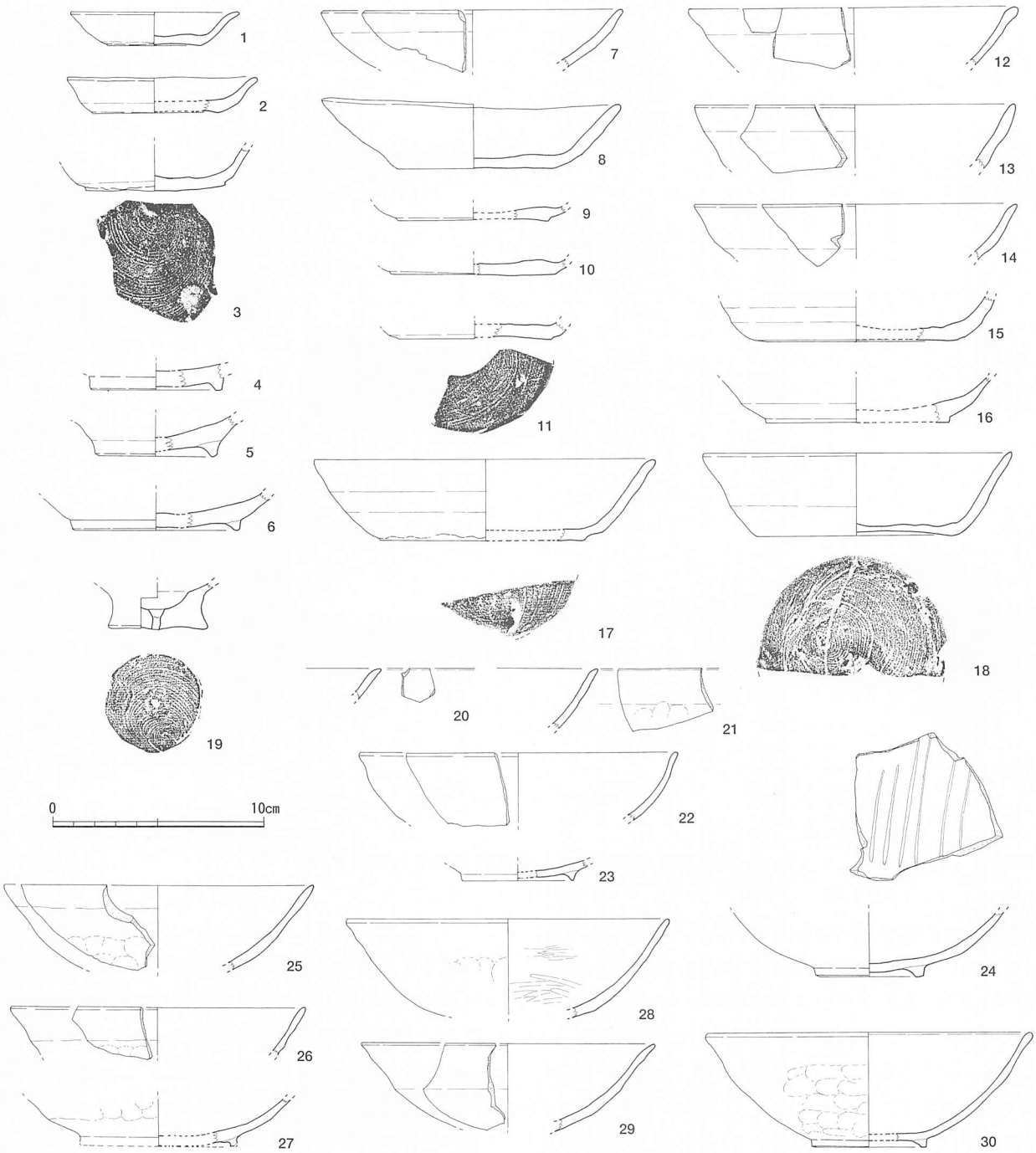

Fig. 136　SD－3出土遺物実測図1（縮尺1/3）

胴部外面には型押し痕が残り、24の内底面には暗文が施されている。また、29は二次的火熱を受けて、内外面ともにピンク色に変色している。

Fig. 137－1～10は中国白磁。1・2は皿で、2の胴部外面中位まで施釉される。外面は回転ヘラケズリ。胴部内面にはヘラ描きの沈線が1条巡る。3は碗で、内外面に施釉し、胴部下半の外面は回転ヘラケズリ、他は回転横ナデを施す。内面に浅くごく細い沈線が1条巡る。4～7は玉縁口縁をもつ碗である。4の玉縁口縁の下端から胴部上位には、釉溜りがみられる。5の胴部下半の外面は露胎のまま。小片のため口径・器体の傾きはやや不確実である。7は内外面ともに施釉され、外面には回転ケズリ、内面は回転横ナデが施されている。8～10は高台部の破片。8の外面にはカン

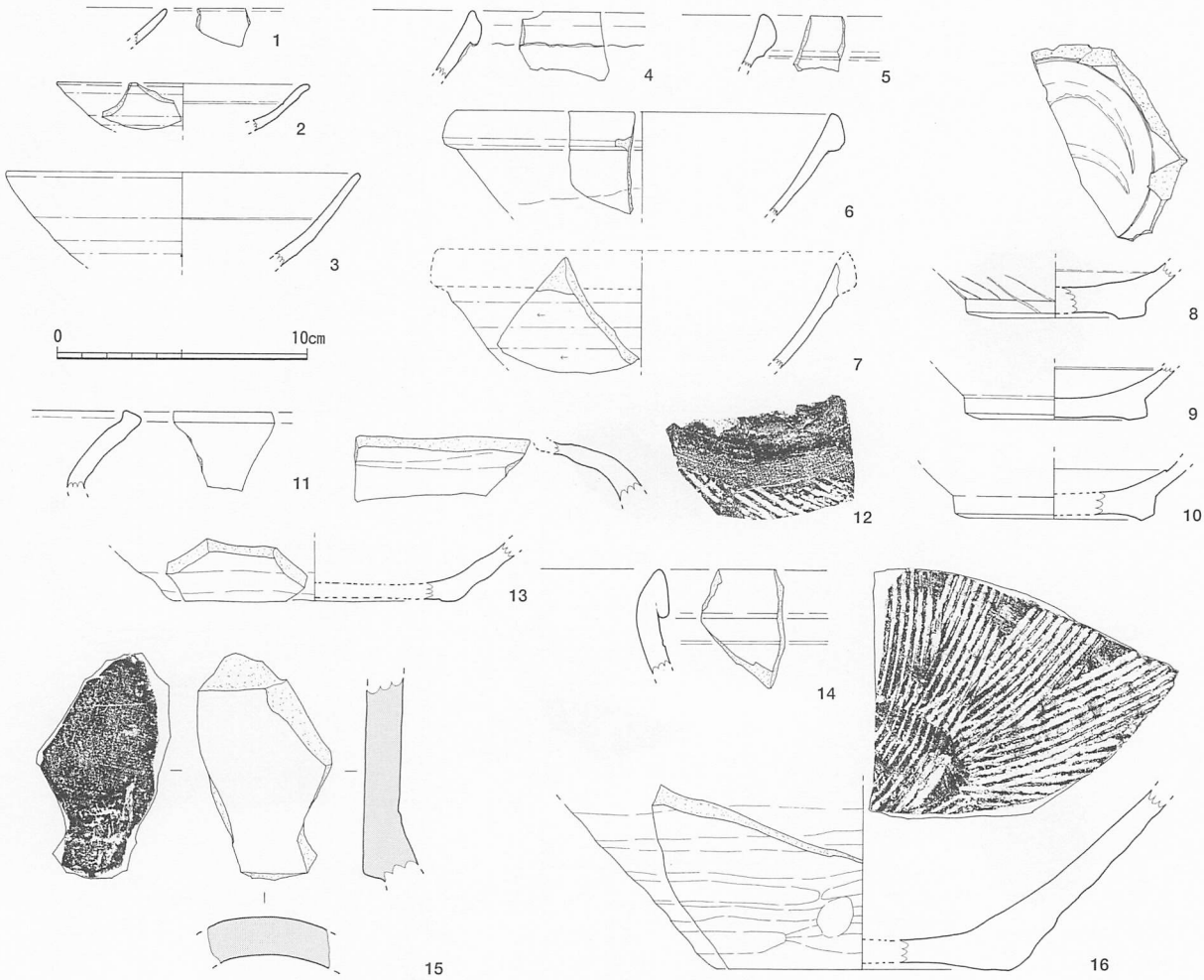

Fig. 137　SD-３出土遺物実測図２（縮尺１/３）

ナケズリ状のヘラ痕が残り、内底見込み部にはヘラ状工具で渦巻き文が施される。外面は露胎のままである。９の高台部～胴部下半の外面は回転ケズリし、露胎のままである。内面は回転横ナデを施し、全面施釉。10は内面全面に施釉、外面は露胎のまま。外面は回転ヘラケズリを施す。４・６・10は、二次的火熱を受けて、釉色は変化している。とくに、４は鬆が入った状態になり、10も胎が粉っぽい不透明な灰白色となっている。

11～14は須恵質土器で、11・12・14は亀山焼きと考えられる甕である。11は内外面ともに横ナデ調整。口縁内面には薄く自然釉がかかる。12は肩部破片。外面は指頭で整形した後に、胴部は平行条線のタタキ調整、口縁部付け根付近は横ナデを施す。内面は指頭を用いた強い横ナデである。14は口縁部の小片。内外面ともに横ナデ調整。口縁部直下に浅い幅広の沈線が１条巡る。13はコネ鉢。外面は強い横ナデ、内面はナデであるが、器面は摩滅している。15は丸瓦の破片で、表面は燻され黒色を呈する。連結面が部分的に残る。16は備前焼の擂り鉢で、外面には乱雑な横方向の轆轤目が残る。内面には９条１単位で幅１㎜ほどのおろし目が施される。外底部は板おこしである。この他、土師器の坏の口縁部片１点があるが、細片のため図化できなかった。

古代末～中世前期以外の遺物には、古墳時代後期の須恵器（Fig. 138-１～14）、土師器（Fig. 138-15・16）、弥生時代後期後葉（Fig. 138-17～21）と中期後葉（Fig. 138-24～28）の土器がある。詳細は巻末の遺物観察表を参照していただきたい。

この他、金属器として、径3.5㎜の棒状の鉄片が銹着した厚さ3.5～４㎜の板状の青銅片がある（Fig. 139-１）。鉄片は鉄鏃の茎部と考えられるが、青銅片は器種は不明である。また、推定径11㎝の椀形鉄滓の半折品が出土している（Fig. 139-３）。後述するよう

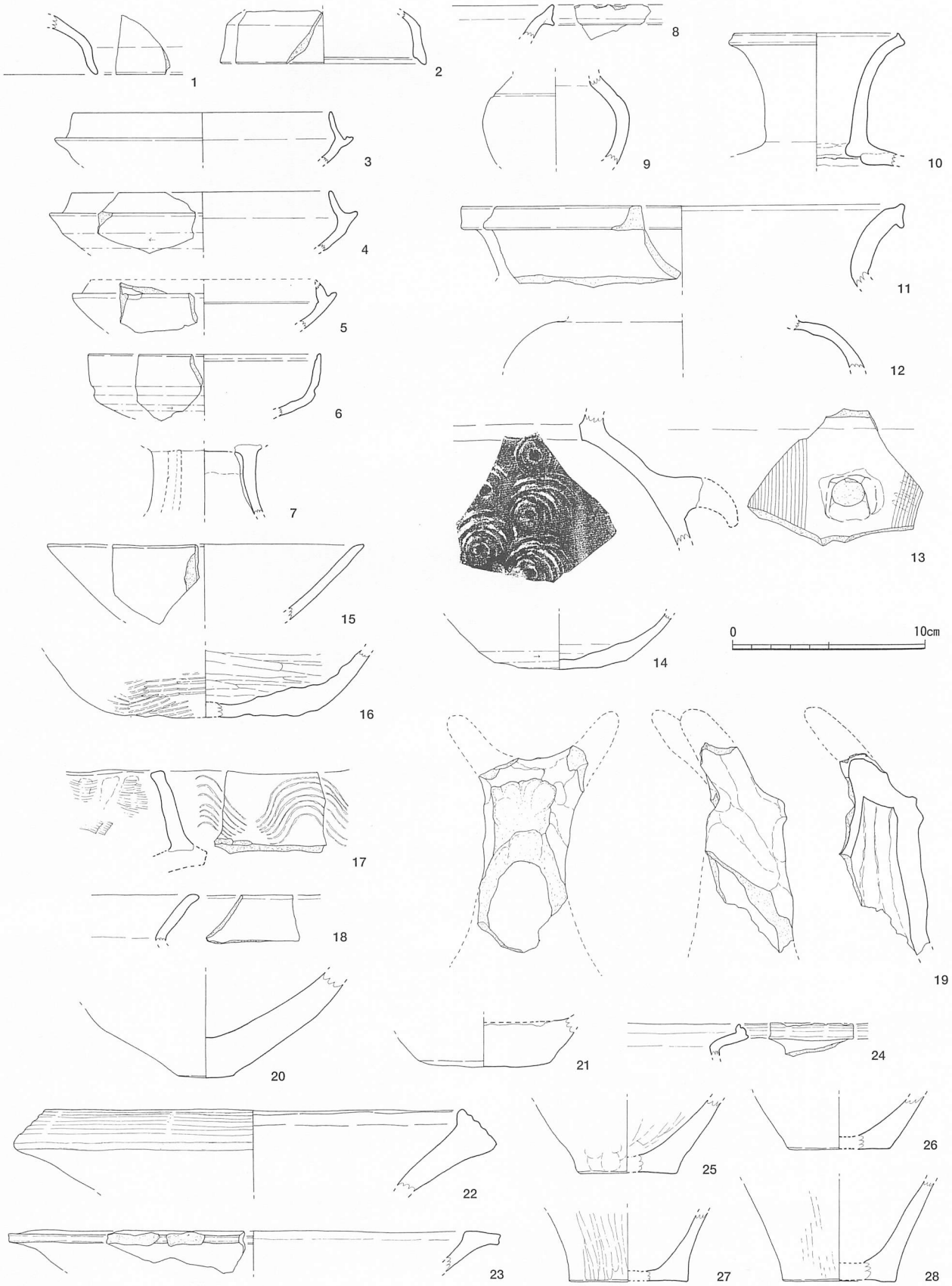

Fig. 138　SD－3 出土遺物実測図 3（縮尺 1 / 3）

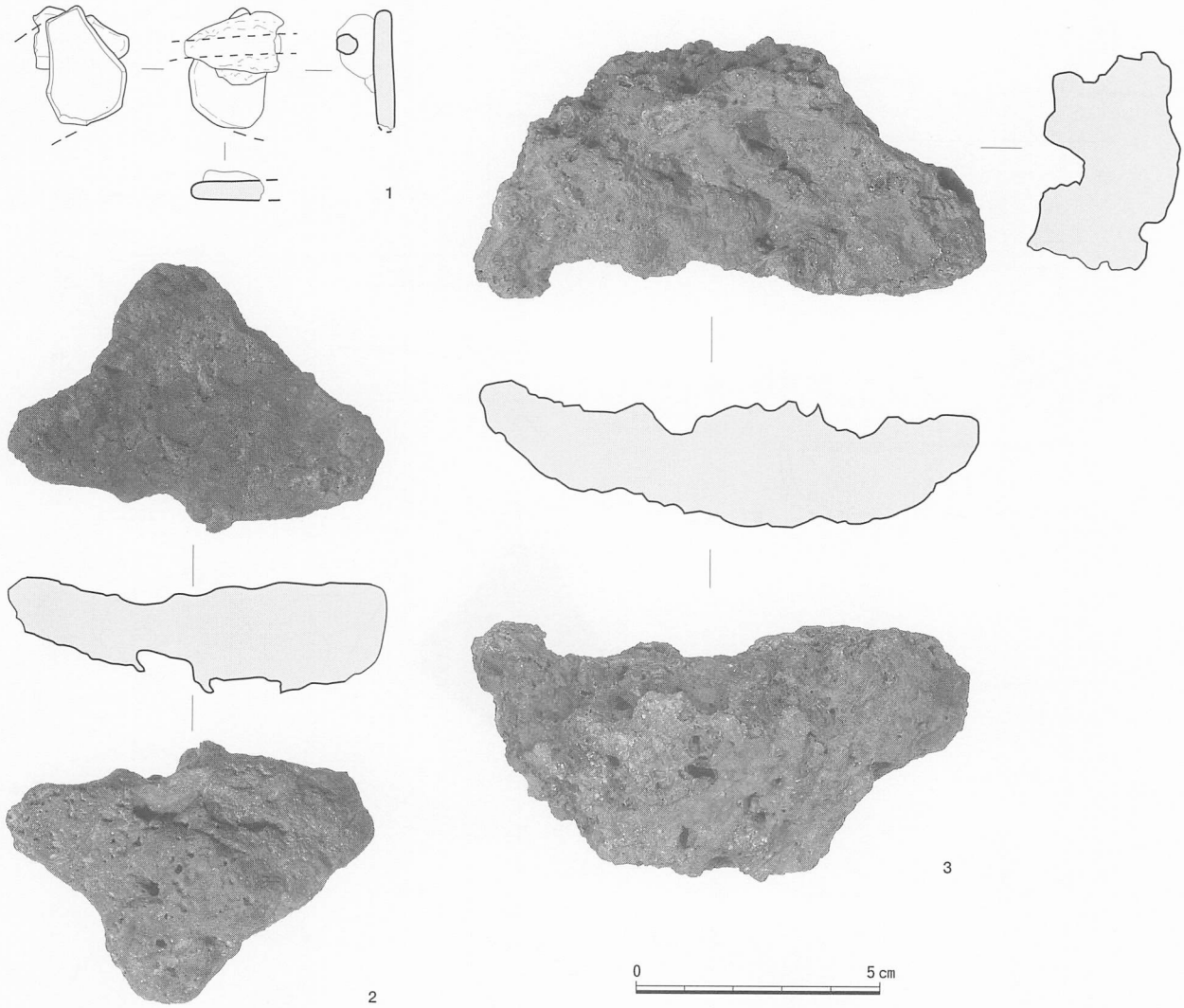

Fig. 139　SD－3 出土遺物実測図 4（縮尺 1 / 3）

に、今次調査では弥生時代～古墳時代中期や古代以降の遺物に確実に伴う鉄滓は出土していない。古墳時代後期のものである可能性が高い。花崗岩・砂岩の径4～12cmの球状あるいは小判状の亞円礫～円礫、人頭大の径20cmを超える球状の円礫、小判状の亜角礫がある。Fig. 140－1は長さ17.3cm、幅8.2cm、最大厚2cm、重量455gを測る緑色片岩である。扁平な転石で、出土状況から時期は確定できないが、弥生時代の石器素材である可能性を考えておきたい。

〔DA－12区最下部粗砂層出土の遺物〕

狭い範囲ではあるが、かなりまとまって遺物が出土している。弥生時代～古墳時代の遺物も多いが、古代末～中世前期の遺物には、土師器・黒色土器・瓦器・白磁などがある（Fig. 141・142）。

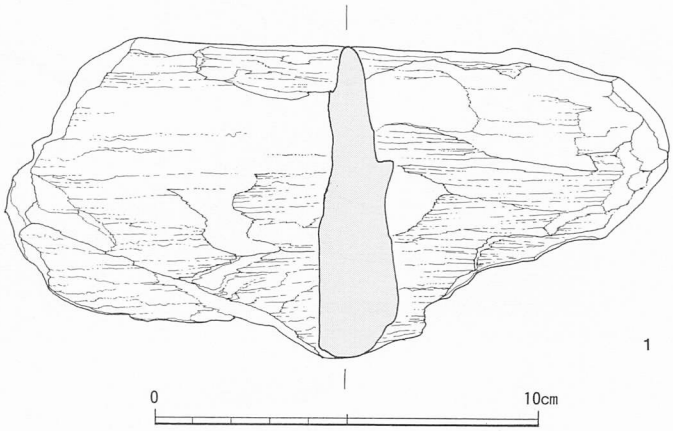

Fig. 140　SD－3 出土遺物実測図 5（縮尺 1 / 2）

Fig. 141－1～5は土師器の皿である。いずれも外底面に回転糸切り離し痕が残る。5は底径から皿と考

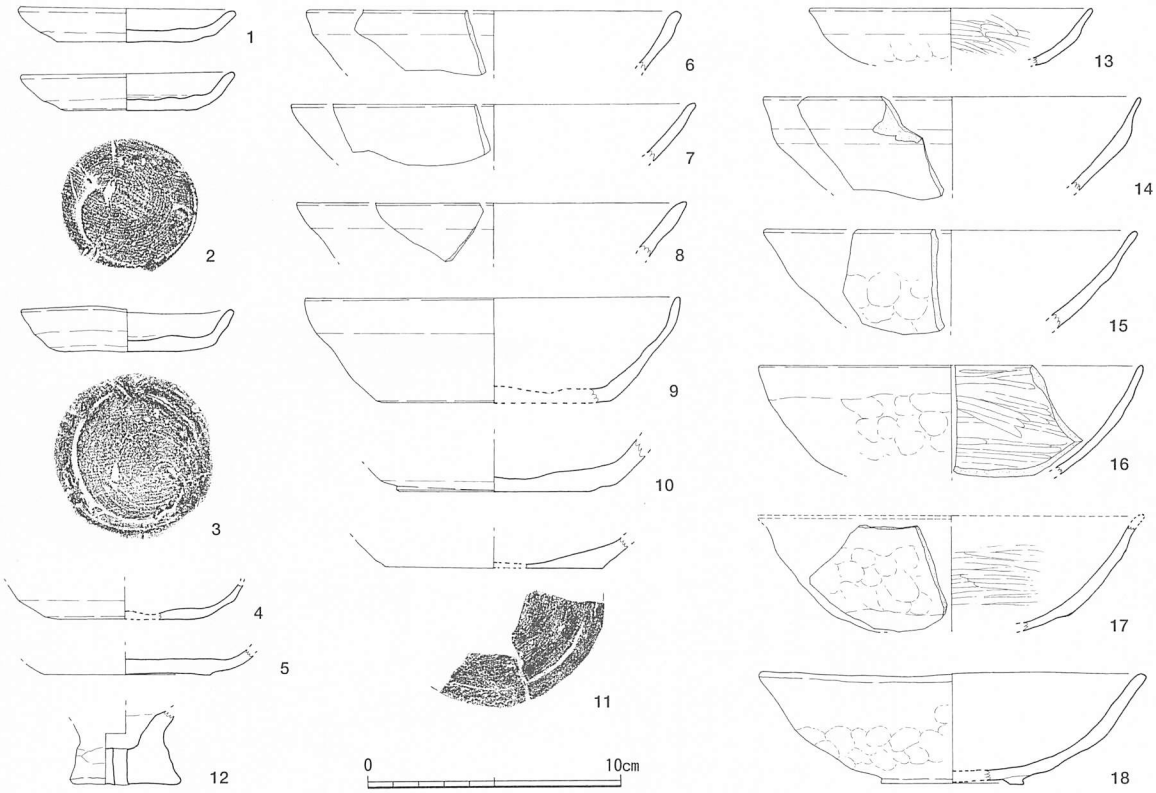

Fig. 141　SD－3最下部粗砂層出土遺物実測図1（縮尺1/3）

えたが、胴部の立ち上がり方から坏の可能性も残す。6～11は土師器坏。底部破片では回転糸切り離し痕を観察できる。Fig. 141-12は、柱状高台土器。外底面は回転糸切り離し。他は回転横ナデ。底部には焼成前に内側から穿孔を施している。Fig. 141-13は瓦器の皿。胴部下半には型押し痕が残る。15～18は、瓦器碗である。16・17の内面には暗文風のミガキが施される。いずれも型当て痕が胴部下半に残されている。

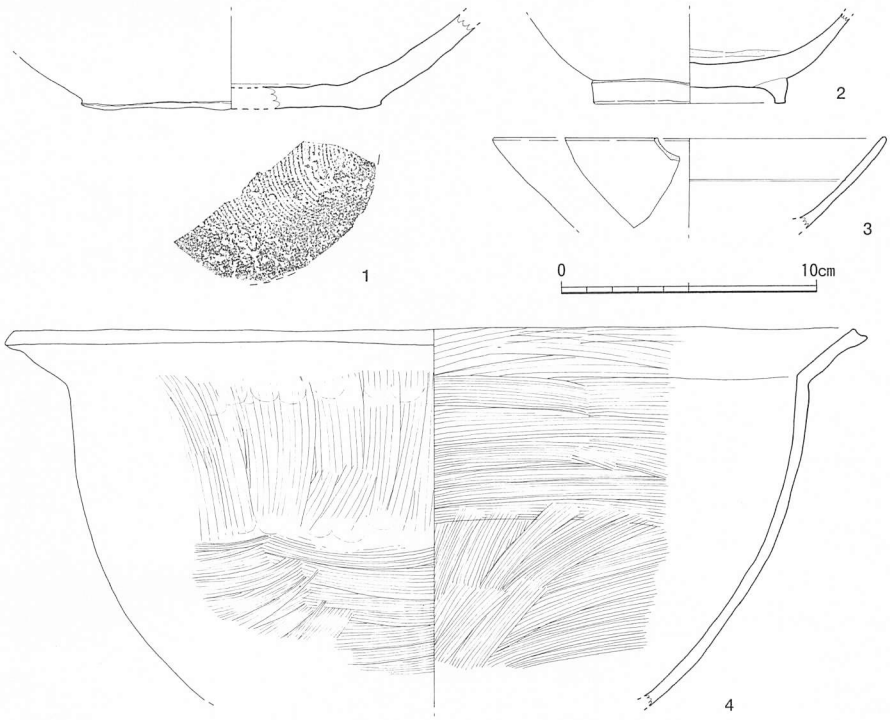

Fig. 142　SD－3最下部粗砂層出土遺物実測図2（縮尺1/3）

Fig. 142－1・2は須恵質土器。1はコネ鉢で、外底面には糸切り離し痕が残る。2は内底面に目跡が輪状に残るので、高台付き椀としたが、碗にすると器壁が厚く、他の器種である可能性が残る。3は中国白磁の碗。内面にはごく細く浅い沈線が1条巡る。4は土師質土器の鍋である。内外

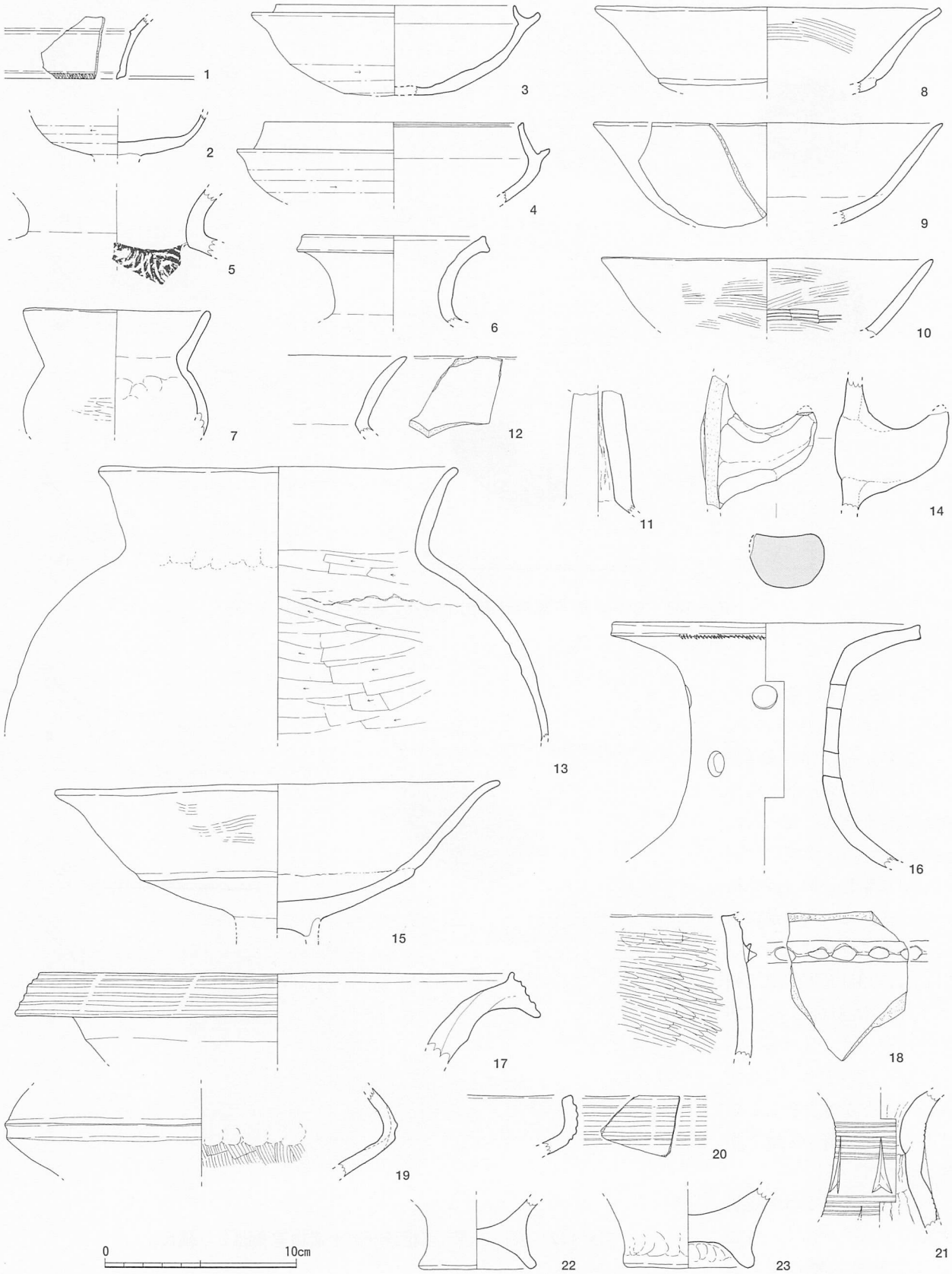

Fig. 143　SD-３最下部粗砂層出土遺物実測図３（縮尺１/３）

面ともにハケメ調整、口縁部外面は横ナデ調整を施す。

この他、古墳時代後期の須恵器（Fig. 143-1～6）、土師器（Fig. 143-12～14）、古墳時代中期の土師器（Fig. 143-7～11）、弥生時代後期（Fig. 143-15・16）と中期（Fig. 143-17～21）の土器がある。詳細は巻末の遺物観察表を参照されたい。また、碗形鉄滓（Fig. 139-2）が出土している。

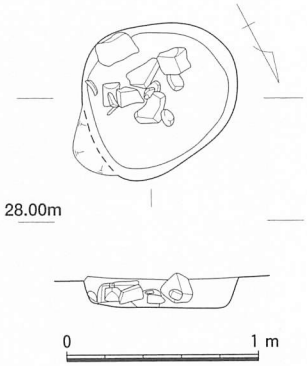

Fig. 144　SK-19遺構実測図（縮尺1/40）

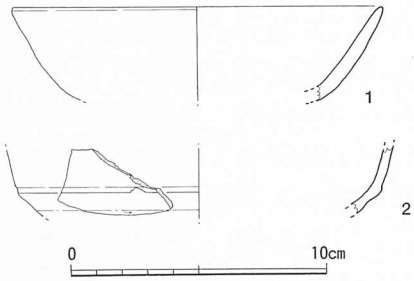

Fig. 145　SK-19出土遺物実測図1（縮尺1/3）

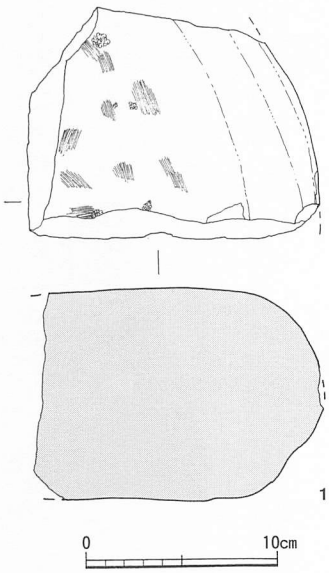

Fig. 146　SK-19出土遺物実測図2（縮尺1/4）

（3）土壙

SK-19号土壙（Fig. 144）

DC・DD-11区のSD-3を切り込んで掘られた不整円形の土壙である（Fig. 144）。調査時にはSK-569としていたが、調査後に欠番であったSK-19に振り替えた。

長径88cm、短径80cm、深さ15cmを測る。東側の壁の上部が部分的に崩れている。埋土は砂礫が多く混じる灰色みが強い暗褐色砂質土である。

土壙内には、礫質砂岩の扁平な円礫を利用した台石（Fig. 146）、長さ15cm、幅12cm、厚さ2～5cmの砂質砂岩の小判状の円礫、長さ20～25cm、厚さ5cmの扁平な花崗閃緑岩、径10cmほどの花崗岩の球状の円礫などが詰まる。これらの礫石に混じって、小片～細片であるが、古代～中世や古墳時代や弥生時代の遺物が出土している（Fig. 145）。その中には、SD-3の埋土から出土した破片と接合復元できる遺物が含まれる。いずれもSD-3からの混入品である。

SD-3を切り込んでいることや、灰色みが強い埋土であることから、SK-19は近世以降の土壙と判断した。

（4）柱穴・小穴

SP-510（Fig. 72・131）

DD-15区に位置し、SC-17・37を切る（Fig. 72）。径36～38cm、深さ6cmの掘り形の中で、径14cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は黒褐色シルトで、軟らかい黄褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる。掘り形埋土の②層は黒褐色シルトで、径2cmほどの丸い黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。①・②層ともに小礫は混じらない。

埋土中から、土師器もしくは弥生土器の胴部細片6点、古代～中世の土師器の碗もしくは皿の口縁部（Fig. 131-19）が出土している。

SP-528（Fig. 129・131）

DC-12・13区に位置し、SD-2を切る。長径57cm、短径46cm、深さ19cmの不整な長円形の掘り形の中に、南側から斜めに打ち込まれた径12cmの杭痕跡を確認できた（Fig. 129）。

杭痕跡の①層は径3～5㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、褐色シルトのレンズ状ブロックがごく少量みられる。掘り形埋土の②・③層は砂礫が多く混じる暗褐色砂質土。④層は褐色シルトである。

掘り形埋土中から、古墳時代後期の須恵器の坏身（Fig. 131-28）、土師器の甕口縁部（Fig. 131-29）、弥生時代中期の甕底部（Fig. 131-30）、胴部の小片が出土している。

SP-529（Fig. 129・131）

DC-12・13区に位置し、SD-2を切る。長径64cm、短径59cm、深さ17cmの略円形の掘り形の中で、径13cmの杭痕跡を確認できた（Fig. 129）。

杭痕跡の①層は、径3～5㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土。掘り形埋土の②層は、径2～4㎜の礫が多く混じる暗褐色砂質土で、褐色砂質シルトのレンズ状ブロックがやや多くみられる。③層も同様であるが、わずかに粘性をおびる。

掘り形埋土から、古代の瓦器碗（Fig. 131-31）、古墳時代後期の須恵器の大甕頸部、弥生時代後期の壺底部（Fig. 131-32）、径5㎜の細長い炭化物片、径2～3㎜の粒状の炭化物片が出土している。

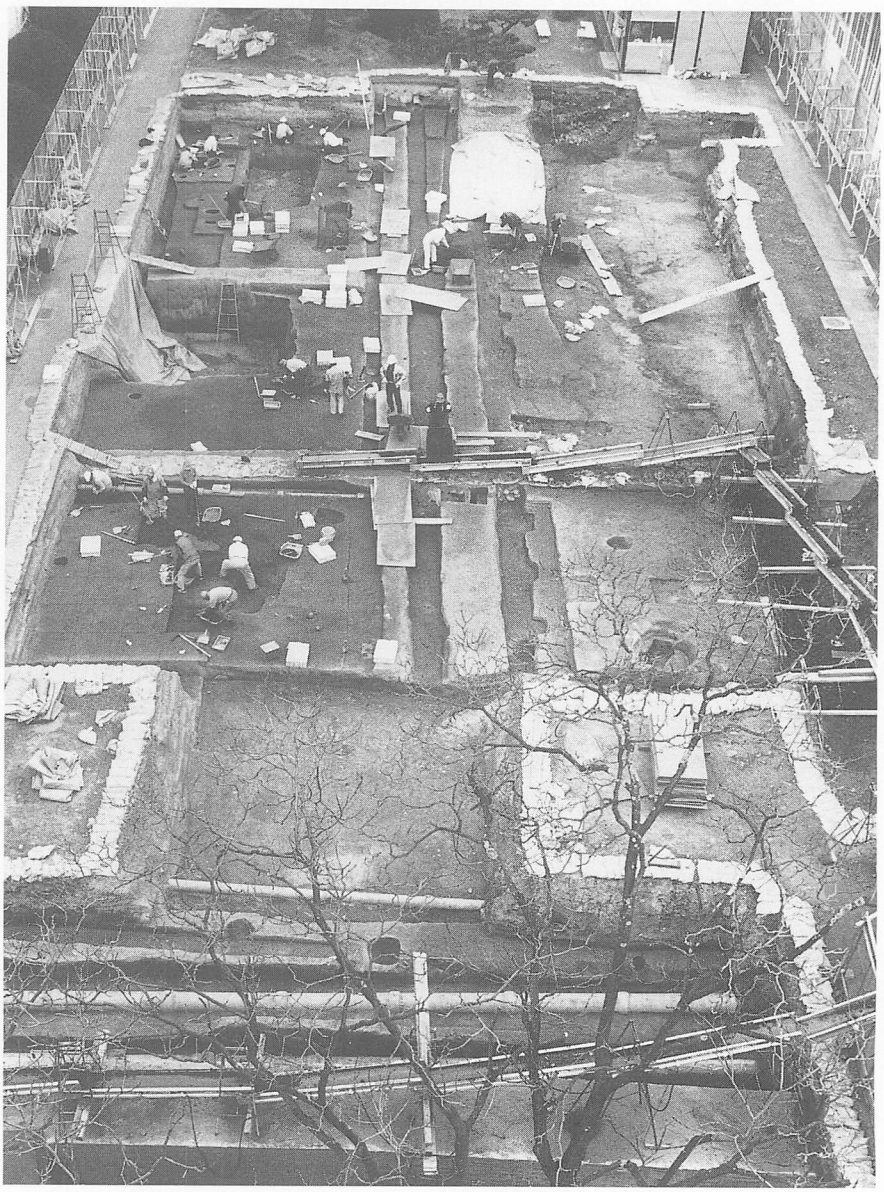

Fig. 147　13次調査風景（西から）

4　Ⅲ層出土の遺物

Ⅲ層を掘り下げ中、多くの遺物が出土した。遺構上部のⅢ層から出土した遺物は、遺構に伴う可能性があるので、個々の遺構の報告を行う中で報告した。ここでは、その他のⅢ層から出土した遺物を報告する。古代～中世の土師器・黒色土器・瓦器、古墳時代の土師器・須恵器、弥生土器、そして石器・石製品、鉄器・鉄滓がある。

古代～中世の遺物は少ない（Fig. 148）。その中で、1の土師器坏と4の瓦器碗は、CZ-14-17区でかたまって出土している。何らかの遺構があったことが考えられる。この他は、SD-3の検出時に出土した遺物でSD-3に伴う可能性が高い。

古墳時代の須恵器・土師器は、比較的残存状態がよい遺物が含まれている（Fig. 149）。その中で、11・14・23・25はSD-3の最上面にあたるⅢ層部分から出土した遺物である。23の小型丸底壺と25の甕は古墳時代中期、他は古墳時代後期に比定できる。古墳時代後期の須恵器では、2・10・22の赤焼け須恵器や、11・17・19の焼け歪み品が目立つ。

弥生土器も、既に報告したSX-48・73を除いて、まとまった出土状況をみせない（Fig. 150）。弥生時代中期後葉の甕・壺・鉢・高坏などが多い。その中で、1の壺の肩部には2段に列点文が巡らされる。9は深鉢型鉢のミニチュア土器、11はジョッキ形土器の把手である。また、4・5は他と比べて古い様相をもち、中期中葉～後葉に比定できる。3・12は後期中葉～後葉のものである。

以上、詳細は巻末の遺物観察表を参照されたい。

土製品には、土錘（Fig. 152-1）がある。

石器・石製品には、石庖丁（Fig. 151-1・2、Fig. 152-8～11）、磨製石鏃（Fig. 152-5）、打製石鏃（Fig. 152-6・7）、磨製石斧（Fig. 153-1）、不明磨

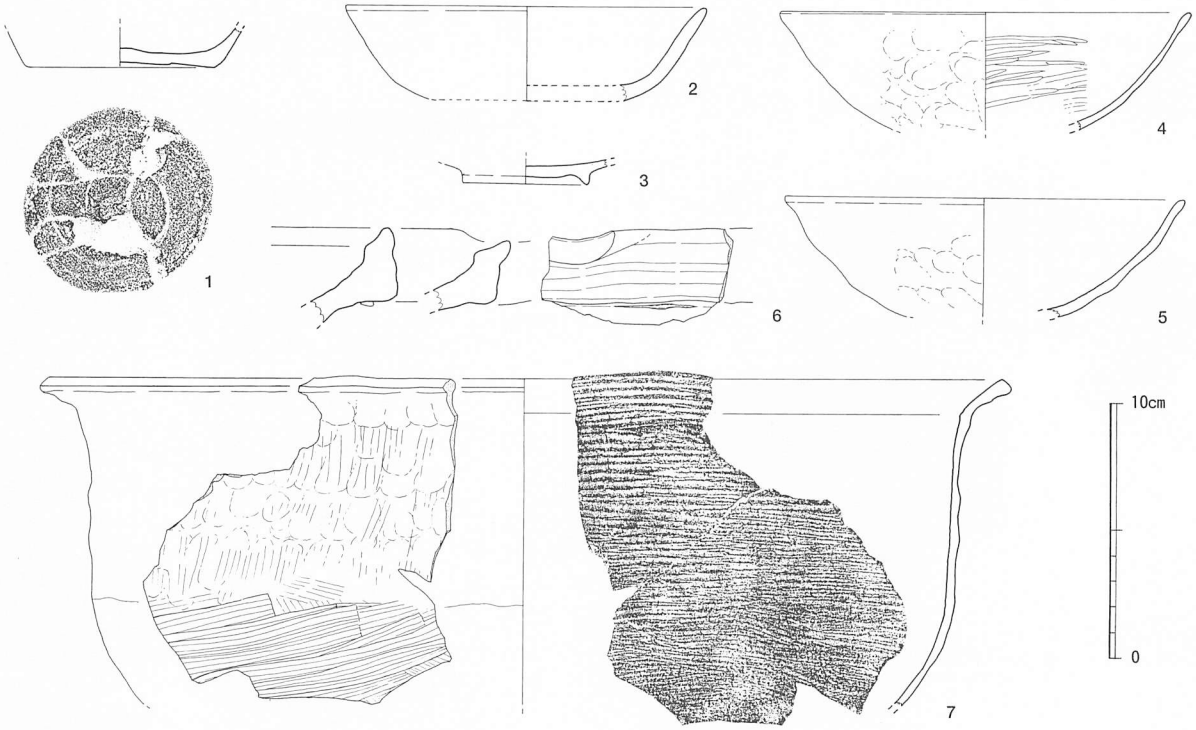

Fig. 148　Ⅲ層出土遺物実測図1（縮尺1/3）

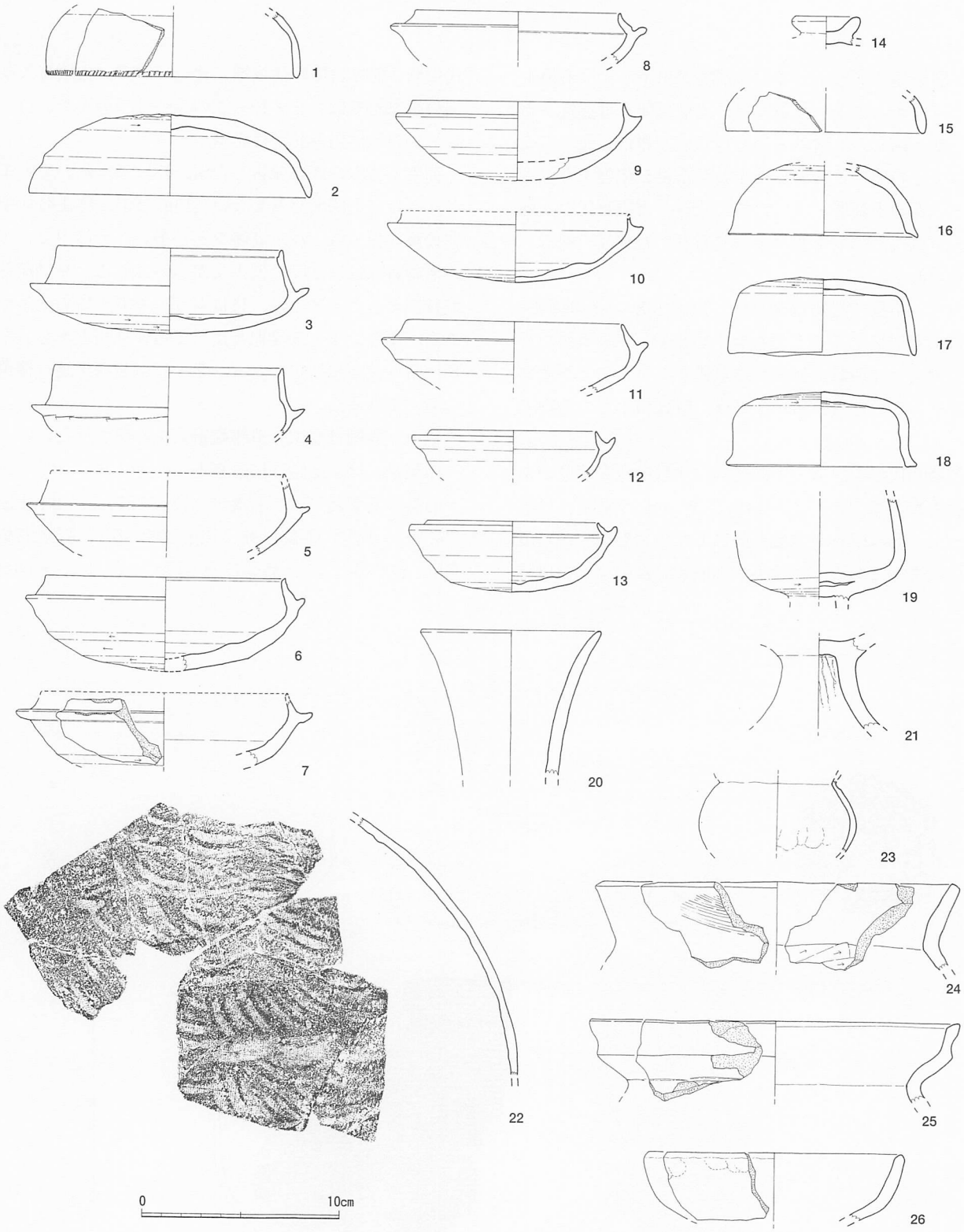

Fig. 149　III層出土遺物実測図２（縮尺１/３）

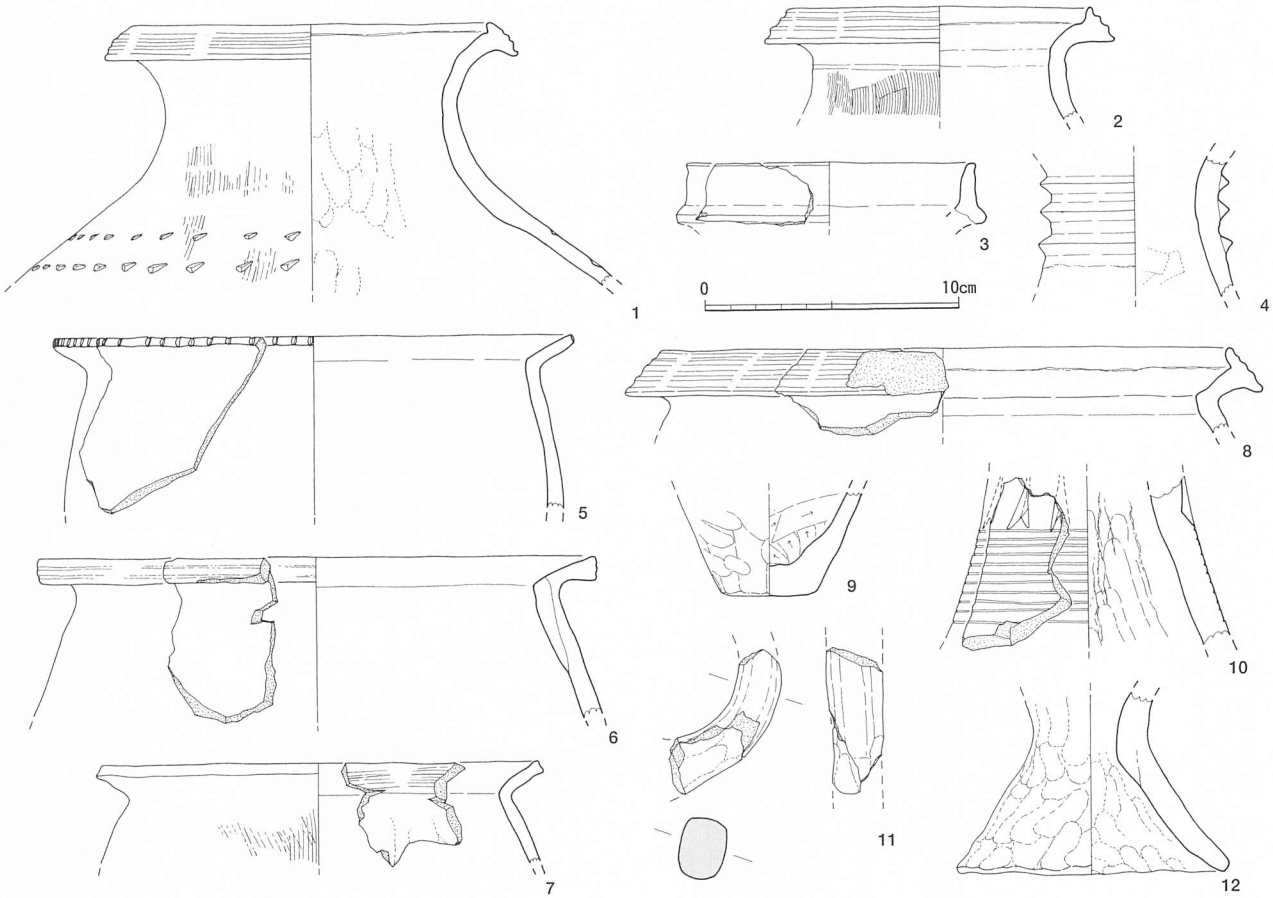

Fig. 150　Ⅲ層出土遺物実測図３（縮尺１/３）

製石器（Fig. 153-２）、石製投弾（Fig. 152-３）、石製円盤（Fig. 152-２）、砥石（Fig. 155-１）、敲石（Fig. 151-３、Fig. 155-４・５）、磨石（Fig. 155-２・３）、サヌカイトのスクレーパー（Fig. 153-３～５）、緑色片岩の石片（Fig. 151-４～10、Fig. 154-４～７）、サヌカイトの石片（Fig. 154-１～３）がある。弥生時代中期後葉～後期前葉を中心とする時期、もしくは古墳時代後期に伴う石器および石製品であるが、個々の詳細な時期は確定できない。

その中で、DG-17-６区では、１m四方のⅢ層中部～下部から、石庖丁２点、敲石１点、緑色片岩の石片が集中して出土した（Fig. 151-１～10）。１は杏仁形石庖丁で、両側の抉り部は剝離調整を施したままであり、最終仕上げ段階の未成品と考えられる。また、２も石庖丁の欠損品。３は敲石。４～10は緑色片岩の石片で、片面に自然風化面を残し、厚さ４～11㎜で、石庖丁の製作残滓と考えられる。石庖丁の製作に関わる遺構の存在が推定されるが、Ⅳ層上面では掘り込み等は確認できなかった。

鉄器には、ヤリガンナと考えられる破片（Fig. 156-１）、小さな三角形の板状の鉄器（Fig. 156-２）、細い棒状の鉄器（Fig. 156-３）がある。この他、CX-3-25区Ⅲ層上部、CZ-14-14区Ⅲ層上部で鉄片１点、DB-13-9区Ⅲ層中部で薄い板状の鉄片、CY-15-５区Ⅲ層上部、DG-15-6区Ⅲ層で直径５㎜の細い棒状の鉄器片が出土している。しかし、いずれも細片化しており図示できなかった。

また、鉄滓の残片（Fig. 156-４～10）が点々と出土している。その中には、椀形滓の破片（９・10）も含まれる。推定径は径７～10㎝である。この他、図示していないが、CZ-14-10区Ⅲ層中部、CZ-14-14区Ⅲ層最下部、CZ-14-18区Ⅲ層上部、DC-14-24区Ⅲ層中部、DB-14-20区Ⅲ層上部で、小指先大の鉄滓小片が出土している。

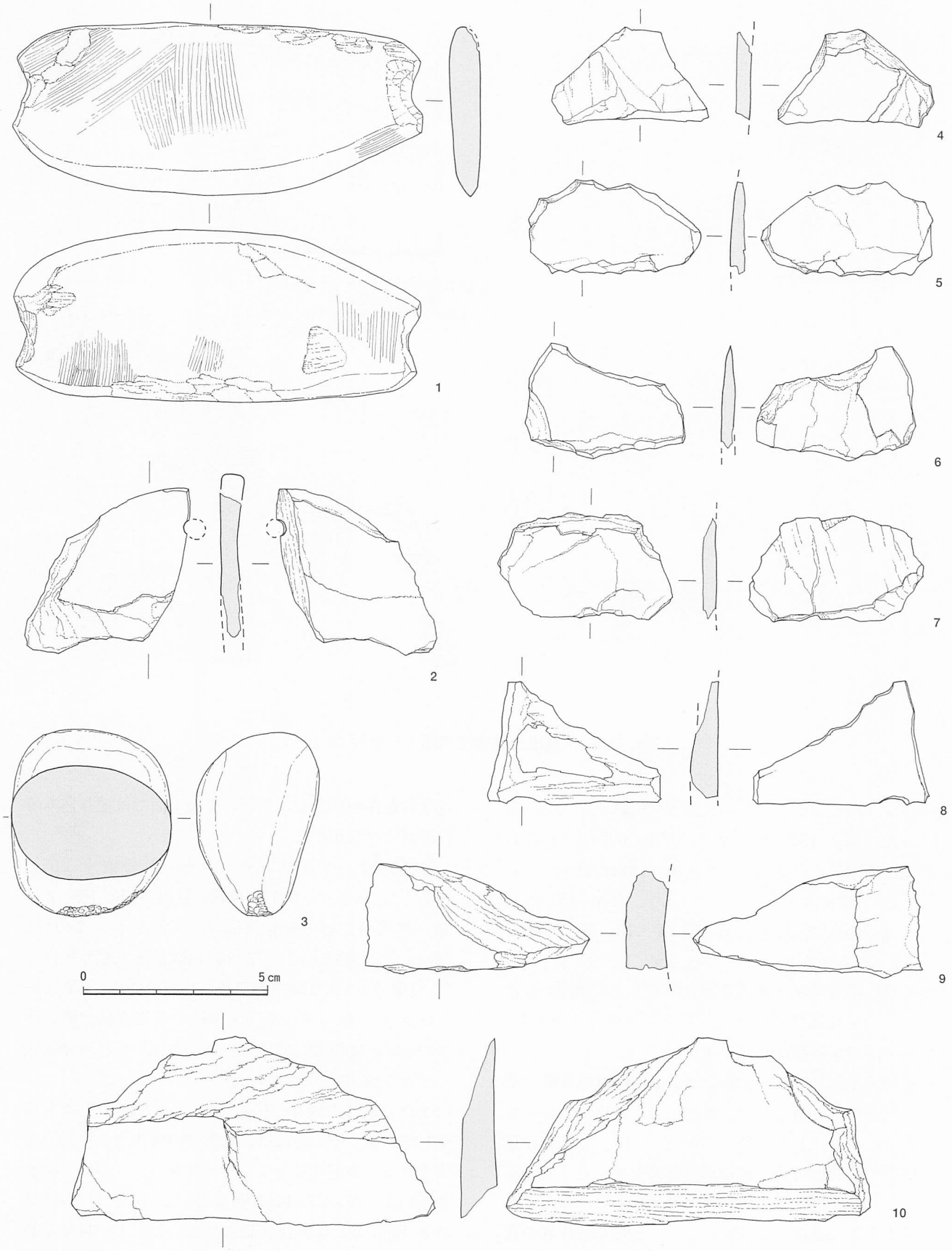

Fig. 151　III層出土遺物実測図４（DG-17-６区、縮尺２/３）

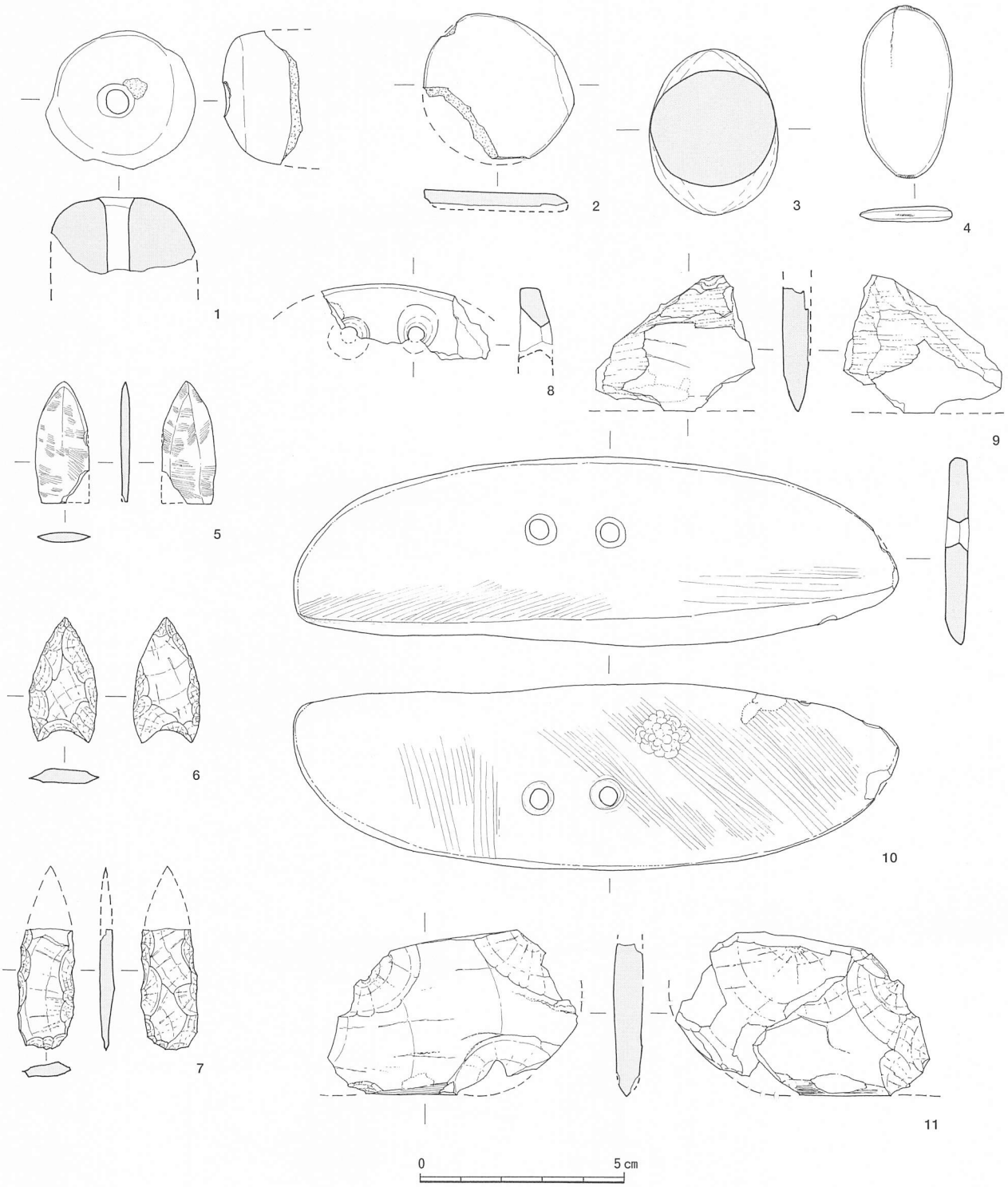

Fig. 152　Ⅲ層出土遺物実測図５（縮尺２/３）

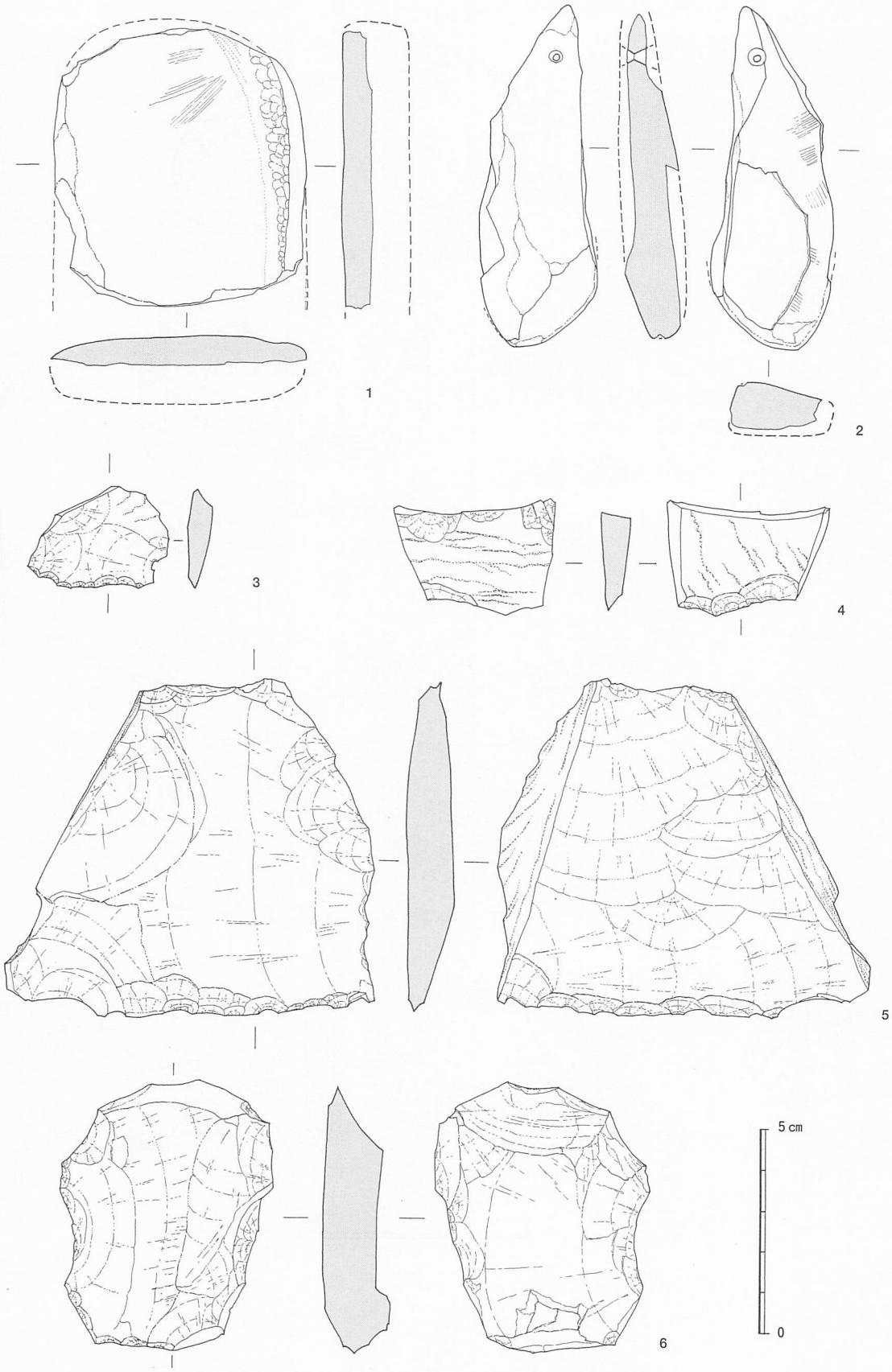

Fig. 153　III層出土遺物実測図 6（縮尺 2 / 3）

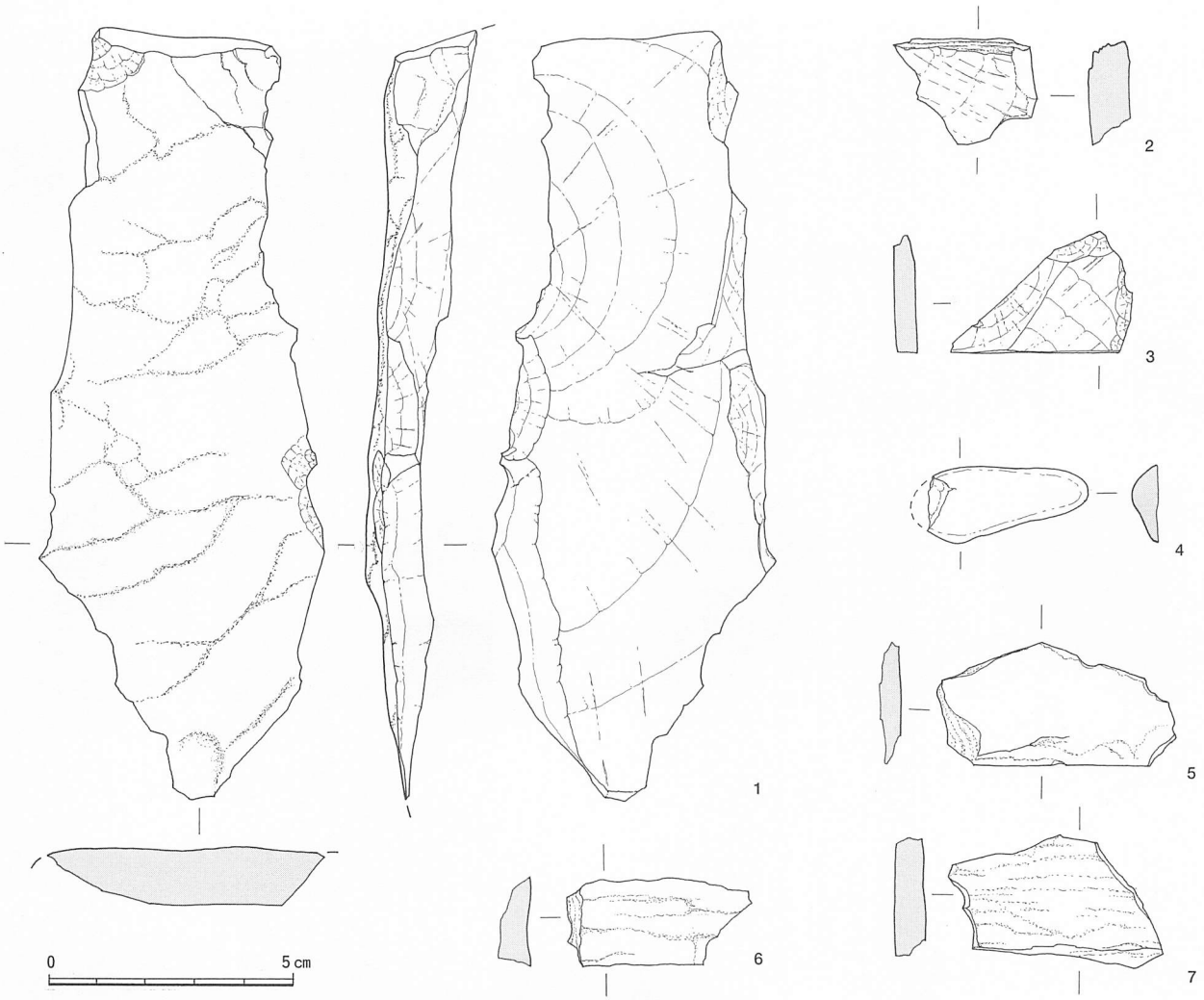

Fig. 154　Ⅲ層出土遺物実測図７（縮尺 2/3）

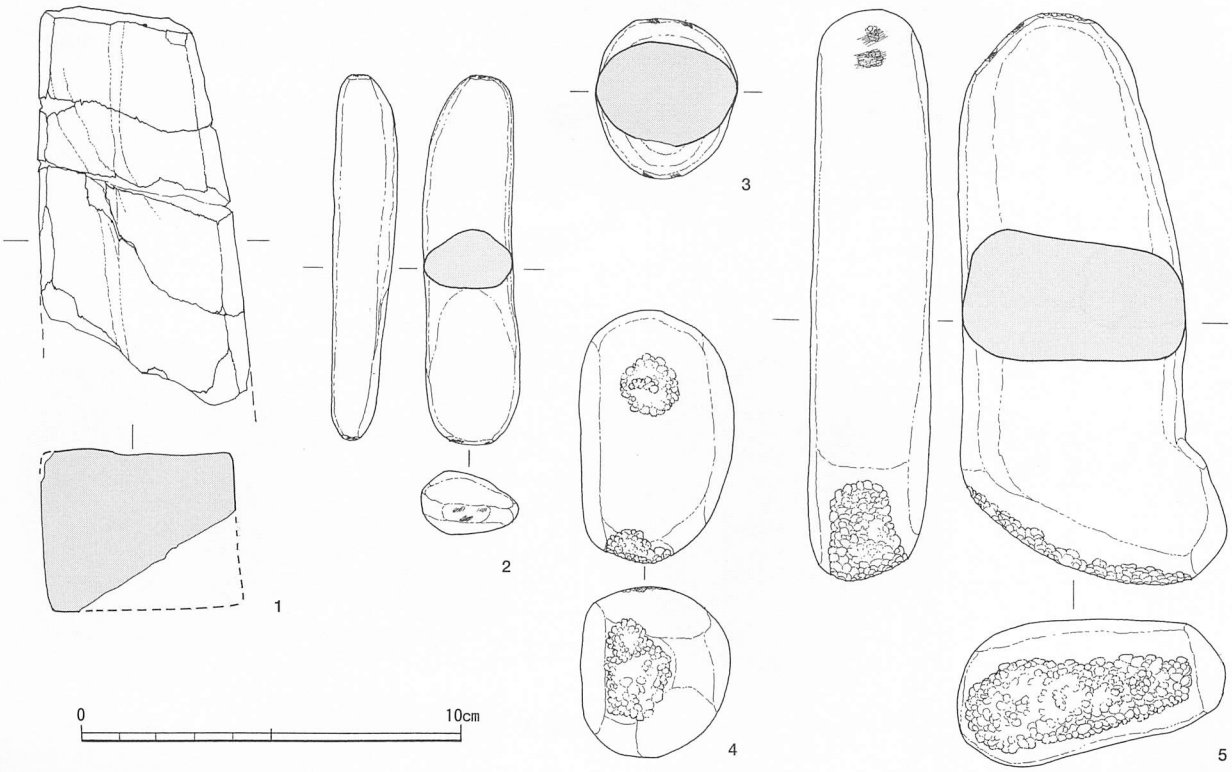

Fig. 155　Ⅲ層出土遺物実測図８（縮尺 1/2）

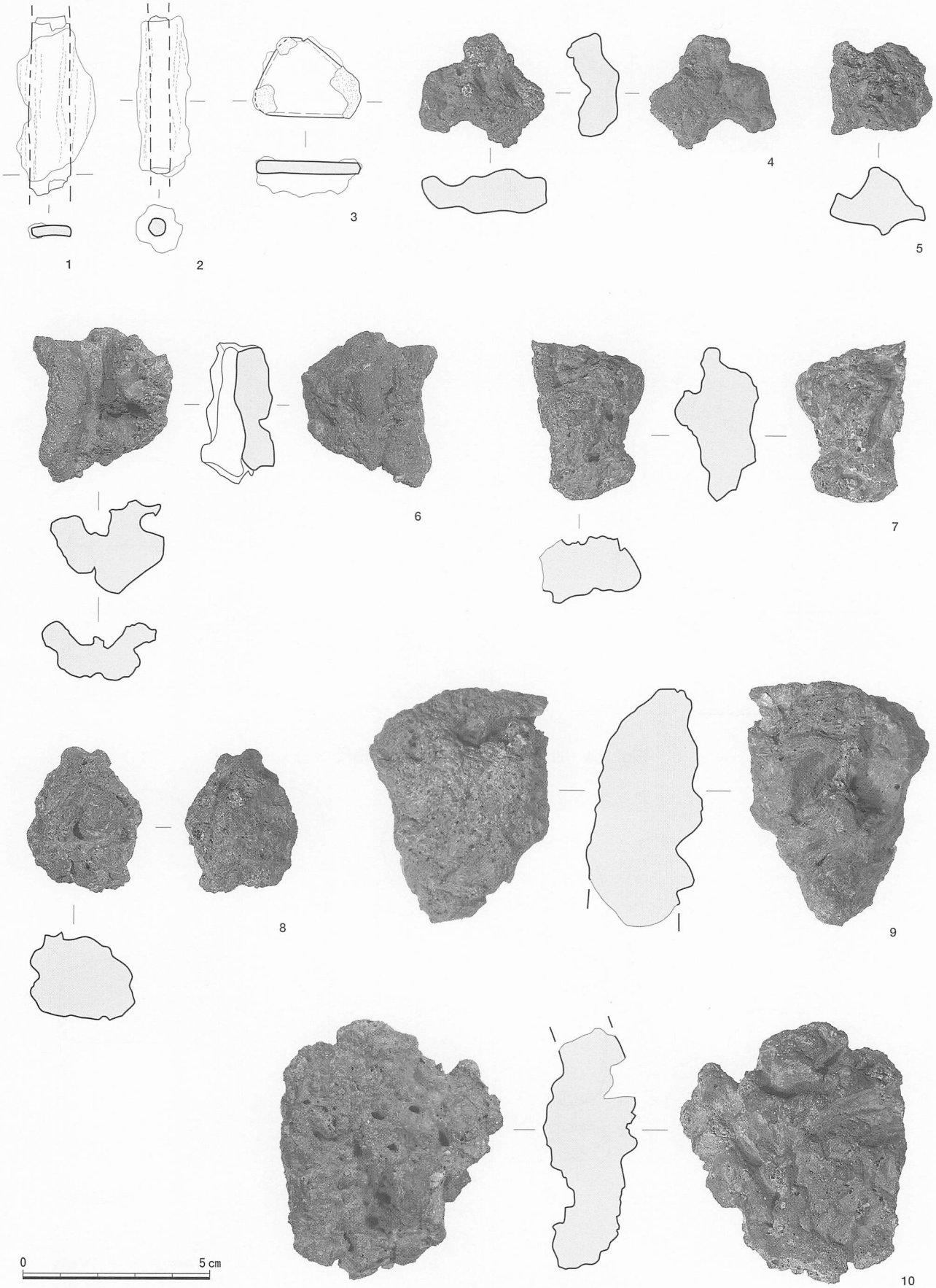

Fig. 156　III層出土遺物実測図 9（縮尺 2 / 3）

Ⅳ　自然遺物の同定と検討

今回の調査では、弥生時代の遺構の埋土に炭化物や焼土が多く混じり、古墳時代後期の遺構からは鉄滓が点々と出土するとともに鍛冶炉と考えられるSF-41が発見された。そのため、遺構の埋土を水洗選別し、食物残滓や鍛冶にかかわる微細鉄片をできるだけ採取することとした。その結果、多くの炭化種子や炭化材、獣歯骨、鉄滓を確認できた。その一部についての同定を㈱古環境研究所に委託して実施した（Tab. 3）。

以下は、㈱古環境研究所による自然遺物の同定結果報告である。

Tab. 3　自然遺物同定一覧

遺　構	出土部位	試料No.	内　容		時　代	備　考
SC-8内 SK-126	焼土部分	1	炭化種実	オオムギ	弥生後期初頭	SK-126はSC-8の炉跡
	埋土	5	炭化種実	イネ	〃	
	南半部分埋土	11	炭化種実	イネ	〃	
	北半部分埋土	13	炭化種実	イネ	〃	
	〃	14	炭化種実	ブドウ属	〃	
SC-14	南壁沿い貼り床部	139	動物骨	ウマ　臼歯上顎	古墳後期	
SC-18	貼り床部底面	140	動物骨	ウマ　臼歯上顎	古墳後期	
SC-25	竈部分	42	炭化材	マツ属	古墳後期	
SC-28	土層観察ベルト埋土	77	炭化種実	イネ	古墳後期	
	〃	78	炭化種実	イネ	〃	
SC-30	土層観察ベルト埋土	84	炭化種実	イネ	古墳後期	
	土層観察ベルト貼り床部	90	炭化種実	イネ	〃	
SC-39	床面直上	98	炭化材	マツ属	古墳後期	
SC-40	埋土上部	101	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	弥生後期初頭	
	〃	103	炭化種実	イネ	〃	
	埋土中部	104	炭化種実	イネ	〃	
	〃	105	炭化種実	イネ	〃	
	埋土下部	108	炭化材	ヤマグワ	〃	
	〃	109	炭化種実	イネ	〃	
	〃	112	炭化種実	イネ	〃	
	〃	113	炭化種実	イネ	〃	
SK-1	埋土	117	炭化材	クマシデ属イヌシデ節	古墳後期	
SK-81	焼土	121	炭化材	ヤマグワ	古墳中期	旧SP-348
	〃	135	炭化種実	イネ	〃	旧SP-349
SK-89	埋土	127	炭化種実	イネ	古墳後期	旧SP-558
	〃	133	炭化材	サクラ属	〃	
SX-66	焼土	57	炭化材	コナラ属コナラ亜属	古墳後期	
	〃	62	炭化材	マツ属	〃	
	〃	64	炭化材	サクラ属	〃	
	〃	66	炭化材	マツ属	〃	
	〃	67	炭化種実	オオムギ	〃	
	〃	68	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	〃	
SX-67	焼土	49	動物骨	タイ科　遊離歯	古墳後期	
	〃	53	炭化材	シイ科	〃	
SX-68	焼土	92	炭化種実	イネ	古墳後期	
	〃	94	動物骨	マダイ　歯骨・椎骨	〃	
	〃	95	動物骨	タイ科　遊離歯	〃	
SX-69	焼土	55	炭化材	コナラ属コナラ亜属	古墳後期	
	〃	71	炭化種実	イネ	〃	
	〃	72	炭化材	サクラ属	〃	
	〃	74	炭化種実	イネ	〃	
	〃	75	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	〃	
SP-392	埋土	123	炭化種実	イネ・オオムギ	弥生	
Ⅲ層	DA-12-23区中部	137	炭化材	ヤマグワ		
〃	DA-12-23区中部	137	動物骨	ウシorウマ　臼歯		
〃	DA-13-3区中部	138	動物骨	ウシ　臼歯		
〃	DC-15-10区下部	141	動物骨	ウマ(?)　臼歯上顎		

1　出土種実

（1）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

（2）試料

分析試料は、SC-08内のSK-126（試料１、５、11、13、14）、SC-28（試料67、71、74、77、78）、SC-30（試料84、90、92）、SC-41（試料103、104、105、109、112、113）、SK-123（試料123）、SP-558（試料127）、およびSP-349（試料135）から出土した水洗選別済の種実である。

（3）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

（4）結果

①分類群

分析の結果、樹木１、草本２の計３分類群が同定された。学名、和名および粒数をTab.4に示し、主要な分類群を写真に示す（Pl. 28-１）。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

ブドウ属　*Vitis*　種子（炭化）

ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある（Pl. 28-２-①）。

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa* L.　果実（炭化）

イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る（Pl. 28-２-②～④）。

オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　果実（炭化）

イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である（Pl. 28-２-⑤～⑧）。

Tab. 4　文京遺跡13次調査出土種実同定結果

遺構	時期	試料	Arbor	Herb		Total
分類群		学名	*Vitis*	*Oryza sativa* L.	*Hordeum vulgare* L.	合計
		和名	樹木	草本		
			ブドウ	イネ	オオムギ	
		部位	炭化種子	炭化果実	炭化果実	
SC-８内 SK-126	弥生後期初頭	No. 1			1	1
		No. 5		2		2
		No. 11		2		2
		No. 13		6		6
		No. 14	1			1
SX-66	古墳後期	No. 67			1	1
SX-69	古墳後期	No. 71		1		1
		No. 74		1		1
SC-28	古墳後期	No. 77		2		2
		No. 78		2		2
SC-30	古墳後期	No. 84		16		16
		No. 90		7		7
SX-68	古墳後期	No. 92		4		4
SC-40	古墳後期	No. 103		1		1
		No. 104		4		4
		No. 105		14		14
		No. 109		8		8
		No. 112		6		6
		No. 113		8		8
SP-392	弥生	No. 123		1	1	2
SK-89	古墳後期	No. 127		4		4
SK-81	古墳中期	No. 135		3		3

（5）所見

分析の結果、SC-08内SK-126の試料１、SC-28の試料67、SK-123の試料123の３点はオオムギ、SC-08内SK-126の試料14はブドウ属と同定され、その他の試料はすべてイネと同定された。

〔文献〕

・笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p. 131-139.
・南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p. 165-174.
・南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276-283.
・吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナルNo. 355，ニューサイエンス社，p. 2-14.
・渡辺誠（1975）縄文時代の植物食．雄山閣，187p.

2　出土樹種

（1）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（2）試料

分析試料は、SC-25、SC-28、SC-39、SC-41、SK-01、SP-348、SP-558、Ⅲ層中部から出土した17点の炭化材である。

（3）方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（4）結果

Tab. 5に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す（Pl. 29・30）。以下に同定根拠となった特徴を記す。

①マツ属複維管束亜属

Pinus subgen. *Diploxylon*　マツ科（Pl. 29-①）

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

②クマシデ属イヌシデ節

Carpinus sect. *Carpinus*　カバノキ科（Pl. 29-②）

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は、同性で１～３細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

③シイ属　*Castanopsis*　ブナ科（Pl. 29-③）

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保

Tab. 5　文京遺跡13次調査出土樹種同定結果

試料 No.	出土遺構	時　期	結果（学名／和名）	
42	SC-25	古墳後期	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
53			*Castanopsis*	シイ属
55	SC-28	古墳後期	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属
57			*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属
62			*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
64			*Prunus*	サクラ属
66			*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
68			*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
72			*Prunus*	サクラ属
75			*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
98	SC-39	古墳後期	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
101	SC-40	弥生後期初頭	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
108			*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
117	SK-1	古墳後期	*Carpinus* sect. *Carpinus*	クマシデ属イヌシデ節
121	SK-81	古墳中期	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
133	SK-89	古墳後期	*Prunus*	サクラ属
137	III層中部		*Morus australis* Poiret	ヤマグワ

存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツブラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は小片で広範囲の観察が困難であったことから、シイ属の同定にとどめた。

④コナラ属コナラ亜属

Quercus subgen. *Lepidobalanus*　ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部には小道管が見られるが不明瞭である。早材部から晩材部にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の形質より、コナラ属コナラ亜属に同定される。コナラ属コナラ亜属にはコナラ節とクヌギ節があり、小道管の形および配列などにより同定できるが、本試料は小片で保存状態が悪く、細部までの観察が困難であったことから、コナラ属コナラ亜属の同定にとどめた。コナラ属コナラ節には、カシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラなどが、コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがある。落葉高木で、高さ15m、径60cm程度に達する。材は強靱で弾力に富み、建築材、器具、農具などに用いられる。

⑤コナラ属アカガシ亜属

Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科（Pl. 30-①）

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

⑥ヤマグワ

Morus australis Poiret　クワ科（Pl. 30-②）

横断面：年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。

道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の１～３細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面：放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、１～６細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は堅硬、靭性に富み、建築などに用いられる。

⑦サクラ属 *Prunus*　バラ科（Pl. 30-③）

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

（５）所見

分析の結果、マツ属複維管束亜属４点、コナラ属アカガシ亜属３点、サクラ属３点、ヤマグワ３点、コナラ属コナラ亜属２点、クマシデ属イヌシデ節１点、シイ属１点が同定された。

〔文献〕

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p. 242

3　出土動物遺存体同定

（１）はじめに

一般に日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存条件には恵まれていない。このため、遺跡で動物遺存体が出土するのは、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されつつある。一方、乾燥した沖積地遺跡では、ほとんどの動物遺存体が長い年月の間に腐食して土に還ってしまっているが、動物の歯、特にエナメル質は、動物骨格の中でも腐食に強く、大きく堅固なウシやウマの臼歯のエナメル質が乾燥環境から出土する例も珍しくない。また、微細な魚骨の歯のエナメル質は、発掘中に肉眼で採集することは不可能で、遺構の埋土を１ミリ以上のフルイの面上で洗うことが必要である。こうした哺乳類の歯のエナメル質、灰化して無機質化した微細な魚骨から種類を同定し、その生態的情報を援用して当時の環境を復元したり、過去の人々の生業や食生活を知ることができる。

（２）試料

試料は、SC-25、SC-30、Ⅲ層中部、SC-14、SC-18、Ⅲ層下部から出土した８点の魚類・動物の歯である。

（３）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。

（４）結果

①分類群

分析の結果、タイ類の椎骨と遊離した歯、マダイの歯骨、およびウマやウシの臼歯のエナメル質が同定された。分析結果をTab. 6に示し、主要な分類群を写真に示す（Pl. 31-32）。

Tab. 6　文京遺跡13次調査出土動物遺存体同定結果

試料No.	出土遺構	時　期	小分類	学名	種　類	部　　位	部　　分	備　　考
49	SX-67	古墳後期	タイ科	Sparidae	魚　類	遊離歯		
94	SX-68	古墳後期	マダイ	*Pagrus major*	魚　類	歯骨（左）・椎骨		左歯骨
95	SX-68	古墳後期	タイ科	Sparidae	魚　類	遊離歯	歯骨	
137	Ⅲ層		ウシorウマ	Bos taurus or Equus cabalus	哺乳類	臼歯	エナメル破片	
138	Ⅲ層		ウシ	Bos taurus	哺乳類	臼歯	臼歯エナメル破片・未萠出	３本分
139	SC-14貼り床	古墳後期	ウマ	*Equus cabalus*	哺乳類	臼歯上顎	P４M１（左）	第４前臼歯と第１後臼歯
140	SC-18貼り床	古墳後期	ウマ	*Equus cabalus*	哺乳類	臼歯上顎	エナメル破片	２本分
141	Ⅲ層		ウマ（？）	*Equus cabalus*	哺乳類	臼歯上顎	未萠出	１本分

〔魚類〕

タイ科　Sparidae　遊離歯（試料49、95、Pl. 31-①）

マダイ　*Pagrus major*　歯骨、椎骨（試料94）

椎骨は腹椎に近く、現生標本との比較によりその大きさは、体長約40cm位の大型のものである（Pl. 31-②・③）。

〔哺乳類〕

ウマ　*Equus cabalus*　臼歯（試料139、140）

ウマの左上顎第四前臼歯（PM4）を同定した。ウマの前臼歯（小臼歯）と後臼歯（大臼歯）、特に第４前臼歯と第１後臼歯とは大きさや形状が酷似し、その他の部位であってもエナメル質の破片だけからは、種名の同定も困難な場合がある（Pl. 31-⑥、32-①・②）。

ウシ　*Bos Taurus*　（試料138）

下顎臼歯のエナメル質破片が３個体分出土している。そのうち一例は比較的残存状態が良く、咬頭の先端が丸いままで咬合面の咬耗は見られない。したがって、この臼歯の上には乳臼歯が残り、歯槽内で成長中の段階だったと考えられる。他のエナメル破片も同一個体と思われるが、部位の決定はできなかった。この個体の年齢は永久歯が生え揃う以前の2.5歳未満と思われる（Pl. 31-⑤）。

ウシまたはウマ　（試料137、141）

未萠出で残存状態が悪いため、ウマ（？）あるいはウシorウマとした（Pl. 32-③・④）。

②動物遺存体の特徴

分析の結果、魚類ではタイ科の歯骨、椎骨、遊離歯が同定された。また、哺乳類ではウマとウシの臼歯破片が同定された。

タイ科には、マダイ、クロダイ、ヘダイ、チダイなどが含まれ、その前上顎骨や歯骨の咬合面には丸い小さな臼歯がびっしり生えている。この咬合面の臼歯が索餌の際などに遊離して脱落しても、前上顎、歯骨ともにその内部に多くの臼歯が生育しており、すぐに生え替わる。したがって、前上顎骨、歯骨とも、その内部の歯も考慮に入れると非常に多くの歯をもっているので、水洗選別で多くの遊離歯を得ることができたとしても、その本来の個体数を算定することは困難である。

哺乳類については、すべて歯のエナメル質の破片で、ウシ、ウマ、およびどちらとも同定できないものであった。ウシとウマのそれぞれ１例は、未萠出で乳歯がまだ残る段階の2.5－２歳以下の若い個体であったと考えられる。ウシの臼歯は３本が存在したが、その１例の咬耗面に摩耗が全く見られず未萠出であることから、おそらく2.5歳未満と考えられる。ウシorウマとしたものは、すべてエナメル質の破片だけで、歯を構成する他の象牙質、セメント質は残っておらず、上下の顎骨も消失し、エナメル質が土圧で破片となっていた。

〔文献〕

松井章（1997）「岡山城本丸中の段出土の動物遺存体」，「史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告」，岡山市教育委員会，p. 323-331.

松井章（1988）「中世のマダイ漁」，「草戸千軒」第182号草戸千軒町遺跡調査研究所，p. 6-7.

松井章（2000）「恒武西宮・西浦遺跡発掘調査報告書」，㈶静岡県埋蔵文化財研究所，p. 156-161.

V　調査のまとめ

1　弥生時代

今回の文京遺跡13次調査では、弥生時代中期後葉～後期前葉を中心とする遺構と遺物が出土している。その中で、注目すべき調査成果として、SC-８に伴って出土した炭化種子、SK-29から出土した土器焼成失敗品、調査区北端で出土した直径25～27cmと30cmの立柱痕跡を確認できたSB-51がある。それぞれの評価と、今後の文京遺跡の調査にかかわる問題点をまとめておく。

（１）SC-８出土の炭化種子

調査区南西隅のDG-12～14区で出土したSC-８は、直径約6.5mの弥生時代後期初頭の円形住居跡である。SP-129・130・133を主柱穴とする６本柱構造を復元できる。その中央には擂り鉢状に窪む不整楕円形のSK-126が位置し、炉跡と考えた。SK-126の南側には、床面に掻き出されたように焼土や炭化物片が多く混じる土層がみられた。そこで、これらの土層に混じる食物残滓を検出するために、埋土の水洗選別を行い、多くの炭化物片の出土を確認した。その中でも肉眼で炭化種子と考えられる資料を同定したところ、炭化米３点、炭化オオムギ１点、ブドウ属の炭化種子１点が同定された。これまでの文京遺跡の調査では12次調査SK-33・34号貯蔵穴で弥生時代中期末～後期初頭の土器とともに大量の炭化米が出土しているので、炭化米が出土することは予想していたが、炭化オオムギの出土は注目される。

弥生時代のムギ類は、福岡市板付遺跡の弥生時代前期初頭～前葉の環壕内から検出されたムギ類の花粉化石をはじめ、後藤直による弥生時代の炭化植物遺体の集計では、55遺跡（ムギ類13遺跡、コムギ15遺跡、オオムギ27遺跡）から出土している(註1)。イネが出土した259遺跡に対して、ムギ類の出土事例は少ないが、コメを補完する食物としてムギ類が栽培されていたことを知ることができる。今回のオオムギの出土によって、文京遺跡の弥生時代集落周辺に水田遺構だけではなく畑遺構が営まれていることを考え調査を進める必要が生じてきている。

（２）SK-29出土の土器焼成失敗品

SK-29は、残存長0.95m、幅1.45m、深さ15cmを測る長方形の土壙である。弥生時代後期前葉～中葉の土壙で、焼成破裂土器片と層状焼成破裂をおこした壺が出土した。

こうした焼成破裂土器片や層状焼成破裂土器の焼成失敗品は、再利用されずに焼成場周辺に廃棄されていると考えられ、土器焼成や土器づくりの場を特定できる資料である。

文京遺跡では、弥生時代中期後葉～後期初頭、東西300m前後、南北200mほどの広がりをもつ大規模・密集型の集落が営まれる。12次調査区では、焼成破裂土器片や焼成時破損土器が出土し、焼成破裂痕に破裂土器片が接合する事例もある。さらに、土器づくり用と考えられる灰黄色の生粘土塊が土壙内に埋置された土壙も確認されている。こうした資料から、弥生時代中期後葉～後期初頭には12次調査区周辺に土器の焼成と生産が行われていた工房区域が想定されていた。また、当該期の甕の中で特徴的な形状をもつ事例から、文京遺跡で生産された土器の基本的な供給圏は、文京遺跡を中心として展開する東西２km、南北１kmほどの道後城北遺跡群におさまることが明らかにされている(註2)。

今回の調査で出土した資料は、弥生時代後期前葉～中葉のものであり、これまで知られてきた土器焼成失敗品よりも若干新しい時期の資料である。その点からは、地点を移動しながら継続して土器生産が行われていたことを指摘できる。

今後、文京遺跡で生産されたことが確実な土器の形状や文様の詳細な特徴を明らかにすることと、さらに胎土分析で胎土の特徴を把握することで、想定されている土器の供給圏の検証や、文京遺跡や道後城北遺跡群をこえた土器づくりの技術交流の様態を検討し、松山平野における文京遺跡の弥生時代集落の位置付けをより鮮明にできるものと考える。本報告では、その基礎作業として、一括性の高い遺構ごとに、出土土器に施された凹線文の施文方法に注目して、その特徴の把握に努めた。

（3）SB-51と文京遺跡３・７次調査出土の大型掘立柱建物

調査区北端のDF-23区で出土したSP-395・399は、径65～70cmの掘り形をもち、直径25～27cmと30cmの立柱痕跡を確認でき、SB-51として報告した。出土土器は細片ばかりで量も少ないが、弥生時代中期後葉～後期初頭に比定できる。ただし、SB-51が営まれた部分の調査範囲は狭く、建物の全体像を明らかにすることはできなかった。

しかし、前述したように当該期の１×１間や１×２間の小型掘立柱建物や竪穴式住居跡の立柱痕跡は直径15～20cmであることが一般的で、SB-51の立柱痕跡は２倍の大きさで、大型の建物であることが考えられる。

周辺では、西側20mの３・７次調査区で２棟の大型掘立柱建物が確認されている（Fig. 157）。その掘り形の規模はSB-51と共通するが、立柱痕跡の直径は30～40cmで、一回り大きい。そのため、SB-51を大型掘立

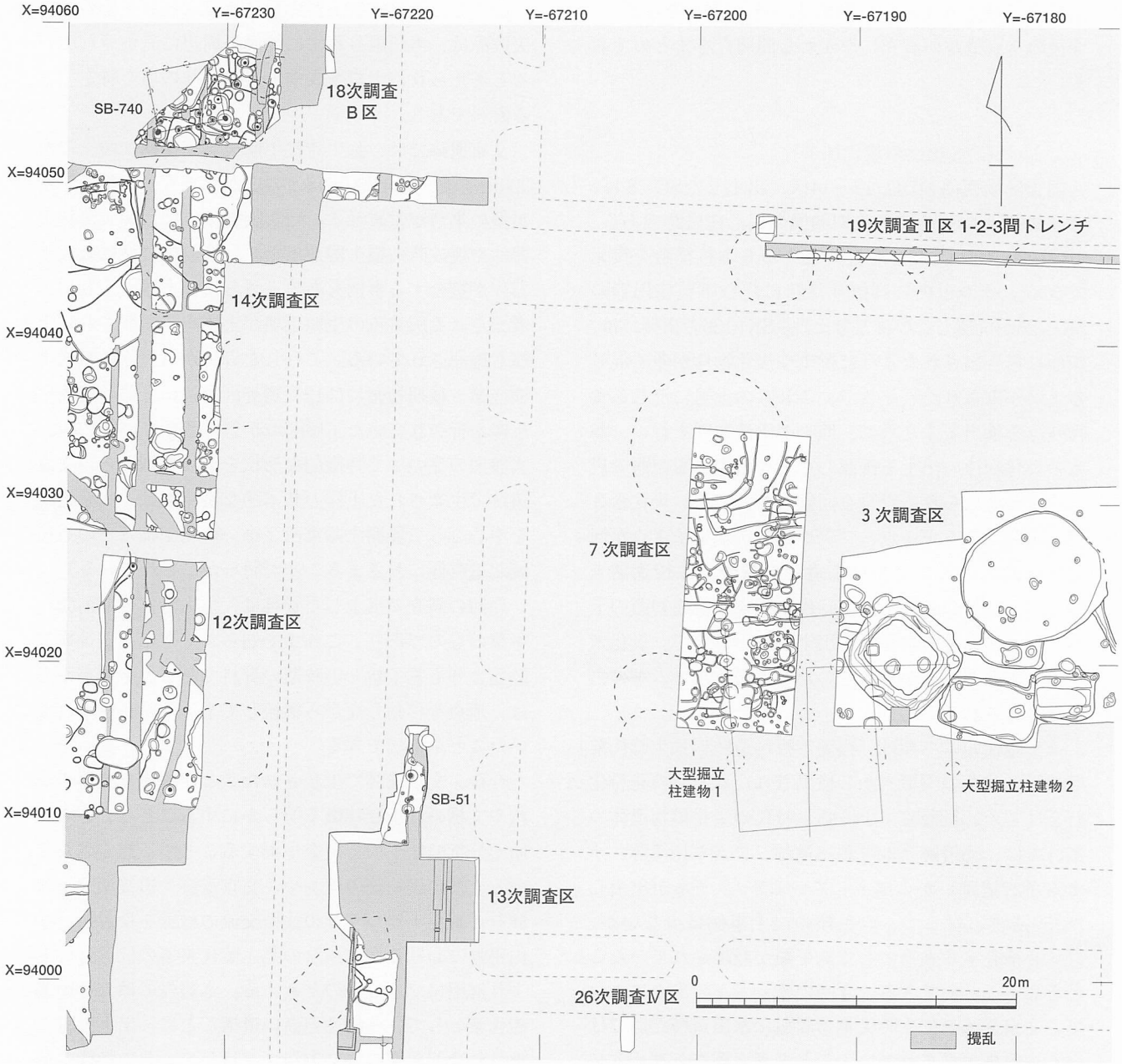

Fig. 157　13次調査SB-51周辺の遺構配置図（縮尺１/400）

柱建物とするには躊躇する。

ほぼ同じ大きさの掘り形や立柱痕跡が確認されているのは、北側40mに位置する18次調査B区南端で出土したSB-740である（Fig. 157・158）。18次調査SB-740は、3×3間の掘立柱建物で、四隅の柱穴がSB-51とほぼ同じ規模をもち、大型の高床倉庫と考えられる。今回出土したSB-51も同様な建物である可能性が高い。

そうなると、3・7次調査で出土した弥生時代中期後葉～後期初頭に営まれる大型掘立柱建物は、単独で営まれたのではなく、周囲に比較的大型の倉庫群が付属することが想定できる。こうした大型掘立柱建物に倉庫群が伴うことは、岡山県窪木遺跡で出土した弥生時代後期前葉の壺に描かれた線刻絵画からも復元できる。今後、周辺の調査が進むことで、文京遺跡における当該期の大規模・密集型集落における中枢部分の解明が進むものと考えられる。

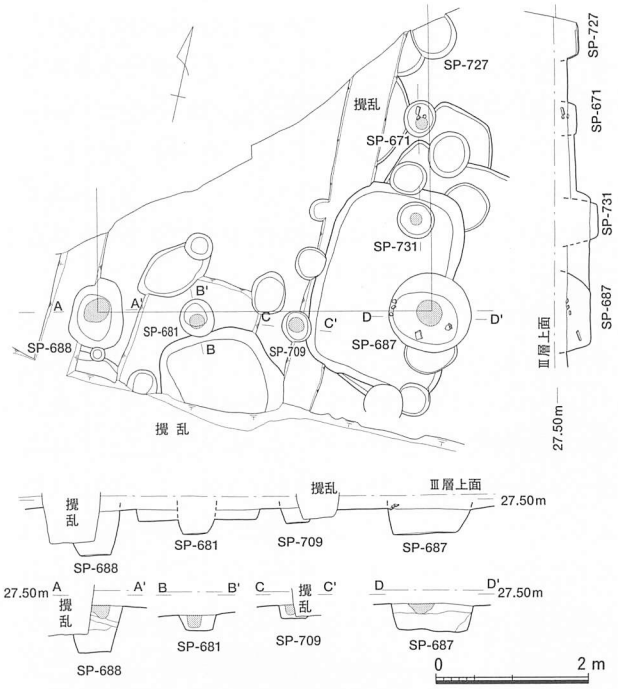

Fig. 158　18次調査B区SB-740遺構実測図（縮尺1/100）

2　古墳時代

今回の調査におけるもう一つの調査成果は、古墳時代後期の集落遺跡を調査できたことである。建物本体部分にあたるCX～DG-11～15区で、竪穴式住居跡15棟・掘立柱建物13棟・杭列（柵？）3条・土壙などが出土している。これらに、鍛冶炉SF-41や、性格不明の炭化物や焼土の集積が伴うと考えられる。

ところが、これらの遺構は古墳時代後期の時間幅の中で幾重にも重複し、出土遺物の大半が遺構廃絶後の埋没過程で流入・混入したものである。弥生時代だけではなく古墳時代中期の5世紀代の遺物さえ混入している。そのため、単純に出土土器から、さらに細かな時期を比定することはできない。

（1）古墳時代後期の集落の変遷

ところで、古墳時代後期の遺構に伴う須恵器、その中でも坏身は、田辺昭三編年[註3]にしたがうとTK-10～TK-217型式段階、中村浩編年[註4]ではⅡ型式2段階～6段階、6世紀中頃～7世紀前半の時間幅の中におさまる。ところが、田辺編年や中村編年とは異なる特徴も見出せる。そこで、遺構の切り合い関係を基準として古墳時代後期の遺構群の分期を行い、これに伴う出土須恵器、とくに坏身の型式の特徴を明らかにし、当該期の集落の変遷を整理した。

さて、坏身は形状的な特徴からA～Eに区分できる（Fig. 159）。坏身Aは、口径13～14cmで、器高5cm前後で、口縁立ち上がり部は緩やかに内傾し、口縁端部を回転横ナデする結果、内面に浅く細い段状の沈線が巡るものがある。坏身Bは、口径12～13cmで、坏身Aと比べて口縁立ち上がり部が短めで内傾度合いも強い。口縁部の立ち上がりが長く、口径が小さめなものもあるが、受け部径は一定している。また、坏身Aとともに、口縁端部の回転横ナデで内面に浅く細い段状の沈線が巡るものが含まれる。坏身Cは、坏身Bと同じく口径12～13cmであるが、口縁立ち上がり部が短く高さも低い。また、器高が低く身が浅いものが含まれる。坏身Dは、口径10～11.5cm、器高3.5～4cm前後と小型で、口縁の立ち上がりは短く、高さも低い。立ち上がり部の断面が低い三角形状のものがある。坏身Eは、坏身Dよりも小型で、口径9cm、器高3.5cm前後を測り、口縁の立ち上がりは短く低い。坏身Dと同じく、口縁の上がり部の断面が低い三角形状のものがある。